
【テファの使い魔】

あああああ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【テファの使い魔】

【Nコード】

N 3 6 6 3 M

【作者名】

あああああ

【あらすじ】

テファことティファニアに召喚されたのは才人と同じ世界の人間だったが彼の止まることを知らない好奇心はやがてルイズは才人も巻き込んで思わぬ方向へと向かって行ってしまう？

一話（前書き）

思いつき万歳！

一話

「おいクリフ。ちょっと頼めるか？」

雪に閉ざされた森の中にぽつりと佇むテント群の一つに軍服を着た男が手を擦り合わせながら入ってきた。男は鼻を赤くし、凍える手に息を吹きかけて手を温めている。

そんな男はテントの中に灯る火に集まる人間の中から一人の男を呼び出す。彼もまた寒かったのだろう。手を火に近づけながら仲間の兵士と談笑している。

「どうしました？戦車の故障ですか？」

「いやそんな大した用じゃないさ。ちょっと夕飯を作るのを手伝って欲しいんだが」

クリフはすぐに立ち上がると凍えている仲間に連れられてその場を後にした。

ここはフィンランドに近いソビエト領の森の奥深く。そんな場所にいる彼らはソビエト連邦の軍人だ。彼らがこんな地にいるのはもちろん軍の任務のため、簡単に言うフィンランドを攻め落とす先兵という任についている。

5台の戦車と70人ほどの部隊である彼らはここしばらくこの森に滞在しておりあまり動こうとしない。色々軍事的な理由もあるのだが、それ以上にこれより先に進めばフィンランド領に侵入することとなり補給を行うのが難しいというのが難点だった。

「食料は一応あるんだが……………」

「何を作るか……………ですか？そうですね、ドイツのジャガイモ料理なんてどうでしょうか？」

今のこの位置でさえ補給はあまり容易とは言えないので、食料の備蓄はあるにはあるがあまり多く使いたくは無いらしいというのがこの軍を率いてる人間の本音だ。

それ故に料理はシンプルかつ満腹になれる美味しい物でなくてはならない。しかし彼らは所詮軍人、料理なんて軍事訓練などでつく程度の物しか作ったことはない。そんな時に役に立つ人間、それがクリフだった。

彼は若干18歳の若さで戦列に加わり、そしてスナイパーとして功績を挙げた。まさに天才といった人物なのだ。

「ふむ、ドイツ料理か……………興味はあるな。作れるのか？」

「任せてください。2年前の独ソ不可侵条約の締結時にドイツに行ってきたんです。その時に覚ええました」

「お前は本当に何でも出来るなあ……………料理も戦車の整備も果てには天才スナイパーだ」

「知りたいこととやってみたいことだらけなんですよ。自分はただ欲望に忠実なだけです」

ジャガイモを茹でながら笑みを浮かべるクリフは何も謙遜などではない。

クリフは本当にただ単に色々なことが知りたい性分なのだ。子供

の頃は『どうして？ねえどうして？』が口癖となり大分回りの人間を困らせたことを彼は知らないだろうが、その後の彼は誰に頼るでもなく自分から知識を捜すようになっていった。

だが彼が生まれたのは広大なソビエト領土の中でもかなりの、いや……超ド級の田舎町だった。本なんて聖書か農業の本ぐらいしか存在しない。だから彼は若干13歳の若さで単身ソビエトの首都に赴いたのだ。そして彼は思った。

『世界はまだ自分の知らない物で溢れている！』と。

噂に聞いていたシベリア横断鉄道。見たこともない高い建物、そして武器なんて猟銃しか見たことの無かったクリフの目の前に現れた数々の近代兵器達。

今まで田舎で刺激の無かった彼にとってこれほどまでに心が躍ったことがあっただろうか。そして彼は決意した。

『今度は俺が世界を驚かせるような物を作ってやる！』

だがしかし彼にはお金が無かった。金が無ければ知識をつけるための本はおろかパンさえ買うことが出来ない。だが彼に妙案が浮かぶ。

今一番金を持っているところを考えてみる。そう、軍だ。軍に入れば最新の軍事技術を見せてもらえるかもしれない（もちろんそんなことはないのだが）。それにお金も手に入り、さらには色々な場所にも行くことが出来るようになる。

身の危険という不安要素を考えていない、というか頭から排除されているのか、彼は目を輝かせながら軍の駐屯地へと向かった。

「欲望に忠実ねえ……まあ言ってるわな。最初お前が来た時もとんでもない奴を入れてしまったって皆言ってたぞ」

「ははっ、ギート少佐には苦勞かけましたね」

ギートと呼ばれたクリフの上官は謝罪の意の欠片もない笑みを浮かべるクリフを見て大きなため息をつきながら当時のことを思い出してみる。

突然自分のいる駐屯地にやって来た少年は何を言うかと思えば自分を軍に入れてくれと言い出した。最初は迷ったが、これから戦争になるのは目に見えていたため、自分の上司達は二つ返事で許可を出した。自分としてはこのような少年を戦場に出すのが気後れするためあまり軍に入れるのはと思っていたが、現実は違った。

クリフはその貪欲なまでの知識的欲求を軍事関係に注ぎ込んだ。戦車などの運転の仕方、整備、さらには軍略などにも手を出し始めた。だが、その貪欲すぎる欲求のためにたびたび問題を起こしギートに頭を殴られたのは本人はいい思い出と思っっているのだが、そのたびに肝を冷やす思いだったギートにしてみればたまったものではない。

そしてクリフは次第にその欲望の矛先を軍事以外にも向け始める。きっかけは些細なこと、電球すらまともになかった田舎では都会にあるものの全てが宝に見えたからだ。そしてクリフは日用品の製作、電気エネルギーの理論の習得、建築関係の知識まで手に入れた。

「そんだけ色々なことが出来るならこんな危険な場所におらずに事業でも立ち上げれば良かったんじゃないのか？」

「それも考えたんですけどね。軍にいた方が圧倒的に得られる知識が多いんですよ。今は軍事が一番の課題ですし」

「まあそうだが……それだけの知識があればお前一人で何か新しい物でも発明できるだろうに」

「俺はまだ煮詰めた知識は持ってませんよ。電気のことと建築のことと戦車のことも基本を押さえた程度の知識ですから」

と言つてもその知識自体かなり専門的な物のため一般人からしてみれば天才と言うほかにはないのだが。だが彼が本当に天才だと周りに知らしめたのは知識ではなくその銃の腕前だった。

今まで自分の探求心と知識欲のために何度となくシベリアの針葉樹林の中へと遊びに行っていた彼に、両親は8歳の頃にはもう折れてしまい、結果彼に身の守り方を教えるはめになった。

クリフとしては銃の使い方を覚えられ、しかも森の奥深くまで行くことが可能になるためすぐさま銃の使い方を覚えた。そして彼は8歳から村を飛び出すまでほぼ毎日猟銃を担いでは森の中を探索していたのだ。銃の腕前が上がらないわけがない。

「銃の知識だけなら誰にも負けませんね。これだけは自信ある知識ですよ」

「それは誰も否定できんな。そうだ、この間お前が作っていたサプレッサーとかいうあれ、首都では量産体制に入ったらしい。多分今度首都に帰還したら何かしらの処遇があるだろうな」

「そうですね。そうしたらまたあいつが悔しがるかも」

「あのフィンランド軍のスナイパーか？名前は……たしか」

「シモ・ヘイヘですよ。あいつかなり強敵ですから、少佐も名前ぐらいは覚えておいてくださいよ」

「この前はそいつのライフルに弾丸お見舞いしてやったんだろ？そ

んなことするぐらいならさっさと仕留めろよ」

「いやあ、あいつ悪い奴には見えなくて。何となく気も合いそうだし」

このフィンランド遠征に出る前、彼は家で作っていたサプレッサー（サイレンサー）を軍の方に預けていた。こういう物があつたら便利ですよな程度で上に話してみるつもりが、なんとクリフが作った物をほぼそのまま量産する体制になったのだ。

クリフは驚きつつもこれで銃での攻撃はさらに容易になることに嬉しさを覚えていた。

そしてそれを聞いて地団駄を踏む人間、それは今戦っているフィンランド軍のスナイパーだ。彼はクリフのことを永遠のライバルだと思っているのだが、クリフはそんなこと全く考えておらず、ヘイへのことをよく絡んでくる奴程度の認識だった。

ヘイへは自分が手加減されて命拾いさせられていることに激怒し毎回クリフに挑んでいるのだが、その結果は毎回クリフの圧勝だ。そしてそんな腐れ縁からクリフはヘイへのこと友達になれないかと考えていたが、ヘイへはクリフが憎くて仕方がないのを本人は知らない。

「それにしても寒いですよな。……あつ、ライフルの整備頼まれてたの忘れてた……………あの、少佐」

「構わんさ。お前の話で料理の想像はついた。後は任せろ」

料理が趣味という軍人らしくない少佐はクリフの説明でおおよその見当はついたのか、自分で塩などを加えて味付けをしてゆく。やはりかじった程度のクリフとは知識の深さが違う。

そんな少佐の真剣に鍋を見つめる顔を見て笑みを浮かべながらク

リフはそのテントを後にした。どんな味付けになっているのかを楽しみにしながら。

「えーっと……ああこれか、ライアンの言ってたライフル。………
…若干ガタが来てるかなあ？」

仲間にライフルの整備をお願いされていたクリフは武器の保管庫に向かうと一っただけ分かるように置いてあった銃を手に取り丹念に調べ始める。

話には撃ってる感覚が少し変わってきたとのことだったが、おそらく銃口が僅かに変形しているのが原因だろう。撃つには影響はないが友のライアンはそれが嫌らしい。

クリフは銃をいじるのは別段苦だとは思っていないので、すぐに修理を始める。だが銃に関しての知識なら誰にも負けないと豪語していた人間だ。その修理はあつという間のものだった。

その次いでとばかりにクリフは自分の愛用しているライフルをバッグから取り出して点検を始める。本当はそんなバッグにいれる人間などいないのだが、クリフはそれだけ銃への思い入れも大きいためライフルや、銃弾、スコープなどをまるでヴァイオリンケースのようなものを作って保管していた。

点検と言っても彼が自分の銃をぞんざいに扱うはずもなく、点検という名のただの鑑賞だ。そうしていつものように銃を点検していると不穏な気配に気付く。

「そこにいるのは誰だ！」

持っていたライフルをしまつて保管庫を後にしようとしたクリフの後ろからなにやら光が漏れ始める。クリフはすぐに懐にあったピストルを取り出すと後ろに向かって構えた。

しかしそこに待っていたのはフィンランド軍人でもなんでもない。

そう、何者でも物ですらなかった。その光の元は銀色の鏡のような物であったが鏡が自ら発光するはずもなく、さらに言えばそんな物はこの軍にはない。

クリフは警戒しながら自分のライフルの入ったバッグを取るとそれを持って銀の鏡へと近づいてゆく。このバッグの底には厚い鉄板が敷いており、重いがその分盾としては申し分ない強度だ。そしてクリフはそれで身を隠しながら少しずつ鏡へと近づいてゆく。

「何なんだ……………これは」

未だ警戒は解けないがいきなり目の前に現れた謎の存在にクリフの探求心は大きくくすぐられた。そして彼はやってしまったのだ。手を近づけ、そして銀の鏡に触れる。しかしそれからはどうにもならなかった。

「なんだこれ！？くそっ、離れない！」

手は徐々に鏡に吸い込まれてゆき、そしてそれは軍人の彼の力でも抜くことは出来なかった。そして彼の左手は完全に鏡に飲まれてしまい、そしてついには右手に握っていたバッグごとクリフの体は銀の鏡の中へと消えていったのだった。

二話（前書き）

プロローグは急ぎ足に

二話

「テファ、今帰ったよ」

「お帰りなさいマチルダ姉さん」

森の中に立っている小さな小屋の中で子供達と遊んでいたテファと呼ばれた女性は、小屋に入ってきた女性に対して笑みを浮かべる。その笑みを見てマチルダと呼ばれた女性は笑みを返すと両手に持った食料をテーブルの上に置いた。

「これで二週間は過ごせるはずさ」

「ありがとうマチルダ姉さん。それじゃあすぐに準備するね」

テファことティファニアはある理由からこのような辺鄙な場所に住んでいた。

それは父のモード大公は国王に隠してティファニアの母を愛妾としていたが、国王に知られ、母子の追放の命令も拒否したため、投獄されて殺された。ティファニアは母親とともに、モード大公の直臣であるサウスゴータの太守に匿われたが、隠れ家を探し出した王家の軍により母親を殺されたという暗い過去を持っている。

そしてマチルダことマチルダ・オブ・サウスゴータはアルビオン貴族の出身。彼女の父親はサウスゴータの太守をつとめ、王弟モード大公（ティファニアの父親）の直臣であった。

その忠誠心からテファのことを匿ったのだが、それ故に貴族とし

ての権力を剥奪されてしまったのだ。

「悪いね、テファ。１０歳のお前に子供達を押しつけてしまって」

「気にしないでください。マチルダ姉さんには感謝こそしても嫌だなんてこと一度も思ったことはありませんよ」

柔らかな笑みを浮かべてそう言ったテファの表情は子供を持つ母のような慈愛に満ちていた。歳に不釣り合いな大人びた表情を見てマチルダは「そうかい」と頬杖をつきながら笑みを浮かべた。

孤児達を集めて一緒に食事を終えたテファとマチルダは孤児達を遊ばせて二人は食器を洗っている。子供達の賑やかな喧噪を聞きながらテファとマチルダは黙々と作業をしていると、ふとマチルダが呟く。

「なあテファ。大丈夫か？」

「はい？どうしたんですか、いきなり」

たまに後ろで遊ぶ子供達を見ながらも作業の手を止めないテファ。その姿は主婦と言っても過言ではないほどしっかりしているが、マチルダには子供が無理をしているようにしか見えない。

自分もまだ１８歳だがテファはどうだ。１０歳の子供だ。自分が遊びたいのを我慢して家事をしているのではないだろうか。甘えたい気持ちを押し殺して自分に協力してくれているんじゃないだろうか。

そんな疑問や不安がマチルダの中をグルグルと渦巻いていた。テ

ファには幸せになって欲しい。だからこそこでの生活をどうにか
打開したいが、今の状況ですら手一杯なのだ。

だからマチルダはテファに対して「楽してもいいぞ」とか「私に
任せろ」と言ったことが言えないのだ。だから「大丈夫か」としか
聞けないのだ。

「私は今の生活に満足してますよ。マチルダ姉さんがいて、みんな
がいて……十分じゃないですか」

その言葉にマチルダはテファの優しさと自分の不甲斐なさに涙が
出そうになる。

（私は10歳の子供に何を言わせてるんだ……私が力不足なせ
いで……テファは……）

皿を洗う手が止まったマチルダを見てテファは不思議そうにその
顔をのぞき込むと、マチルダは潤んだ瞳を伏せて唇をきつくかみし
めていた。

テファは突然のことにオロオロとしてマチルダを慰めようとして
いるが、その姿がおかしかったのか、マチルダは右往左往するテフ
アを見て自然と笑みが戻っていた。

その後は子供達と一緒に小屋の近くで遊ぶ。マチルダは街へと働
きに出ているため帰ってこれるのは虚無の日という休日だけだ。故
に子供達は皆マチルダの元に集まって「魔法を見せて！」などと言
って輝いた目をマチルダに向ける。

「じつとしてなよ………そら！」

「うわぁ！？……すごい！」

子供三人を一箇所に集めてその下の土を魔法で盛り上がらせて3mほどのタワーを作る。その上にいる子供達はさぞかしい眺めを見ているだろう。

ご満悦の子供達を見てマチルダは口元を緩めながらそのタワーを元の地面へと戻す。帰ってきた子供達の頭を撫でながら次の子供達のお題を聞いていると。

「お姉ちゃんは使い魔っているの？」

一人がそんなことを言い出した。確かに自分には使い魔はいるがそれより何故この子供達が使い魔なんて知っているのだろう。

教えた覚えはないのだが……。とマチルダは考えていると、どうやらテファからその子は聞いたようだ。そこでマチルダはあることを思いつく。

「テファ、ちょっといいかい？」

近くで女の子に囲まれて花飾りを作っていたテファを呼び寄せる。とマチルダはあることを持ちかける。

「テファ、サモン・サーヴァントとしてみないかい？」

「それって使い魔を召喚する儀式のことですよ？でもそれって魔法学院の1年生が最後にやる儀式じゃ……………」

一般ではサモン・サーヴァントは魔法学院に通っている者でなければ行えない。しかし貴族でないなら別だ。

肝心なのはその儀式の術式が難しいことにあり、いや、儀式自体はとても簡単に終わるのだが、それに用いる特別な魔法陣は学院の教師でも無い限りはまともに描くことができないのである。

しかしどうだろう。マチルダは貴族の中でも特に英才教育を受けていたためそのような知識も備わっている。小屋にある実家から持ってきた魔法書の中にもサモン・サーヴァントに関することが記述されていたはずだ。

「でもいきなりどうしてそんなことを？」

「なに、ただいた方が便利だと思ってね。もし使い魔が強ければ私がない間も安全だし、弱くても子供達の子守ぐらいは出来るだろう？」

そうすればテファの負担も減ると思ってね。だからテファ、やってみないかい？」

自分はお金を稼いでくることぐらいしか出来ない。しかしそれは最低限の生活を営むためのものだ。テファには可愛い服を買ってやりたい。女の子としてもっと遊ぶ時間を作ってやりたい。

しかしそれは現実的に考えて無理なことだった。だからマチルダは気を許せるような、テファが頼れるようなそんな存在、パートナーを与えてやりたかったのだ。

その意志を読み取ったのか、そうではないのか。テファは少しだけ考える仕草をした後に「やってみたいです」と花のような笑顔を浮かべた。

草の上に白線で魔法陣を書き込んでゆく。緻密に、精密に。その様子を子供達は物珍しそうに眺めているとマチルダが額の汗を拭いながら立ち上がる。

まあこんなものかと呟いた彼女は魔法陣を消さないように歩いてテファの前に移動する。

「呪文は考えたかい？まあそんなに肩肘張らないでも大丈夫だよ。テファならきつと成功する」

「はい……では」

テファは若干緊張した面持ちで魔法陣の中心へと赴くと小さな体を大きく動かして深呼吸をする。

自然と子供達にもその緊張がシンクロしているのか、誰一人喋ろうともせず、ただジツとテファのことを見つめていた。

そして三度目の深呼吸を終えたテファ、「いきます」とだけ呟く。

「この世界のどこかにいる誰か。私の力になってくれる誰か………
…来て下さい！」

その呪文は何とも締まらない物だったが、その瞬間辺りが強い光に包まれる。

マチルダも使い魔召喚を経験したことのある人間だ。だからこそ分かる。

（何だこの光は！？くう……目が開けられない……一体何が！？）

強烈な光に子供達も悲鳴を上げて目を瞑っているが、マチルダは光の中心にいるテファの身が気になった。

この光は大丈夫な物なのか、あの子の姿が見えない。あの子は、テファは無事なのか。

目を瞑りながら恐る恐る魔法陣へと歩み寄ってゆくマチルダはやがて光りが収まっていくのを確認しながらテファの横に並ぶ。

そして彼女は見た。目の前で呆けている青年を。

三話

何だろう。何なのだろう。

自分は未だ光りに目を焼かれているのだろうか。だからこんな幻が見えるのだろうか。

彼女は目の前でポカンと口を開けて呆けている青年を見て自分の目を擦ってもう一度確認する。

やはり青年だ。見慣れない格好で何か大きなケースを持つてはいるがそれ以外は普通の青年だ。

マチルダはもう一度目を擦って今度は睨みつけるように確認するがそこにはやはり同じものが写っていた。

「あの……マチルダ姉さん。……この人って」

「言っな………ちょっと整理をさせてくれ」

マチルダが頭を押さえて大きなため息をついているうちにテファは何を思っただか青年の前にしゃがみ混んだ。

それに対して青年は何かを言っているが、テファにはそれが理解出来ない。きっと何かを聞いているのだろうか。キョロキョロと辺りを見回しながら自分の知らない言葉を喋りかけてくる彼にテファはいきなりキスをしたのだ。

「なっ！？テ、テファ！？」

突然の行動にマチルダは驚きを隠せない。サモン・サーヴァント

から人間が召喚され、そしてそれを使い魔とする。全くもって事例がない。

自分の術式が違ったのか、この青年をどうしたものか、少なくともこの地に住まわせることは自分達の正体を隠すために出来ないだろう。

そう考えていた矢先にテファは彼を使い魔にしたのだ。驚かない方が無理がある。

「な……な……なにを……」

「テファ！ 使い魔を召喚しろと言ったのは確かに渡しだけど……それでもこれは……」

「マチルダ姉さん」

ワナワナと震えている青年を尻目にマチルダはテファに詰め寄るが、テファの眼を見てマチルダは少しだけ臆する。

「確かに彼は人間です。でも今の彼の言語を聞いたらハルケギニアの人間でないのは確かです。おそらくは東方や、もしくはもっと遠い場所から来たんでしょう。」

私にはこの人を呼び出してしまった責任があります。それに……

……

「……それに？」

「悪い人には見えませんか」

苦笑ともとれる笑みが向けられた先は顔を真っ赤にして狼狽えている青年。彼は時折テファの方を見ては顔を赤らめていた。

そんな生娘のような反応を見てマチルダも「しょうがないね……」
と自分の責任を実感しつつ納得することにする。

とりあえずこの青年のことを知らなければ何も始まらない。でも
言葉が通じないのでは……と考えていた矢先、マチルダはふとある
ことに気付いた。

「ん？お前言葉が通じるようになってないかい？」

「え、俺？……………本当だ。っていつかここはどこ！？あんたらは
誰！？」

「そう慌てないで下さい。とりあえず家に行きましょう。話はそこ
からです」

テファは青年を立ち上げらせるとその手を取って小屋まで青年を
導く。引かれるがままに青年は金髪の少女の後について行くとそこ
には木で作られた小屋が一軒。

その中のテーブルを挟んで座ると、今度はマチルダが子供達を連
れて小屋へと入ってくる。子供達は青年を警戒しながらもマチルダ
とテファの服にしがみついていた。

（ヨーロッパ系の顔付き……………でも今は冬のはず。じゃあ赤道付近か
？移民でもしてきたのかな。でもじゃあ俺はあの鏡に入ってからど
れぐらい経過したんだろう……………）

目の前にいる人達の顔はアジア系でもなく黒人でもない。自分と
同じヨーロッパ系の顔なのだが自分の知るヨーロッパは今は冬だ。
しかしこの麗らかで冬用コートでは暑すぎるほどの陽気はまさしく
春。

自分は春になるまで眠らされていたのだろうか？それとも赤道付

近まで島流しにあったのだろうか？様々な理由が思い立っては消えてゆく。どれもこれも非常識すぎるからだ。

「あのー……ここは一体どこですか？」

「ここはハルケギニア大陸に属する浮遊大陸、アルビオン王国だよ。あんたはこの出身だい？東方の民族かい？」

待て。今何と言った？

ハルケギニア？浮遊大陸？アルビオン王国？東方の民族？何だそれは。全てが全て知らない単語。それを当たり前かのように話す彼女は何者だ？いや、今彼女の身柄はどうでもいい。

青年は自分は結構知識はある方だと思っている。それは分野にかかわらず広く無難に。だから世界地図の大まかな国の名前は覚えていたはずだった。しかしどうだろう。彼女の言った国を世界地図で見たことがあっただろうか。

「あの、すみません。とりあえず自分の紹介してもいいですかね？」

「はい、お願いします」

「自分はソビエト連邦軍第129小隊のクリフ・ヤミノスコフ少尉です。とりあえずこのハルケギニア大陸で一番大きい国の名前を教えてくださいてもよろしいですか？」

クリフはハルケギニアという大陸名を知らない。しかしそれがアフリカ大陸の現地民の呼び方だったらと考えたのだ。故にクリフはこの近くで一番大きな国の名前を聞いた。

世界の主要な国の名前は覚えている。そしてこの二人の女性の口から出る国名をクリフは知らなかったらクリフは八方塞がりになる

だろう。

「一番大きな国ですか……それはガリアでしょうね。人口も一番多いですし」

「それはどれくらいの人口がいるのでしょうか？」

「そうですね……700万ぐらいじゃないでしょうか？詳しいことは分かりませんが……」

終わった。クリフの頭の中にそんな言葉が出てくる。自分の頭の中にはガリアという国名はない。

クリフはもう帰ることは不可能な場所に流されたと内心落胆しながらもここに至るまでの経緯を二人に話した。

それはフィンランドに攻め入るために国境付近にいたこと、そしてそこで自分は銀の鏡のような物に引きずりこまれたということ。

それを聞いてどうだろう。テファとマチルダは先ほどのクリフと同じような顔をしていた。

「ソビエト？フィンランド？どこだいそれは……東方の地にはそんな国があるのかい？」

「いえ、東の方角というよりはソビエトは北の国ですかね。でも人口はおそらく一億ほどだったと思いますよ」

人口一億。その言葉を聞いた瞬間テファとマチルダの顔が驚愕に染まる。それはそうだろう。自分達の常識では人口は1000万あれば尻餅をつくほど驚くのにクリフはその10倍の人口をさらりと言ったのだ。天地がひっくりがえるほど驚いても無理はないだろう。そしてマチルダとテファは薄々分かってゆく。自分達は想像以上

にまずいことをしたのではないのだろうか。

「あの……私の経緯はこれが全てです。ですからあなた達の経緯を教えてはくれませんか？」

銀の鏡、そして引きずりこまれた。これは明らかに使い魔召喚の影響であり十中八九自分達が悪いことになる。それを告げたら彼はどうなるだろうか。

だがこれは自分達の責任。二人は怒鳴られるのも蔑まれるのも覚悟してクリフと向き合うとゆっくりと口を開いた。

その口から告げられるのは魔法と使い魔のこと。自分達が思いつきで召喚をしてしまったためにクリフはここにいるということ。

全てを告げた後テファは「ごめんなさい」と深々と頭を下げた。マチルダもそれに習って頭を下げている。

「……………」

彼からの言葉が飛んでこない。呆れているのだろうか。蔑んでいるのだろうか。それとも驚愕に捕らわれているのだろうか。少なくとも自分達に好意を持って接することはもうないだろう。

そんなことを考えながらマチルダは嘲笑を浮かべる。

「なああんだ……………」

そう思っていたらクリフはマチルダに話しかける。彼の目は今どんな目をしているのだろうか。

これから起こる最悪の事態を思い浮かべながらマチルダとテファは頭を上げるとそこにはキラキラと輝いた瞳が二人を待ち受けていた。

その瞳は先ほど子供達に魔法を見せた時の眼と一緒に言うても過

言ではないほど無垢で純粹に輝いている。自分達の立場も状況も忘れてその瞳を綺麗だななどと考えているとクリフがテーブルに身を乗り出して来る。

「あんた今魔法って言ったか！？あんた魔法が使えるのか！？」

「え……あ、ああ。まあ。一応はメイジさ。でもそんなにメイジが珍しいのかい？」

「少なくとも俺の世界にはメイジや魔法なんて物はなかった。で、物は相談なんだがその魔法とやらを見せてはくれないか？」

自分達に拒否権はないだろう。無理矢理こんな土地に連れてきてしまったのだ。そんな彼からのお願いを無碍に断ることはマチルダもテファもすることが出来なかった。

三人は再び小屋の外へと出るとマチルダが5歩ほどクリフより前へと出る。

「私は土魔法が主なメイジさ。だから見せてやれるのは土魔法だけだけど構わないかい？」

「ああ、よろしく頼む」

「了解……それじゃあ」

マチルダは大きく息を吸い込むと土のゴーレム達を作り出す。それらはクリフへと歩み寄りその手を引くと今度はクリフが立っている地面が浮かび上がった。

「うおおおおー！？」

先ほど子供達に使った魔法なのだがクリフは子供達よりもいい反応をしたので思わず皆から笑みがこぼれる。そして地面へと下ろされたクリフは呆然とその場に立ち尽くしてしまった。

「どうしたんだ？」とマチルダの問いにも答えずにただただ立ち尽くすクリフの眼に何が写っているのかは分からない。だが彼はやがて体を震わせてその喜びを表した。

「すげえ！凄すぎる！！魔法！？なんだよそれ！凄すぎるだろ！」

歓喜の声は森に響き動物たちをも踊らせる。両手を広げても、飛んでも跳ねてもこの人生最大にして最高の喜びを表すことは叶わない。

それほどまでにクリフは歓喜したのだ。今もまだ鳥肌が止まぬ状態で言葉にならない気持ちをつ天へと向かって叫び続ける。血が滾り、昂揚する体を何とか鎮めたクリフは地面に大の字になると空を見上げる。

「ふう……………」と一息ついてもクリフのにやけ顔はまだ収まらない。そんな状態の彼を傍観していたテファは笑みを浮かべ、マチルダは不思議な物を見るような目でクリフを見ていた。

「落ち着きましたか？クリフさん」

「ああ、もう大丈夫。えっと…………君は」

「ティファニアです。テファと呼んでください」

「それじゃあテファ、礼を言うよ。こんな素敵な世界に呼んでくれてどうもありがとう」

寝転ぶ青年とそれを見下ろす少女。二人は互いに暖かな笑みを浮かべながら双方の喜びに祝福を送った。

四話

それから落ち着いたクリフは小屋に戻るとこの世界の常識や歴史、そしてテファとマチルダのことを事細かに聞いた。

貴族の存在、ブリミル教。メイジ……どれもこれも初耳の言葉に心を躍らせていたがテファとマチルダの話を聞いてクリフは「……ごめん」と一言呟いた。

二人はそんなに気にしてはいないと言ってその場の空気を流すと今度はこれからのことについて語り始める。

「でだクリフ。あんたはテファの使い魔になったわけだから主にテファの手伝いとここの護衛が仕事だ。異論は？」

「ないな。俺もただ飯食べる気はないし、なによりそれが使い魔の仕事なら文句はないよ」

話している内にマチルダとクリフは同い年ということが判り、二人はとてもフランクな口調で話している。

「でも大丈夫なのかい？一応あっちの世界じゃ軍人だったって聞いたけど、メイジには勝てると思うんじゃないよ」

「うーん……モシン・ナガンでも通用しないかなあ……」

「も、モシ……なんだいそれ？」

モシン・ナガンM1891/30。ボルトアクションのライフルでソビエトを代表する小銃であり軽くて短いが射程距離は十分あるためクリフは立ち会えなかったが、第二次世界大戦終了まで使われ続けた銃である。

しかしそんな当時の最新の銃もクリフの手によって改造されて長く重くされているが。

百聞は一見にしかず。やっと自分の見せ場が来たとクリフは意気揚々と外へと出て今度は自分が二人より前に出る。

「それじゃあいくぞ……………」

重たい銃を軽々と持ったクリフは何を狙っているのか全く分からない。時折銃の先端が細かく動いているがその先には森しか見えない。

そして弾丸は放たれた。しかしサプレッサーのせいで音はまるで鳴ることがないため近くにいた子供達も変な音がした程度にしか思っていないだろう。

しかしクリフは満足げな顔をしながら銃を肩に担ぐと皆を呼び寄せる。

「それじゃあ取りに行こっか」

「何をですか？」

テファの問いに「行けばわかるよ」と笑って見せたクリフはマチルダとテファを先導して森の中へと入ってゆく。

そして600mほど歩いたのだろうか。マチルダがそろそろ苛立って来る頃にクリフは「あつたあつた」と言っただけに先に走ってゆく。

「これは……………」

「どうしたんでしょうか？」

そこにいたのは死んだ鹿だった。一部から血を流しているところを見るに怪我をしてしまい死んだのかとテファとマチルダは考えているとクリフはその鹿を持って二人に歩み寄る。

「はい、どうぞ」

「え？あの……どういうことでしょうか？」

「いや、これ俺がさっき銃で撃った鹿だよ。だから君にあげる」

それを聞いて二人はギョツとする。あり得ない射程距離だ。この世界の銃といえば火縄銃のような物でせいぜい射程は100m前後といったところだ。しかしどうだろう。クリフはその6倍の距離にある的を射貫いたのだ。

まったく見たこともない武器にあり得ない射程距離。二人はやはりクリフは異世界人なんだと改めて実感しながらもその鹿の肉を使った今晚の献立を考えていた。

その日は子供達との交流会と言う名の大運動会が勃発し、滅多に人に会えない子供達はいきなり一緒に住むことになったクリフを怖がるどころか兄として慕ってくれている。

そのとは大変嬉しいのだが流石に大勢の子供達を一手に相手にするのは軍人でも疲れるようだ。子供達をマチルダに預けたクリフは椅子に腰掛けると大きく息を吐いた。

「ふふっ、お疲れさまです」

「ありがとうテファ。……それにしても子供は元気だなあ……正直驚かされた。あれを毎日相手してるテファは凄いな」

「慣れれば楽しいものですよ。クリフさんのお陰でマチルダ姉さんと二人で料理が出来ましたからこちらとしても助かります」

「俺はテファの使い魔なんだ。当然だろう」

テファに水を貰い、子供に囲まれるマチルダを見ながらクリフは笑みを浮かべる。

ここには何も無いが、その分暖かみがある。首都に行つて軍人となったクリフは故郷に随分と帰つてなかったが、故郷に帰ったらこんな感じなのかなと一人感慨深いことを考えている。

そこでテファと一緒にテーブルに鹿肉を使った料理を並べると子供達を呼び寄せて賑やかな食事が始まった。

「……………やっぱ最高だ」

「何か言いましたか？クリフさん」

「いや、何でもないよ。さあ食べようテファ」

久しく忘れていた感覚が胸に染み入るようにして体を温めてゆく。悪くない。

そう思いつつクリフは和やかな食卓を見ていたのだった。

突然の出来事の連続で疲れていたクリフは遊び疲れた子供達と一緒にの時間に寝てしまうとその深い眠りは朝になるまで覚めなかった。朝は軍に居たときの習慣からか朝日が昇ると自然と眼が開いてしまふ。クリフは子供達を起こさないように小屋を出ると未だ朝霜に包まれた森の神秘的な雰囲気を感じながら森の中へと進んでゆく。

軍を一応除隊したことになるクリフだが今はテファの使い魔として皆を守るといふ仕事がある。だから鍛錬は怠らない。

森の中の隆起した道を走り抜けると今度は適当に開けた場所で筋トレを行う。腹筋、背筋、腕立てと軍にいたときのメニューを消化していき、筋トレを終えて立ち上がった頃にはすでに朝日が昇っていた。

そろそろ帰ろうかと思ったが自分の姿を見てとりあえず川で汗を流してからだということに気付く。走ってくる途中に水のせせらぎが聞こえた。川も近いはずとクリフは再び走り始めた。

微かな音を聞き分けてやって来たのは小さな川。澄んだ水には魚も泳いでいて捕まえてみようかとも思ったが今は汗を流したい。魚には悪いが服を脱いで川の中へと入らせて貰う。

「はあゝ……気持ちいいなあ」

火照った体を冷たい水が冷ましてくれる。静かな森の中に聞こえるのは水のせせらぎだけ。

戦場とは真逆の世界にクリフは緩みきった顔をしていると後ろで何かが動く音がする。気付いていないふりをしてそちらを見るとどうやらそれは動物ではないらしい。

こんな森の中に人がいる。おそらくというか大方の予想は付いていたのでクリフはそちらを向いて名前を呼んでみる。

「テファ、どうかしたのか？」

木に隠れていたのはやはりテファだった。テファは顔を赤らめてクリフを見ないようにしているが時折チラッとクリフを見ては更に顔を赤らめるといふのを繰り返している。

何をしているのだろうと考えていたら自分の格好を見て気がついた。川に入るために全裸だったのだ。それなら女の子が顔を赤らめても背けても無理はない。

「ごめん、今服着るから」

「は、早くして下さい！」

クリフとしては10歳の子供に見られてもなんの羞恥も感じないが相手は別だったようだ。少し声を荒げるテファを言うとおり急いでタオルで体を拭くと岸辺に置いておいた服を着る。

さっぱりとした面持ちでテファの元に向かうと今だにテファの顔は赤かった。

「それで、どうかしたのか？」

「ご飯の時間です。皆待つてますよ」

それだけ言うとテファはスタスタと前に行ってしまう。思った以上にやりすぎたかと考えながらクリフはテファの隣に並んで森の中を歩いて行く。

無言の時間。鳥たちも鳴かぬ静寂の森には木漏れ日が差して光りの道を作っている。

「あの……クリフさん」

「ん？どうかした？」

「本当に……これで良かったんですか？」

それは使い魔になって、この世界で暮らすことを選んでということだろう。勝手に呼び出した本人のテファはやはりまだ罪悪感のよ
うな物があるようだ。

それを取り除くようにクリフはテファの頭に手を乗せる。

「俺は感謝してるんだ。確かにあっちの世界で知りたいことはまだ
まだあったけど、こちらの世界には更に色々な物がある。
だから気にしないでくれ。俺はこれからの生活がとても楽しみなん
だ」

テファの頭を撫でるクリフの姿はまるで父のように暖かだった。

元々大きいクリフとまだ子供のテファの身長差では本当に親子のよ
うに見えてしまう。

テファも頭の上にある大きな手が気に入ったのか、目を細めてそ
れを受け入れている。これで彼女はもうクリフに罪悪感を抱くこと
はないだろう。

「それじゃあ行こうか。マチルダ達を待たせるのは悪いからね」

「はい！」

静かな森の中を二人は無言で歩いて行く。しかしその無言は決し
て居心地の悪いものではない。

「よし、それじゃあクリフ。魔法の訓練を始めよう」

朝食を取り終わって後片付けをするテファを手伝い終わったところでマチルダがクリフを外へと連れてくる。

「あの……俺魔法使えるかどうか分からないんですけど」

魔法を教えてもらえる。それはクリフにとって最高に嬉しいことだが、それ以上に異世界から来た自分は魔法が使えるかということの方が気になった。

マチルダは「うーん……………」と唸っていると何かを思いついたようにクリフを呼ぶ。クリフが立たされたのは昨日クリフが召喚された魔法陣。

何事かとマチルダに聞いてみると。

「この中に立つて使い魔を呼んでみな。魔法の素質があれば何かが出るし、素質がなければ何も起きない。簡単だろ？」

確かに単純明快な方法だが昨日まで魔法の魔の字も知らなかった自分に使い魔など現れるのだろうか。それ以前に使い魔の身分である自分に使い魔が現れるのだろうか？

疑問は尽きないがとりあえず方法だけ聞いて魔法陣の中に立つ。

鬼が出るか蛇が出るか。いや、この場合は何も出ないの比率が一番多いだろうか。

深呼吸を一つしてクリフは考えた呪文を唱えた。

「俺と一緒に皆を守ってくれる使い魔よ……………出でよー!!」

その瞬間昨日のテファほどではないが強い光が当たりを包む。マ

チルダとテファはまた人が飛ばされてくるのかと焦っていたが、その光が止んだところにいたのは……何かだった。

「……………」

「……………」

「おっきいですね……………」

マチルダとクリフは無言でその何かを見ているが、それは確かにテファの言った通り大きい。大きい毛むくじやらの……………何か。その団子のような丸い物体は2mほどもあり小さな山が現れたのかと思った。しかしいつまでも呆けているわけにもいかない。

茶色い山に近づきそれを触れるとモコモコとした毛が暖かく気持ちいいし……………暖かい。

「毛が生えてるし……………暖かいし。多分生き物なんだろうけど……………これは」

「幻獣にもこんなのはいなかったはずだよ。まったく……………昨日と今日でなんでこんなに驚かされなきゃならないんだ」

頂垂れるマチルダを背に子供達はその毛の山が気に入ったのか、目を輝かせながらその山に飛びついた。

「あ！おい、危ないかもしれないから戻って来なさい！」

クリフが忠告するももう遅い。毛を掴んで山の頂上で騒いでいる子供達が山から突然転がり落ちてきた。

なんとかクリフがその子供達を受け止めると次は山へと目を向ける。

その山はモソモソと動き出すとクリフは子供達とテファを後ろに下がらせる。

ついに動き出した。コントラクト・サーヴァントをしようにもこれが生物かどうかすら分からないため手が出せない。マチルダは見たこともない敵を前に息を呑んで杖を構える。

そしてついにその生物は全貌を表した。

「何だようるせえなあ……ってうわ！？眩しっ！……っ！かどこだよこっ」

「……………」

「……………」

「ん？お前ら俺の前で何してんの？っ！かこどこっ？」

「……………モグラだ」

「……………モグラだね」

「……………モグラですね」

茶色い毛の山。それはどうやらモグラだったらしい。顔はクリフ達と反対の方向にあつたらしく、クリフ達はこのモグラの下っ腹を触っていたことになる。

それよりもそのモグラの大きさだ。首を持ち上げて大きな伸びをしなから立ち上がったその巨体は3mはあるだろう。幻獣などと比べれば何も珍しくはないのだろうがどうも巨大モグラと言うと幻獣とも思えない。かと言って突然変異でもここまで大きくなるのもだろうか、と言うより何故喋る？

「ここは……っげ……アルビオンかよ。はあ……どうしてくれんだよ。俺どうやって帰ればいいんだよ………」

「え、えつと……お前は一体何者なんだ？」

「はあ……ん？俺？俺は土の精霊のノーム。っかそれよりどうやって俺をここに呼んだんだよ。それにだなあ………」

そこから始まるのはノームの延々と続く愚痴。ノームはゲルマニアの地下に住む土の精霊だったらしく、寝て起きたらここにいたことにびっくりしたのと、アルビオンからじゃゲルマニアには帰れないと言っているのだ。

それもそうだろう。他の国で呼び出せばどんなに遠くてもノームなら地下に穴を掘って帰ることが出来る。しかしここは浮遊大陸だ。陸続きですらない。

ここからゲルマニアに戻るにはどうしたって空を飛ぶ必要があるのだが、土の精霊は飛べるはずもなく、かと言って飛行船にこの巨大なモグラを乗せるわけにもいかない。

延々愚痴ったノームは最後に何かを諦めたような大きなため息をついた。その姿はどうも年寄りが腰を曲げている姿にしか見えない。

「で？どうやって俺を呼んだんだ？俺には考えられないんだが………」

「俺が使い魔召喚したんだが………」

「は？サモン・サーヴァントだど？」

ノームはあり得ないと言った表情を浮かべた後にその巨体を曲げてクリフの体を睨みつけるような目つきでなめ回す。といってもそ

の目はとてもつぶらで小さな瞳なので怖くもなんともないのだが。
なめ回すように観察した結果クリフは普通の人間だと言うことが
分かった。だが少し魔力が人間のそれと違う。ノームはもしかと思
いクリフにシャツを脱ぐように要求する。クリフは何事かと思いな
がらも渋々上半身裸になる。

「やっぱりな……これで合点がいったぜ」

「どういうことだ？」と三人が首を傾げるとノームは長い爪の生
えた人差し指でクリフの心臓を指差す。そこには何かのルーンらし
き物が刻印のように押されており、それにはクリフも気付かなかっ
たのか突然の自分の体の変化に驚いた。

「な、何なんだこれ!？」

「このルーンの意味は『アウルヴァング』高名な戦士って意味だ」

「高名な戦士？」

「その能力は精霊や妖精の力を借りることが出来るんだ。だから精
霊である俺が呼び出されただろうな」

突然のことにクリフもテファもマチルダも呆然としているとノー
ムは何か思い出したかのように辺りをキョロキョロと見回す。

「お前が虚無の使い魔アウルヴァングだとしたら虚無の使い手はど
こだ？」

「って言うよりその虚無ってなんだ？」

「……………あの、多分私だと思います」

ノームとクリフ、二人そろって頭に？を浮かべているとテファが怖ず怖ずと手を上げる。

「へえ、嬢ちゃんが虚無の担い手か。まあいい。おい、俺を呼び出した男」

「なんだ？」

「俺はお前の使い魔じゃない。第一使い魔が使い魔を呼び出せるわけねえだろ。俺が呼び出されたのはお前、つまりアウルヴァングの呼び声に答えたから来たんだ。……まあ強制だな」

それを聞いてマチルダは顔をクリフから背ける。はつきり言つてマチルダも使い魔が出るとは思つてもいなかったわけで、まさかこんなことになるとは体から嫌な汗が出始めてる。

「そうか……じゃあ俺は魔法は使えないのかな」

「使えるだろ。土の精霊である俺を呼び出したんだぞ？魔力が多いつてことはあつても魔力がないなんてことはありえん」

「本当か！？だったら俺に魔法を教えてくれよ！」

「なんで俺が……………」

「俺が頑張つて魔法覚えてお前を元の場所に返してやるつて！そのためにも魔法を教えてくれ！頼む！」

頭を下げるクリフを見てノームは少し驚いていた。自分を元場所に戻すためにここまで頭を下げる人間がいたのだろうか。精霊である自分にここまで敬意を表す人間が今までいたのだろうか。

最悪この浮遊大陸で住み続けようと考えていたノームだったが、何故かこの青年に可能性を賭けてみたくなったのだ。

「教えるぐらいならな。それと俺にもちゃんと食事出せよ？ただで教える気はねえからな」

そっぽを向いてそう言ったノームにクリフは眩しいほどの笑顔を浮かべながら「ありがとう！」と再び頭を下げた。

そんな様子を見てテファもマチルダも暖かい笑みを溢している。こうしてテファとマチルダの家に新しい住人が一人と一匹増えたのだった。

五話

ノームとクリフが出会ってから早3年。

クリフは毎日ノームに魔法の教えを請い、着実に力をつけていった。

土の妖精のノームを呼び出したクリフだったので当然魔法は土属性。実際はもう一つの魔法も使えるのだが今は置いておこう。

ノームは初めクリフをちょっと虐めるつもりでかなり厳しいメニューを行っていたのだが、元々が軍人のクリフは絶対に不可能なメニューでも死ぬ気で取りかかった。

地面に這いつくばり、指先しか動かなくなっても歯を食いしばって立ち上がる。そんな姿をみてテファやマチルダはおるかメニユーを考えたノームでさえクリフを止めようとした。

だがクリフは絶対に止めようとはしない。それほどまでに魔法への願望が強いという現れでもあり、やはり軍人として音を上げるというのが許せなかったのだろう。

その成果は言わずもなからもの凄い成長具合だった。魔法の基礎を毎日徹底的に体に叩き込み、様々な土魔法をマチルダと共に覚え、磨いていった。

元々トライアングルメイジだったマチルダとの模擬戦もあってクリフは3年でスクエアレベルのメイジとなり、相乗効果でマチルダもスクエアメイジとなったのだった。

そしてそれを見守るテファも急激に成長している部分が一部。クリフはそれを見て「人体の神秘だなあ」などと呟きテファに真っ赤な顔をしながら頭を殴られた。

「がんばれー！姉ちゃん！」

「兄ちゃんも負けるなー！」

マチルダとクリフは今日課となった訓練の締めである模擬戦を行っていた。

二人とも土属性、3年間一緒に技を磨いてきた同士だ。互いの癖や力量を完全に把握している。それゆえにこれはかなり高度な頭脳戦でもあった。

全ての技は相手に知られ、自分はどう動くかも大体予想は付いている。だからこそ二人は基本に立ち返り動き続けている。

動き続け相手に狙わせない。隙を作らない。そして体力が尽きたところで一気に片をつける。

最初は男と女の体格差で押し切っていたクリフだったが最近ではマチルダも体力をつけて無駄な動きを最大まで省いたむしる武術に近いものを編み出したためクリフも容易には勝てない。

「つく！あいつまた制御できるゴーレムの数増えたね……すでに軍隊じゃないか」

愚痴を言いながら40はいるであろうゴーレム達の連撃を全て躲しきる。最小限の動きで躲しきるその姿はまるで舞っているようにも見える。

「相変わらず綺麗に躲してくれるもんだな」

「こつちだつてそろそろつらいんだよ……はあー！」

ゴーレムの横薙ぎを大きく跳躍して躲したマチルダは地面に降りると同時に拳を地面に突き立てる。鍊金された地面は鉄の巨大な剣

山となって下からゴーレム達を全て貫く。

しかしそこでマチルダは不穏な音を聞いた。風を切る音。それを聞いてマチルダは大きく右に回避するが、何かが頬をかすった。

「クリフ！今私のこと殺す気だっただろ！」

「玉は粘土だよ。当たったら痛いだろうけど」

回避したあとにすぐ走り出したマチルダは剣山の隙間から錬金で作りに出した即興のライフルでこちらを狙うクリフを見た。

クリフは土魔法の中でもダントツで錬金が得意だ。それは色々な物を作りたいというクリフの夢と相まって錬金は毎日練習していたからなのだが、マチルダにとってこれほど厄介な物はない。

クリフは錬金で簡易的なあちらの世界の兵器を作ってマチルダを翻弄するのだ。そのせいでマチルダは何度驚愕して冷や汗をかいただろうか。

だがそのせいで類い稀な危機察知能力と五感を手に入れた。マチルダ曰く「クリフと戦うならこれぐらい出来なきゃ5秒でやられるからね」とため息をついていた。

「今度はこっちから攻めさせてもらうぞ！」

手に持つライフルを再錬金して刃のない剣へと変える。マチルダは迫るクリフに土の弾丸をお見舞いするがそれはいとも容易く躲される。しかしマチルダもこれが当たるなどとも考えてはいない。

躲した先の地面を砂に錬金してクリフの動きを止めることが出来る。

「……はずもないんだがね！」

砂に足を入れると思った瞬間に砂は鉄に鍊金されてしまい、それを見ているうちにマチルダに先ほどの土の弾丸が迫る。クリフは回避行動を取るマチルダに向かって全力で走り出す。

それを阻止するためにマチルダは目の前に大きな土の壁を作り出してクリフの行く手を阻むが。

「甘い！」

クリフの作り出した2mほどのゴーレムは軽々と土壁を破るとそれを踏み台にしてクリフは宙に飛ぶ。しかし宙から下を見下ろしてもマチルダの姿はなく少しかだけクリフに焦りが生まれる。

それこそがマチルダの狙いだった。彼女は壁を作ったと同時に地面に潜って身を隠していたのだ。そして壁を破られて焦っているであろう自分に回避の隙を与えないように追撃をしてくるクリフにも予想はついていた。

「悪いね。今回も私の勝ちだ」

土の中でそう呟いたマチルダは両手を土へと当てる。すると地上には先ほどとは比べものにならないほどの剣山が現れた。

鋭く尖った剣先が地面から現れたと同時に宙で体を捻って直撃だけは避けたが完全にクリフは動きを封じられてしまう。体に触れている鉄の剣山を片っ端から再鍊金し直そうとしたとき、後ろには剣を持ったマチルダが剣山上に立っていた。

「……………はあ。参りました」

「記念すべき700戦目は私の勝ちだね」

笑みを浮かべたマチルダは剣山を元の土へと鍊金し直す。それを

見ながらクリフは悔しそうに自分の敗因を考えていた。

「マチルダは宙にいる物でも振動が分かるのか？」

「神経を研ぎ澄ませればね。まあかなり集中しなきゃ無理だからあまり使えたもんじゃないさ」

マチルダが宙にいるクリフの真下に剣山を作り出せた理由。それは土属性の使い手が自然と身につく振動を感じ取る力。理由はよく分かっていないが、土の使い手は振動。火は温度。水は湿度やその液体の性質。風は音への感覚が研ぎ澄まされるという研究結果が出ている。

まあこれらの力は相当な手練れでない限りはちよつと常人より感じやすいというだけなのだが、クリフやマチルダレベルになると振動で相手の位置すら掴めるようになっていて。

その力を使ってクリフが跳んだ場所とその力加減を振動から読み取り今いる場所を算出する。これで相手を見ずして攻撃を加えることができたのだ。

しかしこれはマチルダ自身が言ったとおり相当な集中力を使わなければ出来ないことなので本人としてはあまり使いたくはないようだ。

「二人ともお疲れ様。はい、タオル」

「ありがとうテファ」

「ふう〜……これで700戦380勝320敗だっけ？大分迫ってきたね」

最初のころはマチルダに惨敗していたクリフも最近では五分五分

の戦いも見せるようになり、ここ最近になって一気に勝率を上げてきた。しかしだからと言ってマチルダが負け続けるはずもなく、クリフと共に鍛錬を続けているため、力の差は埋まるようで埋まらない。

「お前らもう十分じゃね？はつきり言っただけが教えられることなんでもうねえぞ」

最初はかなりのスパルタで力をつける鍛錬だったノームもそれが終わってしまうと次は土属性の性質、土という物の成り立ち、そして錬金の定義などをその精霊という長寿から培った知識でクリフとマチルダに説明していった。

そしてそれを最大限に生かした戦闘を教えていたのだが、二人とも筋肉馬鹿なわけではなく、どちらかと言うところといった頭脳戦を得意とする二人だったためすぐに自分の物としてしまったのだ。

では魔法の源である精神力を鍛えようかと思えばこの二人は走りながら互いの行動を予測して土の性質を生かした戦いという途方もなく高度な頭脳戦を毎日倒れるまでしているため、倒れたころにはまさに精根尽き果てているのだ。

そのため精神力はいつの間にか途方もないほどになってしまい、かなりの長期戦にも耐えられてしまうのである。こうなってはノームが教えられることなどもない。

故にノームは子供達をそのモフモフとした体に乗せて二人の戦いを鑑賞するしかなかった。

「そうだな。そろそろ錬金の鍛錬にするか」

汗を拭き終わったクリフは地面にしゃがみ込むと目を閉じて集中を始める。イメージするのは前の世界の車。タイヤ、サスペンション。ゴム部分すらも錬金して作り出す。

地面が隆起して出来た土の山はやがて形を変えるとそこには場違いな車が一台置かれていた。

「外装の超超ジュラルミンもようやくうまく作れるようになってきたし。さて、次は……………」

そう言っただけで芸術とも呼べる車を簡単に土へと変えるとまた新たな物を作り始める。それを横目にマチルダはクリフが作ったベンチに座るテファの隣に腰掛けた。

マチルダも最初はこの錬金に付き合っていたのだが、自分の想像できる範疇を超えたクリフの精密機械の数々にマチルダの頭と想像力が科学的知識が付いていけなくなってしまったのだ。まあそれも科学が発展していかない世界なのだからしょうがないのだが、マチルダはそれをぼーっと眺めていた。

「テファの方はどうなんだい？ 虚無の練習ははかどってるのかい？」

「いえ、まだ爆発と忘却しか……………」
エクストロージョン

「焦る必要はないさ。それにテファが魔法を覚えられないのはあのモグラが悪いんだ。テファが気にする必要はないよ」

「聞こえてるぞでめえ」

虚無の魔法は呪文の詠唱も長く、それにその呪文が記された書物も少ない。それに虚無の担い手もノームが生きてきた中で3人程度しか会ったことがない。それ故に教えられる呪文が少ないのだ。

「私がいつか必ず虚無の呪文が載ってる書物を手に入れてあげるから、それまでは我慢してくれ」

そう言ってマチルダは地面から金で出来たバラの花をテファに捧げる。マチルダは金を錬金出来るようになってからは働きにいくこともなくなり、ずっとこの小屋で毎日を過ごしている。

金のバラを受け取ったテファはマチルダに礼を言々と視線をクリフへと向けるとそこには金で出来た鳳凰を見て顎に手を当てているクリフの姿があった。

端から見ても最上級の褒め言葉しか出てこないのに、クリフは「ここの装飾が気に入らない」と一から作り直している。

「相変わらずむちゃくちゃだな」

「ふふっ、そうですね。でもクリフさんらしいです」

テファの言葉を聞いてため息をついていたマチルダも納得したように笑みを浮かべる。

和やかな空気、こんな時間がずっと続けばいい。そんなことを考えていたマチルダの願望をぶち壊す爆弾がノームの口から呟かれる。

「ほぼ不純物なしの金の像か……すげえな。……というよりこれだけの魔法の技術があれば俺のことアルビオンから連れ出すくらい簡単じゃね？」

周囲の空気が固まる。ピシッという音すら聞こえた気がした。たちまち動かなくなるクリフ達を尻目に子供達の声だけが辺りに大きく響く。

「なあおい。忘れてたのか？忘れ去られてたのか？」

「い、いや……そんなことは……」

「なら俺の目を見て言ってみ？ほら、ほら言ってみ？」

クリフはノームに詰め寄られるが目が合わせることが出来ない。
ノームはターゲットを変更してテファとマチルダの方を見るが二人とも既に顔をそらしていた。

「いいよもう……俺だって薄々分かってたんだって」

普段なら怒り出すであろうと思っていたクリフ達だったが予想外なことにノームは今まで見たことのないほどに落ち込んでしまったのだ。

これにはクリフ達も焦ってノームを励まし始める。

「だ、大丈夫！明日にでも準備するから！！」

「そ、そうですね！明日ゲルマニアに行きましょう！」

その言葉で決定してしまったゲルマニアへと引越す。皆はこの土地に愛着はあったがノームを見てその言葉を覆すことなど到底出来るものではなかった。

翌日の夜に決行になったゲルマニア引越す作戦。それは至って簡単。鍊金で作り出した籠に皆を乗せて凧を使ってゆっくり落下するという物だ。

本当なら風のない日なんかを選ぶべきなのだろうが、明日決行と言ってしまったのだからしょうがない。大陸の端にやって来た皆はこれからのことに様々な思いを抱えている。

クリフと子供達はあの小屋は名残惜しいものの、それ以上に新たな土地への期待が大きいのか落ち着かない様子。対してテファとマチルダは時折後ろを振り返っては感傷に浸るように目を閉じていた。

「こら、危ないからそっち側は行っちゃだめだよ」

大陸の縁に近づいてゆく子供達を呼び止めながらクリフは籠の準備を進める。

「……この土地ともお別れですか」

「恨み辛みはあるけど、こうしてみると少し寂しいもんだね」

「でもマチルダ姉さんも、クリフさんも、みんないます」

「そうだね。これならどこに行ったらってあんまり変わらないかもね」

二人笑い合っているとクリフが準備完了の合図を送る。二人は先に乗り込んでいたノームと子供達に続いて籠に乗り込むとクリフは籠を閉める。

「ぐええ……狭い……どうにかならねえのかこれ」

「文句言っんじゃないよ。私達だって狭いんだから我慢しな」

「みんなちよつとの間だから我慢してね？」

テファも皆に笑みを浮かべて安心させようとしているがその笑顔は少しだけ苦しそうだ。

準備は整った。クリフは「それじゃあいにくぞ!」と言うかけ声と

共に巨大な腕を地面から生やす。それは籠を掴むと宙へと浮かせる。そこでクリフも籠に乗り込み、そこでクリフは魔法を解いた。その瞬間籠を掴んでいた腕は土くれとなり籠は重力に習ってハルケギニアの大地へとゆっくり落下していった。

「綺麗……………」

誰かがそう呟いた。遮る物の何もない大展望360。パノラマに子供達もはしゃぐのを忘れてその景色に見入っていた。

クリフの世界とは違い夜には大地に光りなどほぼ皆無。それは闇闇に浮かぶ星と双月をより一層輝かせ、水面はそれを映して静かに揺れている。

昂揚する体に吹き付ける夜風が丁度いい。美しいと思った。クリフはこの闇と星しかない景色を絵画では表せないほど美しいと思ったのだ。

そんな美しい景色をいつまでも見ていたかった。……『ピキッ』という音が聞こえるまでは。

「……………あの」

「言つなテファ。……分かつてる」

「おいおい、ちょっとぼろすぎるんじゃないかこの籠」

「ノームの重量を考えてなかったな……予想の範疇より重たかったか。……あっ」

音の原因は子供達でも予想が出来ただろう。そしてこれから何が起きるかも。テファはすでに涙目でマチルダは呆れたように大きな

ため息をついている。

そしてクリフの『あつ』と言った瞬間。まさにあつという間に籠の底が抜けて全員もれなく地面へとスカイダイビングを始めた。

「iiiiiiいやああああ!!!」

テファの悲鳴が美しい双月に向けて叫ばれるが、我関せずといった様子。双月はただただ自分達から離れてゆくテファ達を見送っていた。

「まずいな……テファが泣きそうになってる」

「あれは恐怖で涙が出ないだけだろう。完全に心は折れてるよ」

「以外とマチルダは平気そうだね」

「私だって焦ってるよ。ただ冷や汗流すのにはもう慣れただけさ」

クリフとの模擬戦のことを言っているであろうマチルダはフライでテファのところへと移動するとその体を抱き寄せる。

滅多に大声なんて出さないテファだったが流石に上空1000、ほどの場所から落とされたら悲鳴の一つも上げるようだ。

「そろそろ地面が近いぞ。何とかしろクリフ」

「よし、マチルダ! そっちを頼む!」

ノームの言った通りかなり地面が近くなっており、木が生えているのも畑があるのも見えてきた。そこでクリフはマチルダと息を合わせて時を待つ。

迫る地面。だがクリフはまだ動かない。あと100m、70m、50m、40m、そして。

「レビテーション！！」

クリフとマチルダの声が重なると全員の体が急降下から減速してゆっくりとした下降へと変わる。そして皆はゆっくりとハルケギニアの大地を踏んだ。

「……………」

マチルダに抱かれたテファは珍しく魂が抜けたようにマチルダに体を預けている。その様子を見てクリフは後で謝ることを誓うとノームの元へと近づいてゆく。

「無事にゲルマニアの地に着いたわけだが、それでお前の秘密基地はどこなんだ？」

秘密基地。それはノームがクリフに召喚されるまで住んでいた地下の家のことであり、結構な広さがあるため全員が移り住んでも大丈夫とノームが言っていたのだ。

テファとマチルダははつきり言っしまえばアルビオンでは邪魔者。二人がアルビオンで暮らすのには何かと不便だったため、クリフ達は移住することを決めたのだ。

そのためにまずは家を買ったりと色々なことが待ち受けているのだが、それまでの借り家をノームに提供してもらうことにしたのだ。

「おう！ここはリヴェールド領だな。じゃあ結構近い。夜が明けないうちに移動しようぜ」

そう言つてノームは穴を掘り始める。その穴に子供達と少し顔色が戻つて来たテファが続き、最後にマチルダとクリフが周囲に誰もいないことを確認して穴へと消えていった。

穴に入つたマチルダは入り口を土で塞ぐと先に進んで行こうとする。

「分かつてはいたけど……土が」

頭、服、終いには口にも入っていきそうなほど土がぼろぼろと落ちてくる。たまらずマチルダは穴の表面に鍊金を施すと今度は安心した様子でテファ達の後を追つた。

「着いた！ここだここだ！」

先頭で穴を掘るノームと穴の表面を鍊金するクリフとマチルダ。その後にテファ達が続いて歩いて行くという作業を2時間ほどしていると、ノームが喜びの声を上げる。

どんなに聞いても「もうすぐだ」としか答えないモグラに皆はそろそろ疲れの色を隠せなくなってくるころ、ノームの穴の先に真っ暗な闇があることに気付く。

「なんだここは……………」

ノームに続いてその闇に足を踏み入れたマチルダの感想はその一言に尽きるものだった。ライトを唱えても辺りが全く明るくならない。ここの全貌は一体どうなっているのだろうかと考えながらもノームの指示により今日はここで休息を取ることにした。

流石に子供達は疲れたのか、テファを中心に皆深い眠りに落ちて

いる。そのテファも首が下がり瞼が重そうだが。

テファはマチルダに諭されて静かに眠りにつく。クリフとマチルダは一応警戒して起きてようかと考えていたのだが、ノームの「いらねえよそんなもん」という言葉に一蹴されてしまい渋々寝かされることになった。

目を開けた時自分達がどんな場所にいるかなど知らずに。

「なんだここは……………」

そう呟いたのはマチルダではなくクリフ。昨日のマチルダと同じ台詞を呟いたのはマチルダ同様この全貌が分からなかったからではない。全貌が明らかになったからだ。

そこは楕円状の半球。直径20km、高さは1000mはあろうかという途方もない広さの地下空洞だった。それを見てクリフも驚きを隠せない。

「驚いただろ。これが土の精霊である俺の数千年の努力の結晶。『箱庭』だ」

「箱庭……………って言うかそんな規模じゃないだろ」

マチルダの言うとおりここはそんな規模では測れないほどの広大な敷地だ。

第一色々と謎が多すぎる。地下なのに半球上になった天井の頂点からは光が差しまるで太陽のように暖かい。

そして地面に生い茂る草木はまるで自然にいるかのようだ。そし

て何より空気が濁っていない。

「ああ、それな。長い説明になるんだが……地下には風石つてのが自然に生成されるんだ。それを使って風を起こして箱庭の空気を地上に排出して空気の循環を行っている。

そしてあの天井にあるのは光石つて魔石だ。その名の通り光ことが出来る魔石だな。さて、それじゃあ目的地まであと少しだ。お前らも立て」

「ここは目的の場所じゃないのか？」

「俺の本拠地はここからもうちょっと行った先の箱庭だ。箱庭同士は全て繋がってるから今度は早く着くさ」

そう言つて歩き始めるノームの後ろには子供達の行列が出来ていて、この地下に作られた外となんら変わらない森林を物珍しそうに眺めていた。

ノームが歩いて行った先にあつたのは半円状のトンネル。こちらも光石が上に埋め込まれているのか、トンネルの先まで見渡せるようになっていた。

そんなトンネルの中を歩きながらクリフはこの箱庭を作った訳をノームに尋ねてみると、やはりこれはノームの単なる趣味というのは別のようだ。

理由というのはどこからクリフに心地よく吹き付ける微風を起こしている風石にあるらしい。地下で何らかの理由で生成される風石には浮力と風を起こす力が備わっているらしく、これを応用して飛行船が飛び、アルビオン大陸が空にあるわけだが。ここでクリフはふと思う。

それならいつかこのハルケギニアも全て空に浮くのではないかと

ノームはその問いに肯定する。それを聞いたクリフはそれを想像して絶句と共に恐怖する。地上が全て浮遊したら人々はどうなるのだろうか。混乱、飢饉、暴動。

不穏な単語が思いついては全て起こるであろうとクリフの頭に知らせていたからだ。だがノームもこのハルケギニアに住む者の一人。そんなことをみすみすさせるわけもない。

だからノームは地下にこのような巨大空間を掘って風石を採取し、その力を常に流用することで大陸の浮遊、『大隆起』から地上を守っていたのだ。

それを聞いてクリフは「お前って以外と凄い精霊だったんだな」と言うとノームは少し自分がどう見られていたのかを想像して落ち込んでいた。

閑話休題。ノームはこの箱庭の管理者として色々と大変なことをしてきたのだろうと思いきりクリフはこのジオフロントもとい箱庭をどうやって作ったのかと聞くと。

「俺は穴掘って風石を適当に埋めただけだ。地上から入ってくる風に植物の種が混じったのかいつの間にかこんな森だ。植物に必要な水分も水の精霊に協力して貰って地下に川を引くことも出来たしな」

そう言っただけでトンネルを歩くノーム。口ではそう言っただけでいるもの。ここに至るまでにどれほどの問題を数千年間で抱え、そして解決してきたのだろうか。

ノソノソと歩く3mほどの毛玉。そのつぶらな瞳が何故か今は男らしく先を見据えているように見えた。

「土背中に入った……」

子供の一人がそう言っただけで背中を掻いている。それかもしれない

だろう。固定化を唱えていればいいのだが生憎ノームはそんなことは出来ない。

クリフとマチルダは目を合わせると左右の壁に移動して魔法を唱え始める。そして唱えられたのは鍊金。このトンネルを成す土表面を全て鍊金で鉄へと変換させたのだ。

天井の光を受けて鈍く光トンネルの先を見てノームは改めて二人の実力に感嘆した。そんな二人は何事もなかったかのように固定化を済ませるとすぐに歩き始める。

地面を鉄にしたのはちょっと不味かったかなと思いつつも先ほどよりは歩きやすいのでクリフはそのまま鉄板の上を歩き続けるとそこには再び広い空間が待ち受けていた。

「これは……………」

「ここが俺が最初に掘った箱庭……………まあ名前はないんだがな」

そんな簡単な紹介文とは不釣り合いなその箱庭は広さは直径50kmはあるだろうか。もう目測では測れない広さになってしまっている。そして天井……………というよりも空には一際大きい光石と言う名の太陽が燦々と輝いており、地底の森林と海に暖かな光を送っている。

四方を囲むのは土色の壁だがクリフ達は思ってしまう。「ここは別世界か」。クリフにしては実際別世界なのだがテファやマチルダさえもそんなことを考えてしまう。それほどまでに箱庭は地上に類似していた。

「面積700平方キロメートルぐらいか？正確に計ったことはないからわからねえな」

「凄い……………もうその言葉しか出てこない……………」

クリフ同様にテファ達も言葉を失い、その景色に見入っていた。

「いつまでも呆けてんじゃねえ！さっさと準備しやがれ！」

準備というのはここに住む準備のこと。まず家を建てるのだが、これはマチルダとそのゴーレムが担当することのこと。それでクリフは手持ちぶさたになり森の中を歩いているとふと感じたことがある。

「あの土色の空……なんとかなんないかな」

高い天井は地下とは思えないほどの開放感があるにしてもやはり空を仰げば土色だったというのは正直気が滅入る。

ということでクリフは試しにフライで天井まで飛ぶと手を付いて思いついたことを実践してみる。慎重に、繊細に、そして強固に広大に。

その瞬間天井が土色から蒼天へと鍊金される。クリフは天井の表面をまず石灰でコーティングした後にさらに水色に彩色したガラスで天井を覆ったのだ。そしてそこに固定化の魔法をかけて青と白の織りなす天空のできあがり。

想像以上の出来にクリフは満足しながらどつと疲れが溢れてきて思わず空中でバランスを崩してしまふ。フラフラとしながらもなんとか着地したクリフは感想を聞こうとテファ達の元へと歩いてゆくと、そこは殺伐とした雰囲気が漂っていた。

「……………エルフ？」

マチルダが先頭に立ち対峙している相手は一見すると人間だがその長い耳が何より特徴的だ。それはテファも持つエルフの特徴。

しかもその後ろにはミノタウロスや翼人、様々な亜人達が控えて

おり、皆剣呑な雰囲気をつかべながらマチルダ達を見ていた。

「どうしたんだ。これ」

「あんただろこの空……そのせいでここに住んでた住人達が騒いでるのさ」

「ど、どうでしょう……………」

空がいきなり蒼天へと変わったのだ。騒ぐのも無理はない。そしてここに住んでいたエルフ達がクリフ達人間を発見して追い出そうとしている。

クリフは大まかな話の流れを聞くとエルフ達の前に立って話しを始める。

「俺はクリフ。クリフ・ヤミノスコフと言います。それで皆さんはこの住人なんですか？」

「ああそうだよ。だから人間は即刻ここから出ていきな」

随分排他的だなと思いつつマチルダやテファから聞いたエルフや亜人の扱いを聞いていたクリフは彼らの事情を察する。

それにしても先頭に立つ銀髪の女性のエルフは今にも飛びかかってきそうな剣幕である。

「と言われても俺達は行く宛がないんです」

「そんな人間の事情は知らないんだよ！ここは人間の領土じゃない！土の精霊ノーム様の領域だ！お前達みたいな奴らが入っていい場所じゃないんだよ！！」

「そのノームには許可を取ってあるんだけど……」

「なに……？」と疑いの視線を向けるエルフの女性。当然のことくそれは信じてもらえるわけがなかった。

しょうがないとクリフは地面を二度ほど踏む。その震動は地面を伝ってある者へと届く。

「ん？どうかしたか？」

「ノーム様！？いつお戻りに……？」

地中から現れたのはいつの間にかすがたが見えなくなっていたノーム。どうやら地中の風石の埋蔵量の確認に行っていたらしい。少し増えていたらしいが大隆起にはほど遠いとのこと。

クリフはノームにことに経緯を話すとノームは顎に手を当てて聞き入っていた。

「ふむ……事情は分かった。……エリス」

「は、はい！」

先頭のエルフの名前はエリスと言うらしい。彼女はノームに話しかけられて緊張した面持ちで返事をする了一步前に出た。

「なあエリス……お前は、いや、後ろにいるやつらもそうだな。……お前達はどうしてここに流れてきたんだ？」

「それは……親を人間に殺されたり……住み家を逐われたりして……だからここに人間を入れるのはおかしいです！」

「そうだ。ここにお前達を住ませたのは地上で生きることが出来ない者達だからだ。だったらこいつらだってそうは言えないか？」

「……………え？」

ノームはゆつくりと口を開くとテファの過去、マチルダの過去を話し始める。それは両親を殺され、迫害され、そして家名を失いつつも同じような境遇を持つ子供達を一生懸命に守り育ててきたという過去。

エリスは途中、クリフの正体やテファはハーフエルフということを知り驚いていたが、それ以上にノームの話す過去話に耳を傾けていた。

そして全てを話し終わったところでノームは優しく諭すようにエリスに問う。

「なあエリス……確かにお前らとテファやマチルダは種族は違う。人間が憎いかもしれない。でもこいつらは違うだろう？」

お前と同じ、人間に迫害されて居場所を失った者なんだよ。お前は其の苦しみも辛さも知っているだろうに。もう一度聞く。お前達はテファ達をどう思っている？」

エリスは自分の浅はかな行動を悔やむように俯き、そして後ろに控える皆に目で合図を送る。

皆も心は一緒のようだ。エリスの合図に笑顔で頷くとエリスは再びテファ達へと視線を向けると深々と頭を下げた。

「ごめんなさい。私達と同じような過去を持つ人だったとは知らずにこんなことを……………。非礼を詫びるわ」

「いえ、こちらこそいきなり押しかけてしまつてすみません」

「気にしないで……ここでは地上で生きられなくなった者達は皆一緒よ。エルフも翼人も他の亜人も。ハーフエルフも、そしてこれからは人間も」

そう言つてエリスはテファ達に歩み寄るとその手を差し伸べた。

「エリスよ。種族はエルフ。ここの一応長つてことになつてゐるわ。これからよろしくね」

「ティファニアです。私はハーフエルフですけど……よろしく願ひします」

その後は交流を深めるために子供達も色々な亜人に話しかけ、そして互いに自己紹介をしているのをクリフは一步引いたところから暖かく見守っていた。

「ここの奴らはちよつとばかり排他的だが身内には優しい。お前も仲良くしてやつてくれ」

「もちろん。言われなくてもそうするさ」

「まああいつらなら心配いらねえか。……それよりこれ。空がいきなり変わつて俺は地上に出たのかと思つたぞ?」

「こつちの方が気分も明るくなるだろ?」

随分と軽い理由にノームは「違うないな」と笑みを溢しながら笑い会つてゐるエルフと人間達を見ていた。

五話（後書き）

かなり早足にプロローグを終了。さて、これから何書こうかな

六話

アルビオンの森の中からゲルマニアの地下深くへと引っ越しをしてから早2週間。

色々なことがあったがクリフ達はここの住民達とかなり中がよくなった。

そしてその恩恵として一つクリフには嬉しいことが。

「ほら、精霊の意識が体の中に流れてくるのを感じるんだ。……そして」

「おお……それがカウンターか」

「そう。あらゆる魔法をはじく便利な先住魔法よ」

クリフがアウルヴァングということを知ってエリスは心底驚いていたが、クリフが何よりアウルヴァングとして何も目覚めていないというのが勿体なくてしょうがなかった。

そこでエリスはクリフに先住魔法を教えることにしたのだ。本当ならノームが教えるべきところだったのだが、ノームは「まずは魔法を磨きやがれ」という方針らしく、アルビオンでは先住魔法を教えなかったらしい。

だがエリスからすればクリフやマチルダは人間なら最上位にいてもおかしくないぐらいの実力者である。ノームに確認をとったところ「お前が教えたいっていうなら別にいいぞ」とのことだったので

クリフには自ら教鞭をとることにしたのだ。

「次は水の精霊を呼んでちょうだい」

「了解……………こいつらか？」

心の中で念じるといつの間にかクリフの周りには12体ほどの何かがフヨフヨと浮かんでいた。

それこそが水の精霊だったのだがクリフはそれを手で掴むと不思議そうにそれを眺めていた。

「教えてから一週間で12体も呼び出せるなんて……………やっぱりアウルヴァングは伊達じゃないわね」

「そうでもないさ。こいつらエリスが前に言ってた下級精霊だろ？まだ中級も上級も呼び出せないんじゃないやまだまだだよ」

精霊の中にも階級というものが存在しているのをハルケギニアの住民は知っているだろうか？

下級精霊は力も弱く言葉も交わすことが出来ない。中級になると言葉を喋り、精霊独自の魔法を使えるようになる。上級までいくとその存在自体が珍しいが、ノームもその一人である。他にはラグドリアン湖の水の精霊などがあるが。

ちなみにクリフはノームという上級精霊を呼び出しているのだが、あれはどうやらビギナーズラックだったらしい。だがそれだけの力を持っているということは言える。

「これで俺もようやく箱庭発展に協力できるな」

「ええ、最近は色々と忙しくなってきたから本当に助かるわ。あ

りがとね、クリフ」

エリスが助かったと言ったのはクリフにある仕事を任せられるようになったからだ。その仕事とは地下に精霊達を呼び出してそこに住まわせること。

本来ならこんな地下深くには精霊は存在しない。いたとしても下級精霊かノームのように極端に上位な土の精霊のみだろう。

そんな土地に無理矢理生物が住める場所を作りだそうとしたのだ。木を植えても育ちにくいのは目に見えている。だからこそその精霊の恩恵。

ノームは数千年前からここに木を植えては精霊達にその木が丈夫に育つまで見てくれるように契約していたのだ。だがノームには大隆起から地上を守るために箱庭を管理する仕事がある。

そのため精霊にはあまり手が行き届かずになっていたのだが、エルフがここに住むようになってからはその仕事を肩代わりしてもらうようになったのだ。

そうやって仕事の分担を行っていたのだが、エルフもそこまで数は多くない。そして今いるエルフはエリスを加えて10人ほど。

しかも皆はあまり先住魔法が使えないのだ。だが無理もない。親を殺されたり迫害を受けたりという幼少期を過ごしたのだから。

だからこそ今はエリスが先住魔法を教えているのだが、それに加えてエリスにはこの村長的な役割がある。あまりそちらには構ってられない。

そして箱庭の精霊達との契約。これは遠く離れた箱庭とも行わなければならなかったためかなりの時間を要する。要約すると彼女はかなり忙しかったのだ。

それがクリフという先住魔法を使える存在がやってきたことで少しは解消される。礼の一つを言うのは当たり前だろう。

「今日はこのぐらいにしておくわ。それじゃあ私は仕事があるから」

長い銀の髪をなびかせながら颯爽と去ってゆくエリスの後ろ姿を見送るとクリフはテファ達の元へと向かう。

そこは人口の湖のほとりに作られた箱庭の住人達の集落。小さな家が建ち並ぶ姿はとてものんびりとしていて思わずあくびが出てしまいそうだ。

「うおわ!？」

大きな伸びをしながら歩いていたクリフの地面がいきなり波を打つ。ノームか?とも思ったがこれはそう言ったぐいのものではない。

そしてその原因に気付いた瞬間クリフはその場から飛び引いた。そしてクリフがいた何もないメインストリートがいきなり石畳へと変貌を遂げる。

クリフが向かう先から出てきたマチルダは満足そうな顔をしてその石畳を眺めていた。

「勘弁してくれよ。そのまま石畳に足がはまるところだった………」
「……」

「クリフがそんな間抜けな罠にはまるわけがないだろうに。第一ここには近づくなつてさつき住民にも………」
「きゃあーーーー!!」

マチルダの動きが止まる。いや、固まったと言ったほうが正しいだろう。その声の主はクリフの主であろう女性の声。

それを聞いたクリフはため息をつきながら声のする方へと走って

いった。

「あつ！クリフさん。助けてください……………」

そこには前のめりに倒れて涙目になっているテファの姿があった。四つん這いになりながら潤んだ瞳で上目遣いをする彼女にクリフは少し動揺したがそこはまだ13歳の少女だ。クリフもそこまで理性が脆いわけではない。

テファの脇に手を入れて立ち上がらせるとその足は見事に石畳の間に挟まっていた。涙目で鼻を赤くしていることから見るにおそらく顔面からそのまま転倒したのだろう。

「あ…………ほら、泣かないでくれ」

「泣いてません！…………というよりこれは何なんですか？」

今だに涙目のテファの頭を撫でてやると子供扱いされたのが少し嫌だったのかまたも上目遣いでクリフを睨んでくる。といっても涙目なので何も怖くはないのだが。

とりあえず足を引き抜いて後からきたマチルダがテファに謝ったことでこの場はお開きとなったが、テファは何をしていたのかと尋ねると。

「獣人の方々に色々案内を受けていたんですよ。ここには温泉というのがあるらしいですよ」

これだけ地下深くなのだ、それに近くには山もあった気がする。地熱で暖められた地下水が沸いていたとしても不思議ではない。

それは今では住人達の憩い場となっているらしく、皆何かある

とそこに行つて体を癒すそうだ。まあその温泉を掘り当てた本人は火傷をして大変だったらしいが。

「それじゃあ今度一緒に入ってみようか。それじゃあテファ、私とクリフはちよつと用があるから子供達を頼むよ」

「はい。どこに行くんですか？」

クリフとマチルダが向かうのはこの地下に來た時の初めて見た箱庭。そこにもクリフとマチルダが空を作り大分印象が変わったが、そこに一体なんの用があるのだろうか？

ここは完全に自給自足が出来るようになっていた。家が欲しいと言えばクリフとマチルダがレンガ造りの立派な屋敷を建ててくれるし、食料は獣人達が率先して畑や放牧などを行っているので皆はそこから食料を貰っている。

獣人というのは元来『自然に生き、自然と共に歩む亜人』ということが古くから言われていて、亜人の中ではずば抜けて知能が高い。特に自然環境や農耕に関する知識なら人間を超すであろう。

そして畑の土はクリフとマチルダが最高の状態の肥沃な土壌を作り出し、クリフの世界の便利な農具を獣人達に与えているため、今彼らはとてもクリフ達に感謝している。

そんな何もかも手に入るこの箱庭暮らしで何処かに行く必要などどこにもないと思われるのだが、クリフ達は何をしに行くのだろうか。

「超巨大ゴーレムの生成をちよつと練習したいんだよ。今までは森の中とは言えあまり目立つことは出来なかったからね」

「そついうこと。それじゃ、夕方には帰るよ」

「さて、巨大ゴーレムの生成なんだが………クリフ、まずどんなところに注意するべきだろうね」

「うーん……関節部分の負荷……いや、どれだけゴーレムを持続出来るか、かな？」

「確かに大量に魔力を食うからね。まあ最初はそれでいいさ。とりあえず重量に潰されない関節を意識して作ってみるよ」

マチルダの魔法発動媒体である指輪が少しだけ光を集める。それだけ多くの魔力を集めているのだろう。

クリフとマチルダは最初は杖を使っていたのだが、その内二人のレベルでは杖は邪魔でしかなくなってしまった。そこで二人はお互いに指輪を作り合い、それを発動媒体として使っているのだ。

そんな話をしているうちに地面が盛り上がり、巨大な姿が形成されてゆく。そしてそれは完全にできあがると鎧を纏った巨人のようにも見えた。

歩くゴーレムは普通の大きさのゴーレムと比べても大差ないほどの動きを見せている。しかしその大きさは100メートルはあるだろうが。

手に持つ剣を振ると少し体を剣の重さに引きずられるが、それ以外は合格と見てもいいだろう。しかしクリフはそれを見て苦い顔を

している。

「だめ……かい？」

「……そうだな。折角の巨大ゴーレムなんだから人の形に捕らわれなくてもいいんじゃないか？例えばこんな」

クリフは普通の大きさのゴーレムを作り出すが、その形は普通とはかけ離れていた。

まず下半身が二本の足ではなく、キヤタピラ製になっている。そして上半身は手が巨大な槍となっていた。槍は中世の巨大なランスをイメージしたような作りとなっている。

「その巨大さの武器は攻撃範囲の広さと威力。なら速さはいらない。ゆっくりでもこのキヤタピラで迫っていけばメイジ達は自然と逃げ出すか押しつぶされるだろうさ」

「そしてその槍は？突貫力はあるそうだけど広範囲な攻撃は出来そうにないね」

「攻城戦ではこういった武器が便利さ。それにそれ相応の長さの物を持たせれば空に浮く戦艦も落とせるだろうし」

それを聞いてなるほどとマチルダは頷きながら再びゴーレムを作り出す。それはクリフが作った見本をそのまま巨大化させたものだが、どうもそれは動かない。

「あゝ……………その。キヤタピラって何だ？」

作った方がいいが原理を知らなかったマチルダが恥ずかしそうに頭を掻きながらクリフに尋ねてきた。

たまにマチルダは抜けている。そんなことを思いながらクリフはキヤタピラの原理を丁寧の説明していった。

キヤタピラ式巨大ゴーレムの生成することに成功したマチルダはそれを持って第709戦目の勝負をクリフに仕掛けたが、巨大ゴーレム作りで魔力を消費していたマチルダがクリフに力押しで敗北する結末になった。

そしてクリフのゴーレムの方が自分の作ったものより精巧に出来ていたこともありマチルダは今とても不機嫌である。

「つくそ、もうちょっと機動力があれば私の勝ちだったんだが……

……」

「仕方ないさ。あのキヤタピラは俺の世界の技術だ。これで負けたら俺の方がへこむ」

箱庭を照らす光石が赤みを帯びてきてもうすぐ夕方であることを知らせている。

ノームの説明によると光石は太陽光を浴びた魔石が惑星のサイクルで行われる地表の堆積により、地中深くへと送られることで太陽光エネルギーが魔力と融合して光りを放つようになっていいるらしい。そしてそれは今でも太陽の発する電磁波を敏感に感じ取るため、

夕方では同じように少しづつ日が暗くなってくる……………らしい。

はつきり言つてノームもそれほど詳しいことは分かっていないらしいのだ。これはノームの推測とクリフの科学的推測から出した答えであつて本当の答えを知るものなどこのハルケギニアには一人もいない。

と言うより光石の存在をしる人間自体いないだろうが。

「それにしても遠いね……………馬でも上からつれてこようか」

「盗んで来るなよ」

「あんたは一体私を何だと思つてるのか問い詰めたいところだね……………」

そんな冗談は置いておくとして、確かにこの箱庭通しを繋ぐ連絡橋とも言えるトンネルは長い。

風石が大量に溜まつてるところと昔から人が密集しているところに箱庭はある。、もしも大隆起が起きても被害が少ないように都市の地下に作つたそうだ。

だがこのハルケギニアに都市と呼べる街はかなり少なく、首都や大貴族領の一部のみだ。それと点在する箱庭。数は中々あるのだがいかせん距離が遠すぎる。

「それにしても疲れた……………足が棒になつてるよ。クリフの世界の乗り物はなんか作れないのかい？」

「遠くまで簡単に行けて、それで大量の人や物を運べるなんてそんな便利なもの……………あつた」

そう、あつた。なんで気付かなかつたのだろうとクリフは自分の愚かさから膝をついて落ち込んでいるとマチルダが心配そうに声をかけてくる。

自分はあるに憧れを抱いていたじゃないか。あれを見て胸をときめかせていたじゃないか。クリフの中に懐かしい記憶とそれに関する知識が流れ込んでくる。

たまらずクリフは走り出すとテファが待つ家へと向かった。

「あつ、お帰りなさいクリフさん。マチルダ姉さんは……？」

「ただいま！それじゃちょっと部屋に籠もるから！」

帰ってくるなり部屋に飛び込むとそこからは中で暴れ回っているのではないかと思うぐらいの騒音が響いてくる。

テファは頭に？を浮かべながら夕食の準備を続けると、次にテファ達の家の扉を開いたのは汗だくのマチルダだった。

「た……ただい……げぼっ！げぼっ！」

「ど、どうしたんですか！？しつかりしてくださいマチルダ姉さん！！」

今にも倒れそうなマチルダを支えるとテファはその体を椅子へと下ろす。荒い息づかい、それは決して甘美なものではなく生死を彷徨っているかのような必死の息づかいだ。

テファはそんなマチルダに水を差し出すとそれをマチルダは一気に飲みほす。そして大きく息を吸い、一拍置いた後に息を吐いたマチルダは先ほどよりも少しは顔色が良かった。

「あの……それで一体何が……」

「いや、ただクリフの後を全力疾走で追っただけさ………あいっ………どんだけ体力あるんだい………」

クリフが軍人だということも自分とは違い男だということも知っていた。最近の鍛錬でさらに体力をつけているのも知ってるつもりだった。

だがクリフはマチルダの予想を遙かに超すスピードで走り続けそして今は部屋に籠もって何かの作業をしている。マチルダは喋るのでさえ辛いというのに。

マチルダは頭を支えられなくなった首をダラリとクリフの部屋の方へと向ける。そこからは物音一つ聞こえず、クリフは集中して何か作業を行っていると言うことしか分からない。

多分部屋に入ったとしても無駄だろう。「秘密だ」とはぐらかして笑うクリフの顔が容易に浮かぶ。

マチルダは想像した笑みを浮かべるクリフに「ちくしょうめ」と呟くと自室に戻ってベッドにダイブした。

光石が夜を告げる頃、他の家に比べてかなりの大きさのテファ邸の窓から暖かな明かりが漏れている。

三階建て、エントランス、食堂、巨大浴室、トイレ完備の屋敷は子供達と住むためなのでかなり大きめとなっている。と言っても全

て錬金で作り上げてそれをゴーレムが組み立てるだけなのだが。

それにこの館には空き部屋も多く、来客や新たな孤児達が10人単位で来ても十分対応出来る広さとなっていた。それ故に掃除は大変だがそこは子供達が分担で行うと言ってくれた。

テファは子供達の成長を喜んでいたが、マチルダは仕事が減ると現実的な面で喜んでいた。

「お兄ちゃんはどう？ご飯一緒に食べないの？」

「クリフさんは今忙しいんだって。だから今日は、ね？」

ここでも皆一緒に食事を取るのがテファ家のしきたり。

この家の年長はマチルダとクリフなのだがどうもテファが一番上と見なされているようで、住人達からもこの家を指す場合は『テファの家』という風に言われていた。

まあ年長者は揃って仕事や鍛錬に明け暮れているので、家の管理をしているのがテファだからということもあるのだが。

閑話休題。

子供達がクリフが居ないのを少し残念そうにし、始祖ブリミルへのお祈りを済ませたところで食堂の扉が開く。

そこにはげっそりとしたクリフが立っていた。クリフは子供達の声に応えながら自分の席に座ると大きなため息をつく。

「で？クリフがやってたことは完成したのかい？」

「一応は。それにしても疲れた……………」

クリフが一度始めると止まらない癖も集中後は極端に疲れる癖も

皆は知っていたのでクリフに構うことなく食事を始める。

翌日、クリフはノームにある相談を行っていた。

「風石を？しかもそんなに大量に………いや、別にいいんだがよ。そんなに一体何に使うんだ？」

「後で教えるさ。今は本当に出来るかも分からないから答えは保留で」

そんな会話が行われたのが朝。そして昼にはクリフの家の裏に大きな倉庫のような場所が出来ていて、そこにはノームが風石を運び込んでいた。

「どうしたんだいこれは。こんな巨大な建物いきなり作って」

テファとマチルダ、それに箱庭の住人達も朝突然現れたこの建造物に驚きながらも入ってくると、そこにはクリフとノームが何かを話していた。

「クリフ、お前は一体何をする気なんだ？一応私はここの村長だ。これだけ大きなことをするなら何をするかグライは把握しておきたいんだが」

その言葉には逆らえなかったのか、クリフは観念したように倉庫の隅に置かれた机から一枚の図面を持つてくる。そこに描かれてい

たのは見たことも聞いたこともないもの。

それを指差して「これはなんだ？」と尋ねると、クリフは自慢げに口を開く。

「これは俺がいた世界の乗り物。機関車ですよ」

「きかん……しゃ？」

そう、クリフが昨日思いつき、そして必死に図面に起こしていたのは機関車だった。しかも普通の機関車ではない。

体の大きい亜人や幻獣まで運べる超巨大機関車。そんなものを一人で作るうとしていたのだ。

「こんな物が本当に走るのか？にわかには信じられないんだけど…

…」

エリスの呟きに亜人達もうんうんと首を振る。信じられないのは無理もないが躍起になって否定するのは止めて欲しい。

「こんな重そうな物が馬より早く動くわけないだろ！」「やはり人間というのは分からない」などと漏らす者達がいるのでクリフはサイレントをかけると一人黙々と部品を錬金し始めた。

もうこうなつては止められない。テファとマチルダはいち早く察すると住民達を外へと追いやる。

「あんまり張り切りすぎるんじゃないよ」

サイレントをかけて何も聞こえないクリフにマチルダはそう呟くと倉庫を後にした。

クリフが倉庫にこもり始めてから早一週間。皆はもうクリフの倉庫に興味は失せたのか、同じようなのかな日々を過ごしていた。

「それにしても頑張るねえ……クリフ君。何考えてるのかは全く分からないけど」

「クリフさんなら大丈夫ですよ。きっと成功させます」

テファの家には今来客がいる。

テファが前に行ってきた温泉のある方面を管理をしている獣人の女の子、名前はユニイ。犬耳以外は人間と大差ない15歳の少女だ。獣人にも色々種類があるらしく、獣人の中の犬の種類の獣人。その中の人間としての遺伝子が強い部族と犬としての遺伝子が強い部族。

それ故にこのユニイのような犬耳娘もいればウェアウルフのような獣人もいるらしい。そして人間成分が強い派と動物成分が強い派とで争いがある部族もある。

そんな彼女もそんな争いに巻き込まれた獣人であり、凶暴なウェアウルフには叶わずここに部族ごと逃げてきたのだ。

そんな彼女が何をしに来たのかと言うとクリフの様子を見に来たというのだ。

ユニイはあまりクリフやマチルダを人間だからと遠ざけはしなかった。むしろ自分から接近していつて他の皆もそれに習ってテファ達と仲良くなれたと言ってもいいだろう。

そんな彼女はテファとの一番の友達であり最近ではよく家にも遊びに来てくれる中であつた。

「成功させるって……クリフ君がすごいのは認めるけどあれは無茶だと思うよ。だってあれ……なんだっけ？」

「機関車です」

「そうそれ。馬や魔法を使わないであんな巨大な物を動かすなんて……しかもそれが馬より早いって……さすがに」

正直言っこの件に関してはテファもどうなるか判断つかなかった。テファもユニイ同様に今回ばかりは夢物語なのではないかと考えていた。

だからこそユニイを連れてクリフの様子を見に行こうとテファは口にした。それにすぐに了承したユニイはただ何となくという理由だっただろうが、この後二人は驚愕に目を見開くことになる。

「クリフさーん。そろそろお昼の時間ですよー」

「ん？もうそんな時間か。というより今日はどうしたんだ？」

本来ならクリフが食べたい時に食べれるようにテファ邸に携帯食料を置いておくのが当たり前になっていたのだが、今日に限ってはテファが直接昼食に呼びに来た。

クリフは何事かと思いながら倉庫から出るとそこには見慣れた黒い毛を模した耳があった。

「やつ！元氣かいクリフ君」

「久しぶりユニィ。こっちは毎日が楽しくて仕方がないよ」

汗を拭いながら笑みを浮かべるクリフを見てユニィは耳をピコピコ動かしながらクリフに近づくとその匂いを嗅ぐ。

「流石に汗臭いねえ。たまにはうちの温泉に入りに来なよ」

「そうだな。今日辺り入りに行くかもしれないな」

「？それってどういう………」

そうきこうとしたらクリフが二人を有無を言わずに倉庫の中へと引き入れる。そして二人は絶句した。

そこには一週間前に見た図面に描かれていた物が置いてあったのだ。それだけならテファもユニィも少し驚くで済んだだろう。

しかしそこには自分の想像を遙かに上回る大きさの物があつたのだ。その大きさは約30メートル。その建物並の何かの重厚感のある鉄の外観を見て二人はため息すら出てこない。

「ようやく完成したんだ。……と言っても客室車両はまだなんだけどな」

「これが機関車………」

「すごい………」

今だに呆けている二人の前でクリフは手を一回叩くとその音で目を覚ましたのか、二人の肩がビクリと飛び跳ねる。

クリフは二人の手を引いて機関車の機関室へと招き入れる。そこはガラスで覆われ、高さ10メートルほどの場所にあるためとても眺めがよい。

クリフの手元に目を移すと、そこには5つほどのボタンと一つのレバーがあった。機関室にしては随分と簡素に見えるがこの機関車の動力源は風石なのでそこまでゴチャゴチャしたものがいらないのであろう。

「さて、これからこいつの試運転なんだけど、二人とも行くかい？」

二人は恐る恐る首を縦に振るとクリフと共に一度機関室降りるとクリフは巨大ゴーレムを6体作り出すとその後機関車にレビティションをかける。

少しだけ軽くなった機関車は6体のゴーレムに持ち上げられて町をどんどんと離れていく。そして随分と離れた原っぱでゴーレムは機関車を下ろすが、その時重い物同士がぶつかるような鈍い音がした。

「これ……なに？」

「レールって言うんだ」

「機関車は便利だけど、このレールの上しか走れないっていう欠点があるんだよ」

「あつちには知らない穴があるんだけど……ノームさんいつの間に掘ったんだろう？」

ユニイが見る先には確かに大きなトンネルがある。そしてレールはそのトンネルまで繋がっているのだ。

これはクリフが一週間前にノームと話し合いをしていた時にノームに依頼しておいたことなのだ。この機関車が通れるぐらいの広さの穴を掘っておいてくれないかと。

そして皆が寝静まった頃にクリフは一人レールを錬金して作っていた。こんな巨大な物体ならレールはつぶれる可能性があるのでレールは納得いく鋼で作れるまで何度も失敗を繰り返した。

そして車両自体の重さを軽減するために色々な工夫をするなどしてようやく完成した機関車の機関部に三人は乗り込むとクリフはゆっくりとレバーに手をかける。

「よし、それじゃあ……行くぞ」

真剣な面持ちのクリフにつられてテファとユニイの呼吸も自然と止まる。

そしてクリフはレバーを回す。

常に浮力と風を生み出す風石の風を上に出放されていたのをシャットダウンして風のながれる方向を変更する。流れる先は動力部分。風はやがて車輪をゆっくりと動かし始め、そしてその車体は音を立てて動き始めた。

「やった……やった！やったぞテファ！！」

風を切りながら進む機関車は馬なんかよりも何倍も早い。それを目の当たりにしたテファとユニイは驚くことさえ忘れて興奮して流れてゆく景色に目を輝かせていた。

トンネルに突入した機関車は歩きとは比べものにならない速度で隣の箱庭へと移動するとさらに次の箱庭へと移動してゆく。

「よし。このまま速度を上げて最高速度の計測だな」

車体に問題は見受けられない。レールも何十にも固定化をかけているため心配はないだろう。そこでクリフはさらに速度を上げる。時速90?といったところだろうか。クリフの作った速度計が90を指し、そして最高速である150?へむけて更に加速する。二人はそれをワクワクしながら見ているが、失敗したらどうなるかということを考えていないのだろうか。

空気抵抗を軽減するために伸びた先端部が風を切りながら長い直線のトンネルを147kmで通過した。

クリフは満足のいく結果に徐々に速度を落としながら環状になっているレールを伝いスタート地点へと戻ってきた。

「とりあえず機関部は完成、あとは後ろの車両を作るだけだからあと一週間あれば完成だな」

「凄かったあゝ……クリフ君の言ってることって本当だったんだね。ホントに馬より早かったよ」

「私も驚きました。こんな物があんなに早く動くななんて……」

テファは今だ先ほどのことが信じられないといった様子で機関車を見ている。

テファとユニイはこれを面白い物だぐらいにしか考えてはいなかったがクリフは違う。

まずは地上と箱庭を繋ぐホットラインを作ることを模索していた。箱庭は地上から数?も深い地下にある。こんな場所から歩いて地上に向かうトンネルを掘るとなればかなりの距離もあるし、穴の角度も人の歩くようなものではなくってしまいかもしれない。

だからこそこの新たな移動手段を使えば迅速に、そして安全に地上に出ることが出来る。

そして他には各地からもっと人を集めて箱庭を充実させることも機関車を使えば出来ると考えていた。

「夢が膨らむなあ……………」

ジュラルミンで作られたボディを撫でながらクリフの頬が緩む。それだけクリフの中には様々な計画が考えられていた。

機関車が完成してから一ヶ月。
何時しかレールの周りには柵が作られ、そして箱庭で機関車知らない物はいないぐらいまでに機関車は皆に親しまれるようになった。

今までは遠くてあまり行けなかった箱庭にも畑を作る者も出てきたし、行きたくても少し遠いということから諦めていた温泉までの直行便が出来たのだ。これには皆も大変喜んでいた。

そして機関車は量産を重ね、今では登り線と下り線に加えて遠くの箱庭へと向かう路線も併せて7両もの機関車が出来上がっていた。最初一週間の時間がかかったのは風石の力をどう利用するかというのが思った以上に難航したからであり、一度作ってしまえばもう同じ物を作ることは容易だ。

そして今クリフはマチルダと共にある箱庭へ向けてトンネルを掘っている。

「こつちでいいのかい？」

「ああ、そのまま真つ直ぐ頼む」

マチルダが90メートルほどの巨大ゴーレムを作りトンネルを掘り進む。その後ろでクリフは壁面を錬金、固定化しながら方位磁石で場所を確認しながらマチルダを誘導していた。

二人が向かう先はトリステイン王国首都、トリスタニアの直下にある箱庭だ。つまりこのトンネルが通ればゲルマニアの首都、ヴィンドボナの地下から相手の首都までの直行便が出来ることになる。

「それにしてもこのドリルとか言うのは消費が激しいよ……その分凄い勢いでトンネルは出来るけど」

マチルダの作ったゴーレムは前面に巨大なドリルがあり、進むことで半円状のトンネルを掘れるようになっていく。

巨大ゴーレムは直進するだけなのでそんなに細工はいらないのだが、ドリルを高速回転させるのはやはり相当な精神力を使うようだ。

「何か手伝うことはないかい？って言うてきたのはマチルダなんだから、頑張ってくれよ」

「こんなことなら軽々しく口にするんじゃないかな……」

文句を言いながらもマチルダはゴーレムを進めてゆく。すこしだけマチルダが可哀想になったのか、クリフは後ろに同等の巨大ゴーレムを作り出すとマチルダのゴーレムを押し始める。

マチルダのドリルゴーレムは押された勢いで速度を上げながらトンネルを掘り進めてゆく。

「そろそろ繋がってもいいはずなんだけど……………」

そう言った瞬間だった。ゴーレムが掘る穴の先から光りが漏れてクリフとマチルダの目を焼く。そのまぶしさに目を細めていると次第にその全貌が明らかになってゆく。

「ここも中々広いね……まあ首都の下だから仕方がないか」

「精霊に確認したけど間違いないって。この広さなら十分街が作れるな」

クリフは目を閉じて何かを念じると数秒後に目を開けてここがトリスタニアの地下であることを確信した。

一体何を行ったのか？それはクリフの使い魔としての力だった。

クリフの持つルーン。アウルヴァングは精霊を従えることが出来る。それを応用して精霊に今の位置の確認をとったのだ。

精霊達はこの星から生まれこの星を感じながら生きている。そんな彼らには今クリフがどこの地下にいるのかなど地上に出ずとも手に取るように分かる。

そんな精霊達との通信網をクリフは『ネットワーク』と呼んでいるが、本人にしか出来ないことであり、感じることも出来ない他人には関係のない話だろう。

「で？次はどこまでトンネルを延ばすんだい？」

「このままガリアにも延ばしてみたいけど、ガリアは広大だからなあ…………それはまた別のルートを作るとするよ」

「了解。それじゃあ迂回するトンネルだけど、こっちはどうする？」

「そうだなあ。主要であり大きな場所で言えばトリステイン魔法学院とヴァリエール領が近いからそこらを通るように帰りのトンネルを掘ろうか」

二人はとても簡単に言っただけはいるがこれは本当にとんでもないことだということを自覚しているのだろうか。

普通の人間なら一日で100mもトンネルが進んだなら賞賛はされど文句は言われない。しかし二人は一日で数10kmに渡るトンネルを掘り進むのだ。

そして二人で交代しながらヴィンドボナからトリスタニアまでの距離を数日で掘りきったのだ。ノームでもこの大きさの穴を掘るなら一ヶ月はかかるだろう。

そんな二人は疲れた顔もせず、今度はトリスタニアからトリステイン魔法学院までのトンネルを掘り始めている。明らかに二人の精神力が異常なのは言わずもながら分かるだろう。

しかし二人だってその強靱な精神を一朝一夕で手に入れたわけではない。血の滲むような鍛錬で互いを高め合った結果がこれなのだ。

「それにしてもやっぱりクリフは変人だね」

「なんだ？ 藪から棒に」

「いや、ふと今までのことを思い出してただけだよ。突然現れたかと思えば伝説の使い魔だっていうし、貴族でもないのに魔法を使い出すし、変な機械を発明するし……数えだしたらきりがない」

呆れたようにため息をついてはいるがマチルダの巨大ゴーレムは動きを止めることはない。

それを聞いてクリフも壁面の錬金と固定化を交互に行いながら笑みを浮かべる。

「突然現れたのはテファが俺を呼んだから。魔法を使えるのはどうやらこの胸のルーンが関係しているんだって。そして俺の発明は全て元の世界の模造品だよ。俺は知識を持っていたから真似しただけさ」

「あんな複雑な構造の物を知識として持つてだけでも変人だよ」

クリフの言うとおり、確かにクリフの発明の数々はただの知識の転用だが、それを行うことが出来るクリフの知識が凄いというのはマチルダの言うとおり。

それにクリフにしてみればマチルダの方が不思議だった。なぜこんなに自分に協力してくれるのだろう。最低でもこのトリスティンのトンネルを完成させるのには一週間はかかる。

それを最初に説明した上でマチルダはついて来てくれるといったのだ。それを今更ながらクリフが尋ねると。

「ゴーレムの練習だよ」

そう一蹴されてしまった。

だがこれでいいのだろう。少し冷めているマチルダと天然で明るいテファ、そしていつも二人の間で面白いことを始めるクリフ。

そんな三人だがそこには確かな絆があり、それは強く結びついていた。きつとこんなデコボコな三人だからこそ面白くて暖かいのだろう。

柄にもなくそんなことを考えてしまい、マチルダの後ろでクリフは笑みを浮かべていた。

「ああ………今帰ったよ………」

「お疲れ様、マチルダ姉さん。ご飯にする？お風呂にする？」

5日後に帰って来る頃にはさすがにマチルダも堪えたのか、少し
よろけながらテファ邸へと帰ると今のソファに倒れ込んだ。

そこにコップ一杯の水を持ったテファが現れ、マチルダにコップ
を渡すと新婚の妻が言うような台詞を微笑みを浮かべながら尋ねる。
本当に最近になって母親役が板に付いてきたと思う。おそらく様
々な人との交流で少し精神が成長したということなのだろう。
少し成長しすぎないでもないが。

「腹は減ってるけどまずは風呂に入りたい………そうだ。今日は皆で
温泉に行かないかい？」

その提案に周りにいた子供達が歓喜する。それを見てマチルダは
「それじゃあすぐに出るよ。準備しな」と子供達に指示を出しながら
立ち上がる。

「温泉に行くのはいいとして、クリフさんはどこに行っただんですか
？」

「エリスのところだよ。これからの箱庭整備計画で少し話がある
んだそうだ。まあそんなに時間はかからないだろうからすぐに戻っ

てくるさ」

なぜそんなことが分かるのかとマチルダに問い詰める前にクリフが家の扉をくぐる。慌ただしく子供達が行き来する廊下を挨拶を交わしながら歩いて行くとテファとマチルダも何処かに行く格好をしている。

「クリフも早く支度しな。温泉に行くよ」

「了解。すぐに準備するよ」

そう言つてすぐに準備を終えた頃には皆集合して家の前に集まっていた。そしてテファとマチルダを先頭に子供達が列を成して機関車へと向かう。

慣れたように乗り込む子供達を見ながらクリフは機関室に乗り込み風石のエネルギーを車輪へと向ける。徐々に進む機関車の窓に張り付く子供達はいつの時代でも見られる光景だ。

そして安定した速度になり5分ほど森を進んだ先に集落のような物が見えてきた。それは決して大きいものではなかったが、そこにはちゃんと明かりがついている。

「おっ？久しぶりだねクリフ君、マチルダさん。トリスティンへの男女二人の旅行はどうだった？」

「なっ！？何言つて……！？」

「土と暗闇に包まれたなんのロマンスもない旅だったよ。それよりもユニイ、温泉は今入れるかな？」

ユニイの冗談に顔を赤くするマチルダを尻目にクリフはいつもの調子で笑みを浮かべながらそれを避けていた。それを聞いて「ちえ、

つまんな〜い」と言いながらもクリフ達を温泉の方へと案内していく。

しかしマチルダにはその言葉は頭に入っていかなかったのか、その場で固まったまま動かなかった。

それを見てテファは不思議に思いながらもマチルダの背中を押して皆の後ろについていくのだった。

七話

「ちとまずいな……………」

ノームは珍しく地上に出ていた。いつもなら箱庭、もしくはそれより地下で風石の管理や穴を掘ったりしているのだが、そんな彼が今は月夜に浮かぶアルビオン大陸を見ながら顔をしかめている。

「これは色々と考えなくちゃいけないか……………」

そう呟くとノームは再び地中へと戻りこの事態を彼らへと知らせるべく急いでいた。

地上を満たす不穏な風を受けながら。

地下では着々とクリフ提案の箱庭改造計画が進められていた。
まずは街割りをしっかりすることだ。湖の畔にあるエリスの家、つまり領主邸からクリフが作った機関車の駅までの直線を大通りと

して石畳を敷いた。

それは横幅50mにはなるであろうクリフの世界でもまれな巨大メインストリートとなった。そしてそれを基準に碁盤の目のように区画が整備されている。区画ごとに湖から水を引いて小川を作る。

このような区画整備を行う際に邪魔になる家ももちろんあったのだが、それは土のメイジにしてみれば何の問題でもない。

家を地面ごと動かしてまるで家が地面をスライドするかのように動かしてみせたのだ。家の中は何ともなく、食器一つ壊れていない。亜人達はクリフとマチルダの技に感嘆の声を上げながらも自分達の街が変わっていくのを物珍しそうに見ていた。

それもそうだろう。亜人にここまで大きな街を作る技術も人手もなかったのだから。だから彼らは自分の街がどのような変貌を遂げるのかがとても楽しみだった。

「区画整備と湖からの水は引き終わったよ。そっちはどうだいエリス」

「このターミナルっていう建物、初めて見るけど作りは簡単だからすぐに終わるわ。皆も頑張ってくれてるし」

機関車の前には大きな建物が亜人の手によって鋭意制作中だ。

本当ならこれはクリフとマチルダで金属製の簡単な建物になるだっただが、さすがにそれは味気ない。

ということで住人達が立ち上がり手分けして建物を作っているのだ。本音を言えば楽しそうだったからという理由が8割ほどを占めるのだが。

「それにしても以外だね。今までそこまで仲が良くなかった種族同士も協力してるよ。何があったのかね？」

よく見るとミノタウロスと翼人が共に行動している。これは今までの箱庭ではあり得なかった光景だ。

「何かあった……というより何もなかったんじゃない？」

「……………どういう意味だい？」

「切っ掛けがなかったただけなのよ、きっと。ここにいる全員が心に傷を負っていて、互いにそれを知っているし、その辛さも知っている。けど長年の種族間の嫌悪は簡単に消すことが出来なかった。あなた達の場合はほとんどが子供だったし一人はハーフエルフ。そしてあなたとクリフもノーム様に認められた人だったから特別ね。でもあの子達は違うでしょう？」

目を向けた先には翼人の少女が荷物を持つところだった。その荷物は翼人には重たいのだろう。かるうじて持ち上げてもすぐに地面についてしまう。

そんな彼女を助けたのはミノタウロスの男だった。荷物を軽々持ち上げると少女に一声かけて笑みを浮かべる。そして彼女は言ったのだ。「ありがとう！」と。

「互いに気まづかっただけなのよ。気の知れた友達同士の喧嘩みたいなもの。だからこういう切っ掛けさえあれば簡単に手を取り合えたのよ」

「種族間の長い争いを友達の喧嘩とは……エリスも中々剛毅なもんだね」

「そう思わせてくれたのはクリフよ。クリフがいなければこんなことにはならなかったんだから」

間接的とはいえクリフがこの箱庭の住人の絆を深めたのは間違いない。当の本人はそんなこと全く考えずにただ自分のやりたいことをしていただけなのだから気付いてすらいないが。

「おーい！二人ともー！」

「噂をすれば……だね」

「フフツ、そうね。呼んでるみたいだし、行きましようか」

マチルダとエリスが振り向くとそこにはクリフとテファが肩を並べて歩いていた。

その手にあるのはおそらくお弁当だろう。二人の後ろにいる子供達も同じバスケットを持ってこちらに歩いてくる。

エリスはそれを見て皆に休憩を取るように伝えた。

「あー！それ私のだよー！」

「まずい！？逃げろ！」

「じらー！空飛んで逃げるなあー！！！」

お弁当を囲むクリフ、テファ、マチルダ、エリスは何か賑やかな

方に目を向けると、どうやら女の子が翼人の少年にサンドウィッチを取られたらしい。

それを見て笑うエルフと獣人達。なんとも不思議だがそれはとても平和な光景だった。

「ん、やっぱりテファの作る料理は美味しいね。朝から準備してたのかい？」

「はい。今日は皆で作業すると言っていたのでちょっと頑張ってみました」

「本当に美味しいわね……………あつ、そうだ。クリフ、地下の下水工事のことなんだけど…………」

あちらでは翼人の少年が飛び回り、それを女の子が追いかけている、違う方では様々な亜人達が会話に花を咲かせ、そしてクリフ達も各々話を楽しんでいた。

と言ってもクリフとエリスは午後からの工事の打ち合わせのようなもので会話というより業務連絡だ。

「東地区の下水トンネルはほぼ完成したよ。あと二日もあれば全部完成出来る」

「予定より早いわね。それなら次はゴミ処理の件について意見が欲しいんだけど」

クリフが提案した下水トンネルは文字通りただの下水道だ。しかしこの世界にはトイレと下水道という概念は薄いらしく、平民にはまったくもって浸透していない。

それに街が糞だらけになるのはクリフも耐えられないので一人で

でも下水道を作ろうと決意したのだ。下水は地下深くへ落ちると巨大な地下水脈から少しだけ流れを分岐させた水路に流れる。それはやがて海に流れるのだが、この世界の海ならそれぐらいなんともないであろう。

クリフの街の衛生面は気をつけた方がいいと言う忠告を聞いてエリスはかなり関心したようだ。

下水だけではなく自分からゴミの処理をどうしたらいいのかと提案してきたのだからクリフも少し驚いていた。

皆で取る賑やかな昼食は全員が満足出来たようで、皆意気揚々と持ち場へと向かって行った。クリフとエリスも有意義な意見交換を主な得たのか、エリスも顔も少し明るい。

ちなみに女の子のサンドウィッチを奪った少年は母親の翼人にただいま叱られ中だ。そこは誰も近づかないように避けて通っている。やはり怒る母より怖いものはないのだろうか。

「ん？ノームの気配だ」

「ノーム様？姿は見えないけど……」

クリフが言ったノームの気配とは振動と精霊をアウルヴァングとしての能力だ。エリスの想像するような気配とは少し違う。

そしてその気配は徐々に自分達に近づいているのを感じたクリ

フは地面を二回ほど強く踏んだ。

そしてそこから突如として巨大なモグラが姿を現した。

「ふう……流石に遠いな。それよりクリフ。お前勝手にここの地下にトンネル掘っただろ。そういうことはちゃんと俺に許可を取れ」

「悪かったって。でもちゃんと地面が抜けないようには設計したんだけど。……もしかしてやばかった？」

「いや、あれぐらいの構造なら何の問題もない。けどここに来るまでにトンネルの壁にぶつかって頭打ったんだよ。これ」

「これを見る」と言っただけで頭は少しだけこぶが出来ている。クリフは「悪い悪い」と謝ってその場を納めるとノームの方へ真剣な眼差しを向ける。

「それで、何があったんだ？ 雰囲気がいいつもと違うけど」

「……何でそんなに鋭いんだよ。まあいい、とりあえず話すことがある。皆を呼んでくれ」

ノームはいつものような飄々とした表情を浮かべていたのだが、クリフには雰囲気の違いが分かってしまったらしい。

そしてエリスとマチルダは作業再開したばかりの皆を再び集め直す。ノームの言葉を待った。皆の顔を見渡してノームは頭を掻いている。

話しづらいのだろうか。先ほどから小さくため息やうなり声を上げている。しかし今覚悟を決めたようだ。

「皆、今外で起こってることを簡潔に説明する。……今アルビオン

ではレコン・キスタと言う反政府組織が徒党を組んで活動してるんだが……………これが厄介でな」

「何が…………？」

クリフの言った通りそれが皆の答えだ。クリフ達はアルビオンにいたところから少しはそのレコン・キスタの噂は聞いていた。

そこまで勢力も大きくないので王国騎士団が動けば風の前の塵と同じだ。しかしノームはその者達が厄介だと言う。これはどうしたことが。

「そいつらの中に水の精霊からアンドバリの指輪を盗み出した奴がいるらしい。この前水の精霊に相談されたんだが、精霊達の情報じゃレコン・キスタの連中には操られてるような奴がいるらしいんだ」

水の精霊の持つ秘宝、アンドバリの指輪。それが先日盗まれたと水の精霊に聞いていたノームは秘宝の行方を独自の情報網で調査していた。

精霊から情報を集めてはめばしい場所へと向かう。クリフのように精霊のネットワークを使って色々調べ廻ったようだ。水の精霊がどうしてそれをしないかというと彼女は水辺でしか存在できないらしい。故に地上を自由に行き来出来るノームに相談したのだろう。

「アンドバリの指輪ってノームが前に言ってた死者をも操るマジックアイテムだろう？それがレコン・キスタの手に渡ったのは理解した。でもそれが私達に関係あるのかい？」

「そのマジックアイテムを盗んだ張本人、その女はどうやらガリアの手の物らしい。……………最も、それ以上のことは分からず仕舞いだっただけだな」

「ガリア？なんでそこでガリアの名が出てくるんだい？」

「だから分からねえって言っただろ。相手はアルビオン大陸にいるんだ。俺じゃどうしようもねえ」

皆は未だに首を傾げているがクリフだけはその厄介さに気がついたようだ。

つまりアルビオンを倒そうとしている勢力のバックにはガリアがいてさらには死者をも操るマジックアイテムも保持している。

つまりは人手は操って集めればいいし、武器はハルケギニア最強の国、ガリアがいくらでも支援出来る。おそらくレコン・キスタが本格的に反政府活動を開始すればアルビオンは間違いなく落ちるだろう。

そしてその裏にいるガリアはそれ以外にも必ず何かを企んでいる。でなければガリアにとってレコン・キスタの支援など無駄な出費にしかない。本気を出せば圧倒的軍事力だけでアルビオンを倒せるはずなのだ。

「ガリアの動向は分からないのか？」

「それがまだよく分からねえんだ。まったく、どこが無能王だよ。あちらさんにはエルフまで着いて何か大きなこと企んでるらしい」

「エルフが！？」

話を聞いていたエリスが思わず驚きの声を上げた。エルフが人間に荷担している。それが信じられないのだろう。

「残念ながらこれは事実だ。……でだ。ここからが本題なんだが、

おそらくガリアは数年のうちに戦争を仕掛ける。しかもかなりの規模の物をな。

そこで俺は思っただが、この箱庭に難民を受け入れようかと考えてるんだ」

「それはクリフ達以外の人間をここに住まわせるということですか？」

クリフの提案、それは数年後に始まるであろう戦争から生じる難民の受け入れ。元々ノームはハルケギニアを守るためにこの箱庭を掘ってきたのだ。ハルケギニアの民を守るためにここを使うのは何ら間違ったことは言ってない。

しかしエリス達は苦い顔をノームに向けている。ノームの言うことも分かる。しかしまだ亜人と人間の間にある溝は深かったようだ。確かにクリフ達は良い人間だ。それに自分達と同じような境遇を持っている。だったら難民達も同じような境遇を持った仲間になれる。そうは思うのだが、皆人間をここに入れると聞くとやはりいい顔はしなかった。

「ちょっと待ってくれ。戦争を起こさないようにするのが一番の解決策なんじゃないのかい？幸いにレコン・キスタはまだそこまで大きくはない。攻勢に出るにはもう少し時間がかかる。なら今のうちに叩いておくべきじゃないのかい？」

「ここで下手に動けばガリアに目をつけられる。そしてここが見つければさすがにまずい。だから動くのはレコン・キスタが攻勢に出て王国軍と本格的にぶつかった時だ。

それに難民をいきなり受け入れられるとも思っていないさ。今から少しずつ人間を受け入れていけばいい」

今から少しずつ人間を受け入れて亜人に人間との溝を少しずつ埋めていく。そういうことなのだろう。

ノームはこの箱庭で6000年に渡る人間と亜人の対立を少しずつ無くしていこうとしているのだろうか。それは一体何年かかるか分からない。けどノームがそれを行おうとしているならクリフはそれを手伝いたかった。

「俺はノームに賛成だ。……皆だってもう対立するのは嫌なんじゃないのか？出来ることなら手を取り合って生きることを望んでいるんじゃないのか？」

「当たり前よ。……でもね。それは無理なの。クリフやテファ、マチルダは特別だったのよ。人間の殆どはブリミルの教えとやらを子供の頃から聞かされてエルフを嫌い、亜人を虐げてきた。価値観も何もかも違うのよ」

「それでもそこで諦めたら終わりなんじゃないか？全員がそんな人間だとは思わないでくれ。確かにそういった人間はいるさ……でも、手に一度でも触ってみなければ手を取り合うことが出来るかどうかは分からないと思う」

「結局はやってみなきゃ分からないってこと？……それも正論ね。はあ………分かったわ。それにノーム様の願いなんですもの。それを私達が無碍にすることは出来ないわ」

そのエリスの意見に皆は渋々ながらも同意した。それを見てノームは「ありがとう」と頭を下げる。

横でそれを見ていたクリフ達はノームが頭を下げたことに内心かなり驚いていた。

八話

ノームの提案を受けたクリフ達は人間を受け入れるための準備を進めていた。と言っても街割は完成しているのであとはそこに人間が来て家を建てるだけだ。

それよりも重要なのは始めに受け入れる人間を誰にするかという問題だった。

適当にそこら辺の人間を連れてきたとしても亜人を怖がりそして対立して終わるといいうのが目に見えている。

それならば何か地上では生活し辛いような人々を選ぶべきだ。そこでクリフ達は一つの案を立てる。地上に出て色々な町や村を回り、困っている人々を箱庭に招いていくというのはどうだろう。

それになれば地上の人間は気付くことはないであろうし、何よりここの住民達ともすぐに仲良くなれるのではないかと考えたのだ。

「私達が先兵なのかい？まあ私達ぐらいしか適任はいないだろうけど……」

「エルフや翼人がそこら辺をウロウロするわけにもいかないでしょう？頼んだわよ、マチルダ、クリフ」

「了解、そつちもテファのこと頼むよ」

地上で人助けをしながら箱庭の住人になれる人間を捜す旅に出ることになったのは人間であるクリフとマチルダ。

二人は一年ほどかけて各地を回ってみるらしい。仕事と言っても気楽なもので、二人とも旅行程度にしか考えてはいなかった。

「それじゃ、行ってくるよ」

そう笑顔で言ったクリフは地上行きの機関車に乗り込むと皆の視線を受けながら箱庭を後にした。

「不安？まあしょうがないわよね、今までずっと一緒だったんでしょ？」

最後まで機関車の消えていった方向を眺めていたテファの後ろからエリスの声がする。テファの隣に並びながら同じ方向に視線を向けているとテファは微笑みを浮かべながらポツリポツリと話を始める。

「そう……ですね。確かに不安かもしれませんが。でも二人は頑張ってるんです。箱庭の皆のために。」

私は何も出来ないですけど……あの二人は違いますから」

「テファは立派に子供達を育てているじゃない。いつも頑張ってるのはここの皆はちゃんと知ってるよ」

「それでも、私にはあの子供達を守ることは出来ません。そう思うとやっぱり私はダメなんだって……そう思うんです」

この子は一体何歳なのだろう。エリスはふとそんなことを考えてしまった。

自分の遊ぶ時間など一切持たずに子供達を育てることだけに生きてきたこの13歳の少女はどこまで自分を達観しているのだろうか。

視線の先は機関車の消えていったレールだが、きっとこの子はここにクリフとマチルダの背中を見ているのだろう。

守る力が欲しい。こんな子供がそんなことを望んでいる。大人の一人としてエリスはそれがとても情けなく、そして悲しかった。

「じゃあテファ、私が先住魔法教えてあげようか？」

「えっ？先住魔法？」

「あなたはハーフエルフなんだからきつと先住魔法を使えるはずよ。守る力が欲しいんでしょ？なら少しだけ習ってみない？」

その誘いに対するテファの答えは即答だった。自分も二人のように強くなれるのだろうか？

今までのそんな漠然とした希望が今現実になるかもしれない。その可能性だけでテファは何事も頑張れる気がしてのだ。

ゲルマニアの首都、ヴィンドボナの下町。ひしめく住宅の中の平凡な家の中にクリフとマチルダがいた。

ここは地上行き機関車の出入り口がある家で、この家はクリフが密かに購入していたのだ。

こんな王のお膝元にそんなものを作ってもばれないのかという疑問もあるが、その辺はちゃんと対策をしてある。

帝都の中でも一際人が多い住宅街の隅、人もそこそこいて家が建

ち並ぶようなそんな場所にある平凡な家に誰が注目するだろうか。
そしてその家の中の強力な固定化がかけられた床の一部をはがすと現れるボタンを押すことで、階段の下に隠された道が現れて、そこを進むと一件の家にとり着き、その中で壁の中に隠されたボタンを押すことで床の駅へと続く階段があることなど最早神でも予想できないだろう。

「いくら何でもこれは疲れるねえ……ここまでする必要はなかったんじゃないかい？」

「慎重に越したことはないさ。それでマチルダ。これからのことなんだけど……どうする？」

ノームがやるうとして理解しているし、それに賛同もしている。マチルダやテファと同じような境遇の人を放つてはおけない。それは分かっているのだが、急に飛び出してきたに近い二人は今後どこに行けばいいかなど全く考えていなかった。

「そうだね……ブリミルのクソ坊主共がうじゃうじゃいるロマリアや貴族がでかい顔してるトリスティンに行くのもいいけど、まずはこのゲルマニアから始めようか」

「ゲルマニアで人が虐げられる理由と言えば……やっぱり貧民層かな」

ゲルマニアは良くも悪くも実力主義。能力さえあれば平民でも貴族になれ、無能ならば貴族でも平民に格下げされてしまう。

だからこそこの国は強大な力をつけてきているのだが、強い者がいればそこには必ず弱者がいる。

貴族制なら平民達は『自分達は平民だから』と貴族を恨む者はあ

れど平民同士で恨み合うことはほばない。

しかしここは平民同士でも大きな格差があり、それは確固たる個人の力の差が生んだもの。それは確かに弱者本人が弱いから悪いとも言えるが、だからといって強者がそれを虐げても良い理由にはならない。

トリステインでは『平民だから弱者であり弱い』。ゲルマニアでは『弱いから弱者であり平民』なのだ。

「そういった奴らが集まってる村があるって噂だ。そこに行けば何人かは来てくれるかもしれない」

「よし、そうと決まれば早速行こうじゃないか」

二人は立ち上がると帝都の貧困層の街へと向かった。

「ひどい匂いだね……………地下より空気が濁ってるよ」

街の人間に貧民層の街はどこだと聞くと「ああ、レイベルエリアのことかい？ここから南にいったところにあるけど、あんな場所に何の用があるんだ？」と気軽に教えてくれた。

そして街の南へと向かうとすぐにそのレイベルエリアという場所が分かった。そこだけ住居らしい住居が建っておらず、地べたに多くの人が座り、その人達の着ている衣服もヴィンドボナ市民とは比

べものにならないものだった。

「噂には聞いてたけどここまでひどいとはね……っと、これで何人目だい？」

マチルダがすれ違い様に男の手を捻り上げると、そこにはマチルダの財布が握られていた。焦る男の股間を思い切り蹴り上げるとマチルダは何事も無かったかのようにクリフの隣を歩いていった。

噂というのは勿論このレイベルのこと。トリステインやロマリア、アルビオンならこんな不審で危険な場所を首都の近くに置いたりはしないだろう。

しかしゲルマニア皇帝、アルブレヒト三世はこれを放置したままなのだ。馬鹿な貴族は陛下の無能さを声高らかに馬鹿にするが、有能な者が見れば陛下を推し量らねばならない。

世の中には汚い部分というのが絶対に存在する。その汚い部分を集めたのがこのレイベルなのだ。盗み、殺し、噂では人身売買までも行っているという。

故にここには腕利きの傭兵や貴重な盗品が集まってくる。そしてそれを見に貴族が訪れて膨大な金をそこに落としていくのだ。

確かに治安は悪いがこの者達はヴィンドボナの人間に危害を与えることはしない。自分達が少しでも帝国に楯突くことをすればたちまちこの人間ごとレイベルが消されるのは誰もが分かっている。それをさせないために傭兵達は馬鹿な不良達などを見つけると自分達で罰してこの規律を叩き込んでいる。彼らにとってもここはとても居心地がいいのだろう。

そしてここには仕事にあぶれたり、どうしても金が必要な人種がどんな仕事でもいいからと仕事を求めてやって来る。それが盗みであろうと殺しであろうと。

「あんまり気分のいいところではないね。あの子供、うちの子達と同じぐらいじゃないか」

「テファやマチルダが拾ってなかったらこうなってたんだろうさ。でもそうはならなかった」

「ああ……ただちよつと違う道を歩むことになっただけ。その違いがこれか……これが普通なこと、なんだね」

「マチルダが救えなかったわけじゃないさ。それに、これから救うんだろ？」

「勿論だよ」

二人はその後、街を物色するかのように歩き回っているが、ふと先ほどからこちらを見ている者がいる。

帝国の手の者か？一瞬そう考えもしたが、相手は隠れているつもりなのだろうが二人にはバレバレだ。ゲルマニアの諜報員がこの程度のはずがない。

それに顔を見るかぎりどうやらマチルダが懲らしめたスリのように。少々目障りだが自分達から関わっていく気にもなれなかった二人はその者を放っておくことにした。

それから一時間。未だにその男はついてくる。クリフは無視出来るのだが、マチルダはいい加減いらいらが限界らしい。

もう我慢出来ないと魔法を使ってその男の足元を錬金し、身動きをとれなくすると怒気を背中に背負いながらマチルダは路地裏へと消えていった。

「で？何か言うことは？」

「……………すみませんでした」

30分ほど待ちぼうけをしていたクリフが帰ってきたマチルダを迎えたときにはその男はぼろ雑巾のようになってマチルダに引きずられていた。

相手はスリとはいえ流石にクリフもこれは申し訳ない気持ちになったのか、その男を連れてレイベルの宿へと向かった。目を覚ました男はマチルダに怯えながらもクリフと挨拶を交わしとりあえずテーブルで向かい合うように座っている。

マチルダは自分がやり過ぎたというのは分かるが泥棒相手に礼節をつくす気はないらしく、一人離れたソファに座って二人の様子をうかがっていた。

「それでレイチエルさん。なんであんな真似をしたんですか？」

先ほどの挨拶で分かったのはこの男がレイチエルと言う平民ということ。

そしてクリフは彼に犯行動機を聞いていたのだが、これにはマチルダは呆れてため息をついてしまった。

それもそうだろう。こんな街でスリをするのに理由があるだろうか。いや、ほとんどの者にその理由を聞いても『魔が差した』というような答えしか返ってこないだろう。

それを予想してマチルダは目を閉じて眠る体勢を取る。

「なんで……そんなことを聞くんですか？」

「その質問をした理由は？」

「……………私は、盗人です。それ以上の理由はいらないでしょう？」

「それじゃあ質問を変えます。……………何故お金が必要なんですか？」

「それは、あそ……………」

「遊ぶ金欲しさという嘘はダメですよ。本当の理由を聞かせてください」

その言葉にレイチエルは驚き、マチルダはぴくりと眉を動かす。

「この街でスリを行うのは確かに効率がいい。この街に入るときは貴族は身分を伏せて入るのが普通。そして服装も庶民に近い物を着て護衛も最小限に抑えるのが暗黙の了解だ。

そうじゃなければ貴族としての評判も落ちるし、この街に立ち入り禁止にされる可能性もある。だから俺達みたいに少し庶民より良い格好をしている人間を狙うのは分かる。

でもこの街でスリを行うのは相当な腕の持ち主だけだ。もし貴族に捕まっても文句は言えないし、傭兵に引き渡されたら拷問が待っている」

「……………」

「でも君は随分と下手な……………」というより初心者動きだった。それに服も汚れてはいるけどほつれてる場所もない綺麗な服装だ。

まだここに来て日が浅いと見えるけど、なんでここに来る気になったんだ？ヴィンドボナ市民ならこの危険性ぐらい百も承知だろうに」

精霊からの情報でこの常識や暗黙の了解などを聞いていたクリフは目の前の青年の身なり、そして未だ濁ってはいない眼を見て興味を引かれたのだ。

レイチエルは諦めたように俯くとポツリポツリと訳を話し始めた。

「馬鹿な話ですよ……。ある娼婦を、買いたいんです」

「お前っ！人間を買うだど！？そんなことが……………！！」

レイチエルの言葉を聞いて激怒するマチルダを止めたクリフはマチルダを隣に座らせるとレイチエルに視線を配る。

「私はヴィンドボナの片隅で野菜を売って生活してました。けどある日、レイベルの街に大きな馬車が入っていくのを見たんです。街に入る手前で止まったその馬車に私は興味本位で近づいて中を覗いて見ました。そしたらそこにはボロボロの服を着た女性達が沢山いたんです」

「奴隷……か？」

「はい。それが奴隷だということに私はすぐに気がつきました。……関わらない方がいい。

そう思っただけでそこに立ち去ろうとしたんです。けど最後に見えるた奴隷の女性が泣きそうな顔をして言っただけですよ。

『助けて』って。……………私はそれを聞こえなかったふりをして逃げました。

でもその後もその子の顔が頭に焼き付いて離れないんです。寝ても覚めても彼女の悲しそうな顔が頭に浮かぶんです。

それで私は初めてレイベルに足を踏み入れました。怖かったですけど、それでも奴隷売買の場所を突き止めたんです。

そしてそこには彼女がいたんです。……………牢の中に鎖で繋がれた状態で」

それまでの話を聞いていたマチルダの手は震え、眼はそれだけで人を殺せるような殺気が込められている。

クリフが落ち着けと言ってはいるものの、マチルダはその奴隷商人に対する怒りを自分でも抑えきれない。

「それで私はその女性をどうしたら助けられるかとその商人に聞いたんです。もちろん答えはこうでした。

『この女が欲しいなら一万エキューで買うんだな』って。私は商売道具を全てなげ売ってお金を作りました。それでも150エキューほどにしかありませんでしたけどね。

自分でも馬鹿なことをしてるというのは分かってます。一万エキューって……………下手な貴族でも手が出せませんよ。……………それでも、それでも諦めなくなかったんです……………」

話を聞き終えたクリフとマチルダに沈黙が走る。そしておもむろに立ち上がったマチルダを制止するようにクリフはマチルダの手を掴んだ。

「何のつもりだい？」

「マチルダこそ何のつもりだ？」

「分かってんだろう。私はその商人全員ぶちのめさなきゃ気が済まないんだよ。どけ、クリフ」

「頭を冷やせマチルダ。それじゃあ根本的な解決にはならないって」
呆れたようなため息をつきながらマチルダをなだめていたクリフだったが、マチルダがクリフの胸ぐらを掴み上げて椅子から無理矢理立ち上がらせる。

マチルダの怒りを宿した眼に対してクリフの眼は冷ややかなほど冷静にマチルダを見下ろしている。

「私は女を道具扱いする輩が殺したいくらい嫌いなんだよ！そういう奴にテファが何をされそうになったか知ってるのか！？
これ以上邪魔するならお前を殴り倒してでも私はその商人を殺しに行く。どけ！クリフ！！」

「それで？殺した後はどうなる？また奴隷商人が現れて同じことが繰り返されるんだよ。こういった奴は何人殺そうが同じさ。
害虫のように無限に現れては人間を虫のように扱うのが続くんだ。それはマチルダなら分かるだろ？」

「だからって！クリフはこれを放っておくのか！！
だったら私は……！！」

「落ち着けマチルダ。誰も放っておくとは言っていない。……それでレイチエルさん」

「は、はいっ！」

クリフの言い分も分かる。けど納得は出来ない。マチルダは苦虫を噛み潰したような顔をしながらクリフを睨むが、クリフはその視

線を受け流すと笑みを浮かべながら黙って二人の喧嘩を見ていたレイチエルへと声をかける。

「その女性を救う算段はある」

「ほ、本当ですか!？」

「ただし、その前に君の気持ちが知りたいんだ。……君はその女性のこと好きなのか？」

その女性のために一生を棒に振る覚悟はあるか？ 一生君が奴隷のような労働を強いられる可能性もある。どうする？ 犠牲になるのは君だ。俺はその手助けをするだけ。さあ、どうなんだ？」

その問いにレイチエルは少しだけ考える仕草をすると微笑を浮かべながら口を開く。

「私は……好きなんだと思います。そうです彼女のことを愛してます。名前すら知らない彼女を愛してしまっただけです。」

そのために私は仕事を捨てて人生を捨てました。……今更何も変わらない」

「君が奴隷になっても？」

「もう私には彼女を放って生きることには出来ないんです。他人ですけど、彼女は私のことを知らないと思いますけど、私は彼女が助ければ……それでいいんです」

三人を包む沈黙。クリフは大きく息を吸い込むとレイチエルを見て微笑んだ。

「分かった。それじゃあ明日、彼女を助け出そう」

翌日。レイチエルに涙を流して喜ばれたクリフは錬金で新たな服を作っていた。

それはマチルダ用のドレス。クリフ用の貴族が好みそうな派手な服、そしてレイチエル用の執事の服だ。

それらに身を通した三人はレイベルの街の中をレイチエルの案内で進んでゆく。そして行き着いた先にあったのは回りの建物と比べてかなり強固な建物だった。

「ここです。ここがレイベルの奴隷売買を一括している建物です」

レイチエルがそう言うのとクリフとマチルダはレイチエルを従えて門番の元へと向かった。

「止まれ。ここは関係者以外立ち入り禁止だ」

聞いていた通りの言葉、そして昨夜レイチエルから聞いていた言葉をもそのまま返す。

「ここは良い肉が手に入る店だと聞いたんだが、また来るよ」

「お待ちください。……それでは中へ」

手慣れた様子で扉を開ける門番を尻目に三人は易々と内部に入る。

「良い肉、ね……………反吐が出る」

「まあそう言うなってマチルダ。いかにも下衆らしい合い言葉じゃないか」

そんなふざけたやりとり行っているうちに一人の男が三人の前にやって来ると丁寧な挨拶を始めた。

「いらつしゃいませ貴族様。本日はどのような商品をお求めでしょうか？」

「大量に買い込む予定なんだが、とりあえず品物を見せてはくれなにか？それから決めてもいいだろう？」

それを聞いた商人は嬉しそうな顔を見ると三人を奥の扉へと通した。そこには牢屋がいくつもあり、そこには何人もの女性が収容されていた。

皆クリフ達を見ては怯えた様子を見せては眼を反らす。マチルダはそれを見て悲しげな顔をしているが、クリフはまるで露店に出ている品物を見るかのように彼女達を見下ろしている。

「ッ!？」

レイチェルの顔が引きつった。そこにはレイチェルがずっと会いたいと思っていた少女がおり、その少女は布きれのような物を纏いながら肩を振るわせていた。

レイチェルはクリフの袖を引いた。それに気付いたクリフは彼女の前で歩みを止めると腰を下ろしてまじまじと彼女を見つめる。

「ほお、お目が高いですな。そちらは元貴族のご令嬢でして魔法も使えます。それ故値段も一万エキューと他より高めですが……」

「今回は奴隷を買う気はなかったんだが、これはいい。こいつは私の夜の相手になってもらおう」

「はて？ 奴隷を買う気はなかったとは？」

「私は水のメイジでね。国から秘密裏に秘薬などの研究を仰せつつているんだ。だから今回は人体実験に使えるような人間が欲しかったんだが、こいつを殺すのは惜しいな。」

それで商人、ここにいる全ての者を合わせていくらだ？」

「全員ですか…… 少なく見積もっても50万エキューは下らないと思いますが、流石にそれだけのお金を持っているようには……」

それを聞いたクリフは執事服を着ているレイチエルを呼び出すとその手に持たせていたケースを商人に差し出す。

不思議そうな顔を浮かべながらも商人はそのケースを受け取ろうとすると、あまりの重さに商人はケースを落とし、膝までついてしまった。

「貴様！ 一体何をした！！」

衛兵達がクリフに剣を向けるが、クリフは何も感じない様子で商人に手を差し伸べる。

「すまない。中身が何だったかを忘れてしまっていた。手は大丈夫か？」

「え、ええ……なんともありません。しかしこれは一体？」

そう言いながら開かれたケースの中にはぎつしりと金塊が詰められていた。牢屋に開いた鉄格子の小さな窓から入る光を反射して黄金に煌めく金の塊を前に商人、衛兵、どちらも息を呑んだ。

「研究費を金貨で受け取ると場所を取るんだ。だから私はいつも金塊に変えているんだが……これでは足りないだろうか？」

「い、いえ！とんでもございません！多いほどでございます！」

「そうか。ならここにいるのと在庫、男女問わず全ての商品を貰おうか。私の研究に性別は関係ないからね。それに様々な実験体があった方がより良い結果が出る」

それだけ言うくとクリフは椅子に座り商人に早くしろとだけ呟いた。それを受けて奴隷市場は上へ下への大騒ぎになる。それを傍目にクリフ達は座って待っているとマチルダがクリフに小さく話しかける。

「こんなことなら地下から穴を掘って救出した方が早かったんじゃないのかい？いくら金塊は鍊金で作ったからといってもこいつらに金を払うのは癪だよ」

「こいつらにはこいつらなりの利用価値はある。それを使いたいだけさ………っと、準備が終わったようだよ」

「それでは貴族様。商品の送迎の準備が終わりましたでこちらへ」

そこには荷台に大量の人間が積み込まれた馬車があった。それを

見て満足そうにクリフは笑うとレイチェルに手綱を取るように命令する。

そして帰り際に商人に一言。

「そうそう。私の研究については他言無用で頼むよ。最近では色々なやつが私を嗅ぎ回っているんだ。非人道的だとか言ってるね。買ってくるがこれからはこの執事が買い付けを行うことになる」

「分かりました。貴族様のことは絶対に喋りません。それがこの街の暗黙の了解ですから」

「ふん。頼もしいな。それでは、これからも頼むぞ」

「ありがとございました。これからもご贔屓に」

レイベルから大きな馬車に乗ってクリフ達は箱庭へと続く隠れ家を目指す。その途中でレイチェルはそわそわとしていたが、クリフがあと少し待てと言うので黙って馬車の手綱を握っていた。

「よし……誰もいないな。それじゃそっちはマチルダ、頼むぞ」

「はいよ」

隠れ家の前にやって来たクリフとマチルダは隠れ家の前の路地に高い壁を作り出す。それらは隠れ家の入り口とクリフ達を隠すようにして路地を塞いでしまった。

そしてクリフは馬車の荷台の扉を開けると怯える女性達に馬車から降りるように諭す。しかしそれは冷たい命令に聞こえたのか、皆足がすくんで立てないようだ。

「皆、降りて下さい。大丈夫です。この人はひどいことは絶対にしません。そんなこと言っても信じてもらえないのは分かってます。けど……どうか信じてくれませんか」

困り果てていたクリフの横にレイチエルが立つと、彼は深々と頭を下げて彼女達にお願いをしたのだ。

その姿を見て彼女達も少し驚き、恐る恐る馬車から降りると鉄球を鎖で繋がれた状態で隠れ家の中へと歩いて行く。

「あ……………あ、あの……………」

俯いたままだ進んで行く紺の髪 of 女性の前にレイチエルは飛び出すと彼女に向かって何かを言いたげにしているが、何と声をかければいいのか分からない。

第一彼女が自分のことを覚えてくれているはずがない。そう思うとレイチエルは悲しくなり、彼女同様に黙って俯いてしまった。

「言いたいことがあるならさっさと言いな。男だろ、もっとしっかりするんだよ」

見かねたマチルダはレイチエルの髪型を変装する前の形に戻すと来ている燕尾服も鍊金で最初にあった時の服に戻す。

そしてレイチエルの背中を思い切り叩くとマチルダはクリフの元

へと行ってしまった。

背中を叩く大きな音を耳にしてその女性も一度上を向くと、そこには信じられない物があるかのように眼を見開いていた。

「……………うそ……………」

「あ、あの……………君は覚えてないだろうけど、僕は君が助けたかった。それで……………助けられてよかった」

これがレイチエルの素直な気持ち。自分を知らない相手にかける言葉をレイチエルは思いつかなかった。

だからレイチエルは今の気持ちを正直に表したのだ。心からの祝福を笑みと共に。

「うつん……………覚えてます……………嬉しい。私の声、聞こえてたんですね……………」

そう言う彼女は泣き出してしまった。それを見てレイチエルはオロオロとしてしまうが、レイチエルは覚悟を決めたように彼女の体を優しく抱きしめた。

「ごめんね。時間かかってしまつて……………」

「そんな……………私は助けてもらえた。それだけで十分ですよ」

女性は涙を流しながら笑みを浮かべ、クリフもそれを見て潤んだ瞳で彼女を見下ろしながら背一杯の笑みを浮かべていた。

「あ……………えっと、悪いんだが早く家に入ってくれないか？」

壁の撤去に馬車の解体まで全て終えたクリフは隠れ家の前で抱き合う二人を見てどのタイミングで彼らに話しかけようかと悩んでいたのだが、どうにもそのタイミングが訪れないので出来るだけ空気を壊さないように二人に話しかける。

しかし話しかけただけで壊れるあの手の空間はクリフの気遣いもむなしく、レイチエルとその女性が顔を真っ赤にして隠れ家へと入って行った。

全員が中に入ったのを確認するとクリフとマチルダは鎖や手錠などを全て外し、突然自由になったことに驚いている彼女達をダイニングに集めた。

「さて、君達はこれで自由だ。その扉から出て行くのも自由。何するも自由だ。

ただ俺達も目的も無く君達を助けたわけじゃない。扉の外の自由を選ばず俺達についてくるなら一生ある場所で暮らしてもらわなければならない。

安全は保証する。君達が無ければ君達にも住みやすい場所になるだろう。

それでもう一度聞く。……その扉から出て自由になるか、俺達についてくるか」

その問いを受けた彼女達はきつと頭の中で必死に色々なことを考えているのだろう。無言で考える皆を見てレイチエルの背中に隠れていた例の女性が名乗りを上げた。

「私は行きます。私を助けてくれたあなた方についていきます」

「そうか、ありがと。そういえば名前を聞いてなかったな……名前は？」

「ミランです。ミラン・フェリエル・ギルン・ド・レスペル……と言ってももうレスペル家はないんですけどね」

「取り潰しか？」

「いえ、盗賊の集団に襲われたんです。私の家は領地もない小さな貴族ですから。それを50人ぐらいの盗賊に狙われたんです。それで……」

「いい。大体想像はつく。もう十分だ」

過去の話始めたミランを見てクリフは焦って彼女の話を抑えと、未だ決めかねていた女性達の方へと眼を向ける。

ミランの話を聞いて何かが変わったのだろうか。彼女達はもう悩むのはやめたようだ。

「私もついて行かせて下さい！」

「わ、私も……！」

「私にはどうせ帰る家はないんですなら……」

どうやらここにいる者の大半がミランと同じような過去を持っており、もう帰るべき場所や人を失っているというのだ。

だったらもうこんな場所とは決別してクリフ達に付いていくというのだ。

「そうか、ならこっちに来るといい。これから君達が住む場所がこの先にある」

そう言ってクリフが合図するとマチルダにより隠れ通路の入り口

が開く。

それに驚きながらもミラン達はマチルダを先頭に隠れ通路を進んで行く。そして進んだ先にある一件の家の中でここで皆が住むのか？とレイチエルが首を傾げていると今度はクリフが新たな隠し通路を開いたのだ。

地下へと続く階段にミラン達は少なからず恐怖を抱きながらも固く狭い階段を下りていくと、そこには見たこともない巨大な何かが待っていた。

「な、何だこれ！？」

「すごい……………」

機関車を見て驚愕や感嘆の声を上げる皆を尻目にクリフは機関室の半自立型ゴーレムを起動させて客車の扉を開かせる。

自動で開いた扉を見てまたも声を上げる面々を見てマチルダは先だつて機関車に乗り込むと「早く中に」と皆を中へと招き入れる。

恐る恐る乗り込んだ者達は両側につけられた座席に座らされるが、その椅子の柔らかさに驚いた。

それは中に錬金で作り出したスプリングを仕込んで、加えて羽毛までもが入っているからだろう。だが一瞬腰を据えた女性達が驚いて椅子から飛び引いているのを見てマチルダも苦笑を漏らす。

「これから行く場所は絶対に他言無用だ。だがそれ以外の制約はない。だから皆には普通にそこで暮らしてもらうだけでいい」

それだけ言うとかリフは皆と同じように座席に座ると未だトンネルの壁を映す窓へと眼を向ける。

それに習うようにしてレイチエル達も窓の外を見てみると、突然そこから光が溢れだし、レイチエルやミランは思わず眼を瞑ってし

まう。

やがて光に慣れた眼が映したのは広大な土地と豊かな自然であった。

「こ、ここは……………」

「ヴィンドボナの地下数十メートル、箱庭だよ。ここがあんたらが住む場所さ」

唖然とする女性達を乗せて機関車は街のターミナルに停車する。

開いた扉から顔だけ出すとミランは怯えながらも箱庭の土を踏んだ。

「すごい…………空が閉じてる」

「ここは土の下なの？そんな馬鹿なこと…………」

女性達の疑問や驚きが尽きないのは分かるが今は黙ってついて来てもらう。クリフは皆を先導して街まで続く大通を歩いていると、ケンタウロスの男や獣人の少女に出会う。

「おっ？クリフ君じゃん！」

「ただいまユニィ。エリスはいるか？」

「家にいると思うよ。それで、後ろの人達がここに住む人間？」

そう言いながらクリフの後ろで固まっている彼女達をユニィがのぞき込むと皆体を強ばらせている。

それを見てユニィは黙ってミランに近づくとまじまじとその眼を見つめる。身長の高いユニィがミランの眼を見上げているのだが、

ミランはやはり少し怖いのか、子供の純粹な視線相手にオドオドしてしまっている。

「私は獸人のユニィ！よろしくね、お姉さん！」

「えっ？……あつ、はい。ミランです。こちらこそよろしく願います」

「うん！よろしく！」

そう言つてミランの手を握ると嬉しそうに握手した手を上下させるユニィに面食らつたミランはやがて笑みを浮かべてユニィのことを見ていた。

最初はどうなるかと思つていたクリフだったが、ユニィのような子供達がいれば大丈夫かと思い一安心する。そしてユニィと別れたクリフ達はそのままエリスの屋敷を目指す。

「エリスはいるか？」

「クリフ？随分と早かつたわね」

「エルフ………」

挨拶を交わしているクリフの後ろからそんな声が漏れた。

それを聞いてエリスは女性達の前に躍り出ると静かに頭を下げた。

「初めまして、この箱庭を管理しているエリスです。種族はエルフ。お気づきかと思いますが、ここは様々な種族の者同士が一緒に住んでいます。」

エルフ、獣人、翼人、亜人、人間……ここには行き場を無くした者達が互いに助け合いながら生きていく、そんな場所です。これからあなたは達もこの一員になる。
種族などとは関係なく、共に頑張りましょう」

男女問わず、さらには種族すら問わず魅了するような笑みを浮かべたエリスを前にミランもレイチエルも固まってしまっている。
はっと自分に差し出された手に気付いたレイチエルは急いでその手を握り替えた。

「それでエリス、これからのことを色々と話したいからちょっと時間いいか？マチルダにはその人達に街の案内を頼む」

「なんで私が？面倒だよ」

「そんなこと言わずに頼む……」

「……………はあ。しょうがないね。分かったよ」

懇願するクリフを前にマチルダが折れるのは意外にも早かった。
大きなため息を目の前でつきながらも皆を屋敷の外へと案内していた。
「……」

完全に静かになった部屋を確認してクリフはエリスに隣の応接室に移動するように提案する。

大きな机を挟んでソファに座る二人は侍女に紅茶を頼み、それを一口飲んでから互いに息を整えると先にエリスが話を切り出した。

「あの人間達は驚いてはいるようだけど、そこまで敵意は感じなかったわ。おそらくここに順応してくれるでしょうね。それで、話しているのは？」

「あの人達が順応するかどうか最初観察する。そして共存が可能と判断したらここの存在をある人間に公開しようと思う」

「ある人間？誰かしら」

「アルブレヒト三世」

それを聞いたエリスは思わず飲もうと思っていた紅茶を吹き出した。驚きのあまり咽せてしまったエリスをクリフは心配そうにのぞき込むがエリスは「大丈夫よ」と涙目で言うと呼吸を整えてから再びクリフと向き合う。

「その理由を聞かせて貰ってもいいかしら？」

「その方が何かと都合がいいから。それにあの皇帝はここを一度見ればその有益さに気付くだろうさ。」

そしてこちらと対等で有益な貿易を行えば何も文句は言っていないよ」

「確かに現ゲルマニア皇帝の噂は聞くけど……それでもここを皇帝にばらすっていうのは………」

「彼はここの莫大な利益を逃すような馬鹿はしないって。それにスパイなんかを送り込まれたとしてもここは獣人と亜人の街、五感が働く亜人相手に人間が敵うはずがない。それにここは精霊も味方だ。情報が漏れる心配はないよ」

「うーん……そう言った心配は確かに必要ない、か……でもそのアルブレヒト三世がここに攻め込んできたかどうか？それこそ敵

「いっこないわよ？」

「ここがヴィンドボナの地下だということが分かれば気付くだろうさ。敵意を表した時点で帝都は地中に消え去る。攻め込んで来たならばそのまま天井ごと潰される。」

「そんなリスクを冒すぐらいなら交易で利益を得る方が得策なことなんて馬鹿な貴族を除けば誰でも分かることさ」

それを聞いてエリスは暫し悩む仕草をした後に今度はクリフのことをまじまじと眺め始める。

「クリフ……あなたの言い分は分かったわ。けどそこまでして皇帝にここを開示する理由はなに？それが私には分からない。」

「きつとあなたのことだから何かを考えているんでしょうけど、それを教えてくれてもいいんじゃない？」

その言葉を待っていた。エリスの言葉を聞いたクリフはニヤリと口元をつり上げながら自分の考えている計画をエリスに述べていった。

九話

レイチエルやミランが箱庭に来てから一週間ほど、皆は街を案内され、様々な種族と触れ合い、そして亜人もエルフも人間と変わらないことを少しずつ理解していった。

やがてここに住むことにも抵抗がなくなった。と言うよりも率先して住もうとしている者達にクリフとマチルダが家を建ててあげると、その者達は早速自分達に出来る仕事を探して箱庭を歩き回っている。

裁縫が得意な者、畑仕事が得意な者、料理が得意な者、皆が自由と他人に感謝されることに喜びを覚え、そしてその頃にはもう亜人も人間も関係なくなっていた。

「思ったより慣れるのは早かったね。それでクリフ、今日いくんだろ？」

「ああ、マチルダも首尾良く頼むよ」

二人は和気藹々と過ごす箱庭から黙って機関車で地上へと向かった。

二人は今ヴィンドボナの城の前にやって来ている。さすがはハルケギニア第二の勢力の国、城の規模も兵の数も半端ではない。

「それじゃあ後で」

「ああ、へまするんじゃないよ」

ここから先は別行動になるためマチルダはクリフを置いてどこかへと向かって行く。一人城の前にクリフは悠々とその城壁に穴を開けると誰にも気付かれぬ間に城内に侵入すると静かにその穴を今までより頑丈に塞いだ。

クリフは眼にも止まらぬ速さで城の庭を駆けてゆく。これは体全体に軽くレベテーションをかけているので、少しでも重力を軽減することで普段の倍以上の速度を出すことが出来る。

そしてレベテーションを強くかけて跳び上がれば軽く三階の窓にも到達することが出来た。辺りを見渡したクリフは廊下に置いてあった壺とその台座を勝手に鍊金して、先ほど見かけたゲルマニア皇帝近衛騎士団の甲冑を作り出すと、それを着て王座の間へと向かった。

すれ違う貴族や執政官らしき人達に立ち止まり挨拶をしながらクリフは王座の間を目指して歩いて行くと、クリフは大きな扉の前で立ち止まった。

振動から分かる、中には三人。二人はおそらく兵士。そして一人は皇帝だろう。意外と早く見つかったなとクリフは笑みを浮かべながらその扉の中へと足を踏み入れた。

「ん？貴様、持ち場の警備はどうした！」

「申し上げます！城内に賊が侵入したらしく調度品の壺などが盗まれたとのことです！今城の中では警戒態勢を取っていますが陛下はご無事ですか！？」

「なんだと！？いや、陛下は無事だ。お前は持ち場に戻れ」

「執政官殿がお二人をお呼びになつています。もう少しで増援がくるので、その者達と陛下をお守りしろとの命令です」

「そうか、ではここは任せた。行くぞ！」

王座の間に入ったクリフはさも慌てているかのように跪くと賊が侵入したとの嘘の報告で兵士を引きはがすことに成功する。

そして改めて自分の前に座る男、この国の王、アルブレヒト三世と対面した。

「のう、貴様」

「はつ。何でありましょうか？」

「貴様……………誰だ？」

「私は先月近衛騎士団に配属になりましたレナードと申します」

「そんなものはいい。我は貴様が何者かと聞いている」

跪き、皇帝に話しかけられて驚いているような演技をするクリフの言動を嘘と見抜けるものがこの国に何人いようか。

それぐらいクリフの演技は完璧だった。万が一にもばれないと本人も思っていたのだが、どうやら一万分の一の人間が目の前にいた

ようだ。

退屈そうに頬杖をつくアルブレヒト三世の眼を見ると、それは確実にクリフを見極めようとする眼だった。

「どうしてお気づきになったのですか？」

「ふん、近衛騎士団とは自分の一番近くに置く人間だ。そんな人間の顔を覚えないでどうするのだ？」

「さすがはゲルマニアの皇帝陛下ですね。それでは改めて……クリフ・ヤミノスコフと申します。お初にお目にかかります」

「戯れ言も馴れ合いも好かん。貴様が今日ここに來た目的は何だ？」

「とあることをお願いしようと思ひまして」

「ほう………？」

それを聞いたアルブレヒトの顔が楽しそうに歪む。城に侵入してあまつさえ皇帝である自分に願いを言ってくるというのがおかしいのだろうか。

口元をつり上げる理由は分からないが、少なからずアルブレヒトはクリフに対して興味を抱いていた。

「願い事はある人間に貴族の爵位と領地を与えて欲しいのです」

「その理由はなんだ？」

「交易を行いたいから………ですかね。私どもの住む地は少し特殊な場所にありまして、それで私達が領地を持っていた方が都合がいい

のです」

「特殊？東方の地か？」

「いえ、海の向こうの土地ではありません。それでは陛下をそこにお招きしたいと思うのですが、いかがでしょうか？」

「我自身としては興味はあるが、お前の身元が怪しすぎるのでな。そんな者の後に付いていくことなど出来ない。違うか？」

「はっ、仰る通りです。私の身元を証明する物はありませんが、陛下に献上したい物がございます」

そう言つてクリフが懷から取り出したのは一丁の拳銃。それをアルブレヒトに献上すると顔には出さなかったがアルブレヒトはかなり驚いていた。

拳銃を見た人間はそれを場違いな工芸品とよぶだろうが、クリフのそれは違う。己の知識と技術を元に作り出した物であり、決して場違いなどではない。

「我が領土には鉄より軽くて強い金属、風石、硫黄などを交易として出せる準備があります。いかがでしょうか。陛下に危害は一切加えません。我らの領土にお招きしたいのですが」

普通の王ならここで警戒してクリフの伸ばした手を握ることはしないだろう。しかしアルブレヒトは不敵な笑みを浮かべながら玉座から腰を上げるとクリフの手を掴んだのだった。

内心クリフはアルブレヒトの器の大きさに驚きつつもことが上手く運ぶことに安心を覚えていた。そしてこれから行く場所は一つ。

「それでは私について来てください」

クリフはそう言うのと窓の外からフライをかけて城の庭へと飛び降りる。それにならないアルブレヒトもフライでクリフの後を追うと、クリフは庭の地面に手を付いて眼を瞑っていた。

アルブレヒトはそれを無言で眺めているとクリフの足元に大きな穴が開いていく。そしてそれは人二人ぐらいなら余裕で通れるような縦穴になると穴の動きを止めた。

底が見えない穴をのぞき込んでいたアルブレヒトに「行きます」とクリフは言うのと躊躇なく穴のしたへと降りていった。

アルブレヒトは敵意も殺意もないクリフに興味を抱いてついて来たはいいが、こんな穴の中に入ることになるとは思わず、すこしだけ驚いた様子を見せていた。

しかし今更引き返すとも言えない。アルブレヒトは少し諦めた様子で暗い穴の中に飛び込んでいった。

穴はすぐに口を閉じるとその後の二人はずっと落ちていく。どこまで行くのかと思い、アルブレヒトも少しだけクリフのことを警戒し始めた頃、アルブレヒトの体が軽く浮く。

レビテーションだ。それをかけられたということは底も近いのかと思っっているといつのまにかアルブレヒトの足は地面についていた。

「それではこちらです」

こちらとはどちらだ？クリフの指す方向には壁というより穴の表面しかない。しかしクリフはまたも何かの土魔法を用いて横穴を地面に開けた。

それからライトを使って穴の中を進んで行くクリフ。この穴を開ける魔法、と言うより周辺の土を操る魔法は確かに穴を開けるのに

は便利だが巨大な穴を掘ることが出来ないので、非常用通路を作る程度しかできない。

「遅かったね。何か不備でもあったのかい？」

「ちょっと城の中が広くて迷っただけだよ。……陛下、仲間のマチルダです。それではこちらへ」

「ふむ、一体どこに向かっているというのだ？それにこの大穴……誰がこんな物を」

「私さ。このゴーレムでささっとね」

暗がりで見えなかった場所にあったドリルつきのゴーレムを見てアルブレヒトの肩がピクリと動く。やはりいきなりの巨大ゴーレムは驚くだろう。

そして三人はマチルダが掘ってきた穴を進んで行く。地上の建物に押しつぶされないようにちゃんと補強もされていることに、アルブレヒトは関心しながらも進んで行くと見たことも聞いたこともない鉄の塊がそこにあった。

「これは……………！」

「我々が馬車などの代わりに使用する移動手段でございます。もっとも、その速度は馬の比ではありませんが」

「どうぞこちらへ」と案内された客車の椅子に驚きつつもアルブレヒトは平静を装いながら車両の中をくまなく観察している。

そして走り出した機関車はアルブレヒトを乗せて箱庭へと向かう。豪華な椅子、全く揺れないこの乗り物、アルブレヒトはこんな技術

力を持った国がゲルマニアの近くにあるのかと考えて少し顔を青くするが、その顔色は箱庭についた途端に吹き飛んだ。

「なんだここは……!？」

広大な草原、閉じた空、大きな湖、そして流れる景色の速さを見て機関車の速度に改めて気付く。アルブレヒトはまるで子供のように窓にへばりつくときたま驚きの声を漏らしていた。

やがて機関車はターミナルに到着すると、そこには様々な人達がクリフ達を待っていた。

「亜人だとっ!？」

「落ち着いてください陛下、この者達はこの住人です。陛下が手出しをされない限り陛下のことをお持てなしますよ」

アルブレヒトは腰に差した剣に手をかけたままクリフと亜人の顔を交互に見比べている。そしてアルブレヒトは大きく息を吐くと柄から手を離れた。

三人はそのままメインストリートを歩いて行くとエリスの家へと向かっていった。

「で？皇帝にこのことを話すのは良いって言ったけど……なんでうちに連れてくるわけ？」

「すまんエリス。うちじゃ皇帝を接待なんて出来ないだろ？」

テファ邸も広いと言えば広いが子供達がいたり、そんな上等なお持てなしが出来るような場所ではなかった。

それにエリス邸はこの箱庭の領主の家ということもあり、大きさ

も接客するのにも申し分なく物が揃っている。そのことも分かっていたエリスは諦めたように黙って三人にお茶を淹れる。

「これは……？」

「エルフのお茶よ。人間の口には合わなかったかしら？」

「いや……悪くない」

驚いた様子でお茶を見ているアルブレヒトから察するにかなり美味しかったのだろう。目の前の皇帝に「面白い顔してますよ」と言いたかったクリフだが、ここは真面目にお茶を一口飲むと話を切り出した。

「それで陛下。私がここに陛下を招待した理由……それを覚えていらっしゃるでしょうか？」

「交易……だろう？だがまず我の質問に答えてはくれぬか？」

「答えられる範囲なら」

「まずここはどこだ？地下にあるあの巨大な乗り物に乗っていたのだ、大方地下なのだろうが……」

「その通りです。ここはヴィンドボナの直下の地下都市、箱庭です」

「やはりか……悪い予感というのはどうしてこうも当たるのだろうか」

「ご心配には及びませんよ。ここを掘ったのは土の精霊です。その

者は地面や土のスペシャリストです。万が一にも首都の地面が抜けるなんてことはありませんよ」

「そうか……では次の質問だ。なぜここにはこんなにも多くの亜人が住んでいる？そして何故人間と共に生活をしているんだ？」

その質問の答えをクリフはゆっくりと話し出す。アルブレヒトを納得させるために、理解してもらうために。そのため説明はかなりの長さになったが、それをアルブレヒトは嫌な顔一つせず真に受け止めていた。

話し終えたクリフが小さくため息をついたところでアルブレヒトは口元に手を当てて何かを考えている。

「マチルダ、レイチエルを呼んできてくれないか？」

クリフの言葉にマチルダは何も言わずに部屋を後にするとクリフはじつとこちらを見ているエリスを自分の隣に座らせる。

「そちらの質問には答えた。ではこちらからも質問をさせて貰うわよ」

座ると同時にエリスはアルブレヒトに敬語も使わずに話を切り出す。

「交易をするか、しないか。それとこちらに敵意があるかないか。それだけよ」

「敵意はない……というより、これだけの物を見せつけられてしまったんだ。今更後には引けん。それに金属と風石、それらはこちらとしても喉から手が出るほど欲しい。」

それらを打ってくれるというならすぐにでも準備を進めよう。だが……」

アルブレヒトが渋る理由。それはどうやって交易を行うかということだ。箱庭で出る資源は魅力的な物だが、それをどうやったら取引出来る？

運ぶのは機関車を使えば良いとして、それをどうやって売るというのだ。まさか露店のように売るわけにもいかない。

だからと言って国が秘密裏の取引を行えば国内からどんな反発が出るか分かったもんじゃない。

「それなら一つ提案があります。……入ってくれ」

クリフがそう扉に声をかけると、そこには怯えた様子のレイチエルと退屈そうな顔をしたマチルダがいた。

マチルダはクリフの隣に座ると先ほど残したお茶に再び手をつける。対してレイチエルは足が動かないのか、その場に固まってしまっている。

「レイチエル。ここに」

「はっ、はいっ！」

レイチエルはガチガチに緊張しながらクリフ、マチルダ、エリスの座るソファの横に立つとあらぬ方向へと視線を向けている。

それほどまでにアルブレヒトが怖いのだろうか。それなら皇帝の目の前で足を組んであくびを掻いているマチルダはどうなるのだろうか。

「このレイチエルを貴族とし、領地を分け与えて欲しいのです」

「はえっ！！？ちよっ！クリフさん一体何を……！！」

「なるほどな……その領地まであのトンネルを繋げて、その者が領地の特産品として売り出せば何も問題はないということか」

「はい、それなら他の貴族からの反発も少ないかと。それに正当性もある。ケチをつける者はいないでしょう」

「分かった。それでそちらの交易品は風石と珍しい金属でいいのか？」

「基本的には。たまにエルフの薬やこちらの技術を提供しますよ」

「それは是非とも欲しいものだな。……よし、我はゲルマニア皇帝アルブレヒト三世。よろしく頼むぞ。クリフよ」

「こちらこそよろしく願います。陛下殿」

二人は口元をつり上げながら互いの手を取って友好を約束する。その裏で何を考えているかは誰にも分からないが……。

アルブレヒトとの交渉を終えたクリフは一人でアルブレヒトを城へと送っている頃、エリス邸ではマチルダとレイチエルが向かい合

って座っていた。

正確には疲れてソファに寝転ぶマチルダと未だ足が動かないレイチエルがソファで足が動くのを待っているといった状態だ。

「僕が……僕が貴族……」

先ほどからそれしか呟かないレイチエルにマチルダはゴロリと横に寝返るとレイチエルの眼をジッと見つめる。

「あ、あの……僕がどうかしましたか？」

「レイチエル……覚えてるかい？」

「えっと……何を、ですか？」

「ミランを救う時、クリフはあんたにこう言った。『一生君が奴隷のような労働を強いられる可能性もある』って。その意味が分かってるのかい？」

その問いにレイチエルは答えることが出来ない。現に今までは箱庭内から出ることは出来ないという制約はついていたが、それ以外は自由そのものだ。

それに今度は貴族への仲間入り、これほどまでに恵まれた人生などないのではないかと考えていたレイチエルにその問いの意味は理解が出来なかったのだろう。

「貴族になる。それは平民が経験したことのない重圧を受けることだ。領内の整備、領民からの陳情、さらには国のための奉仕。」

それに加えてレイチエルには箱庭とゲルマニアを繋ぐという仕事も待っているだろうさ。これを平民上がりのあんたが普通に出来ると

でも？

最初からこうなるように計画して、そして行動してきたクリフはこう言った。『奴隷になる覚悟はあるか』と」

「……確かに、僕じゃ無理かもしれませんが。でも、僕がそれを選んでんです。そこに後悔はありませんよ」

微笑みを浮かべるレイチエルの足の震えはいつの間にか止まっている。それを見たマチルダは安心したような笑みを浮かべると再び仰向けになり天井を仰いでいた。

「まああんたにはミランもいるしな。貴族だったあの子に頼れば何とかなるだろうさ。二人で頑張んなよ」

「はいっ！」

レイチエルはこのことをミランに知らせに行くのだろうか。エリスの家を飛び出すとミランの家のある方へと走っていつてしまった。そこに茶菓子とお茶を持ったエリスが現れ、走り去っていくレイチエルの背中を窓から見下ろしていた。

「もう治ったの？意外と早かったわね」

「根性はあるからな、奴は」

起き上がり、テーブルに置かれたお茶を一口飲んだマチルダは隣に置いてある茶菓子を口に含む。

ほのかに甘い茶菓子がエルフのお茶に会ってとても美味しい。だがマチルダの顔は何故か浮かない色をしていた。

「どうしたの？」

「いや……大したことじゃないんだが。レイチェルって今何歳だったの？」

「確か25歳って言ってた気がするけど……それがどうかしたの？」

「なんで21歳の私に敬語を使うのかと思ってね。別に普通に話してくれてもいいのに……」

「あなたは大人びてるからねえ……その年で十数人の子供達を育ててればその貫禄も頷けるわ」

「どういう意味だいそれは……」

そろそろ危なくなってきたのを察したエリスは「冗談よ」とだけ言い残すと、自分の分のお茶と茶菓子を手に持つとマチルダを残して部屋を後にした。

一人残されたマチルダは不機嫌そうに鼻を鳴らすとソファに仰向けになりながら茶菓子を頬張っていた。

十話

アルブレヒトとの交渉から早2週間。レイチエルはこの2週間は地獄と言うに他ならなかっただろう。

まずは基本的な礼儀作法、貴族としての最低限のマナーを元貴族であるマチルダが叩き込んだ。最初はミランがその役をかって出たのだが、どうにも甘々な空気を漂わせ、レイチエルの頭には何も入って行かないようだったので、しょうがなくマチルダが選ばれたのだ。

基本頼まれれば断れない質のマチルダはお願いしてきたクリフを恨みながらもレイチエルを痛めつけることでストレスを発散していた。

その対象となったレイチエルはたまったものではないが。

そしてさらには領地経営の基本なども教えることに。こちらは何かクリフを先生役に生徒はレイチエルとエリスである。

クリフは基本的な政治の知識なら囁る程度には分かっていたので、そこら辺はこちらの世界でも同じだろうと先生役をしていたのだが、その際に地球の政治や治安維持、街造りの方法などを教えていたのをエリスに見られ、『今後の参考にしたいから私も一緒にするわ』と言って真面目にクリフの話を聞いている。

最も、エリスが授業の邪魔をするはずもなく、元からレイチエルより頭のいい彼女はクリフの知識を次々と吸収していった。

「も、もうだめ……………」

「レイチエルはもうだめか。じゃあ今日はここまでにしようか」

「私としてはもう少し三権分立の詳細を聞きたかったんだけど……
まあいいわ。それじゃ、明日もお願いね」

子供達に勉強を教えるために作った学校。しかし子供達がそこま
でいないため、今は元貴族でミランと一緒に売られてきた女性が受
け持つークラスしか存在していない。

そのため三階建ての建物も一室しか使っていなかった。そしてそ
の部屋の隣で行われていたクリフの授業も今終了した。

机に顔から突っ伏しているレイチエル。それも仕方がないだろう。
この後はマチルダのしごきが待っているのだから。午前は優秀な
エリスとの差を思い知らされ、午後はマチルダにいじめ抜かれるの
である。

これなら奴隷の方が気が楽だとレイチエルは少なからず思ってい
たが、自分で選んだ以上はそれを貫き通す。その信念だけは失って
はいないようだ。

「あの、レイチエルさんはいらっしゃいますか？」

「ん？ああミラン。レイチエルならそこだよ」

申し訳なさそうに教室の扉を開いたのはレイチエルに昼食を届け
に来たミランであった。

クリフは机に突っ伏すレイチエルを笑いながら指差すと教室から
出て行くとする。

「あ、あの。レイチエルはどうですか？」

「そうだなあ……レイチエル自身はエリスと比べてるみたいだけど、普通の人としてなら優秀な人材だよ。根性もあるしそれなりに理解力もある。」

「ただ比べる相手が悪かったかな。エリスは優秀すぎるよ。人間でもあそこまで有能な人材はそうはいない」

「レイチエル……毎日落ち込んで帰ってきます」

「それでもレイチエルが選んだ道なんだ。君を助けるためにね。だから君が彼に何かをしたいなら全力で彼を支えてあげることだよ。……っと言つても、もう君はそれを実行しているみたいだけどね」

ミランが手に持つバスケット、匂いからするに今日はサンドウィッチだろうか。そんなことを考えながら仲睦まじいミランを見てクリフは笑みを浮かべる。

ミランはクリフの眼がバスケットに向いているのに気付くと、そこからサンドウィッチを一つ取り出しクリフへと捧げるが、それは笑顔で断られてしまった。

「レイチエルのために作ったんだろう？ だったらすぐにレイチエルを起こして食べさせてあげるといいよ。それに午後の授業もあるんだ。」

「遅れないように言つといてくれ。マチルダのためにも」

正確にはレイチエルが遅刻することでブチ切れるマチルダが何をするか分からないからと言う意味なのだが、おそらくそれは伝わっていないのだろう。

アルブレヒトから『3週間後に来い』と言われてからちょうど三週間。

城の前には貴族顔負けの服を着たレイチエルとミラン、そしてその従者としてクリフが城の前には立っていた。

「今まで外から見ることにしかかったのに……まさか中に入る日が来るなんて」

呆然としている二人の背中を押して燕尾服を着たクリフが城へと入っていく。

「ここはゲルマニア皇帝、アルブレヒト様の居城。関係のない者は即刻去られよ」

「ど、どうするんですかクリフさん……」

「あ、あわわ……………どうしましょうクリフさん」

貴族ならば当たり前のように馬車でやって来るものだし、そしてそこにはそれぞれの家の家紋が記されているはずなのだ。

それが一般的な通行手形みたいなものなのだが、クリフ達が馬車など持っているわけもなく、ましては家紋など貴族でもないのであるわけがない。

しかし狼狽えるレイチエルとミランの前へと出たクリフはにこやかにある紙を取り出す。

「陛下からの出向命令です。内容はご覧の通り新たに貴族となるレイチエル様の手続き等です。」

本来なら馬車で来るのが貴族の礼儀なのでしょうが、レイチエル様はまだ正式には貴族ではないので徒歩で参ったのです」

「そうですか、申し訳ございません。そう言った事情とは知らずにそれではお通り下さい」

門番はレイチエルに頭を下げってから門を開けると隅の方へと移動して石像のように静止して見張りを続けていた。

それに構わず城内へと歩いて行くレイチエルは、後ろからまるで本物の従者のように付き従って歩いているクリフを見てクリフは一体何者なんだと疑問を抱く。

しかしその疑問も玉座の間へと着く頃にはレイチエルの頭から欠片も残さず吹き飛んでいた。

「そんなに緊張しなくてもいいさ。マチルダに教えられた通りに接すれば何も恐れることはないよ」

そう言われたレイチエルはマチルダのしごきを思い出し、少し涙が出そうになったのを隠しながら大きく息を吸う。

そしてレイチエルは自信に満ちた表情で玉座の間へと足を踏み入れた。

「久しぶりだな。クリフ」

「ええ、お久しぶりです。ですが陛下、今の私はただの従者、陛下が呼びつけたのはこのレイチエルではないですか？」

「ふむ、そうだったな。その男、名は？」

「レイチエルと申します。この度は私のような者に爵位を与えていただき、誠にありがとうございます」

優雅に頭を下げるレイチエルの姿を見てアルブレヒトは何かを考えているようだ。

おそらくレイチエルが以前会った時と別人のような雰囲気があることに驚いているのだろう。

だが、それは貴族としての風格が現れてきたということでもある。これはレイチエルは誇ってもいいことだ。

「ふむ、レイチエルよ。貴様はこれよりレイチエル・ド・ヴァルデス・リニー・エリントン子爵としてゲルマニア帝国に仕えよ」

「はっ！我が身、陛下のために捧げることを誓います」

これにより正式にレイチエルはゲルマニア貴族エリントン家としてこの国に記録される。

眼には戸惑いを覚えながらも形式通りの言葉使いや態度をするレイチエルにアルブレヒトはその姿が面白かったのか、すこしだけ笑みを浮かべると今度はクリフに眼を向けた。

「礼式はこれで終わりだ。これから本格的な領地の話になるが…
…レイチエルよ。貴様はどうする？」

どうするとは聞くか聞かないかという意味だろう。元々平民のレイチエルだ。この手の話が分からないのは当たり前。

アルブレヒトとしても話の理解できるクリフに話して、そこからレイチエルに翻訳して貰った方が助かる。

礼儀的にこの場に居られても話の内容を理解出来ていないのであれば邪魔なだけだ。だからアルブレヒトはどうするかと尋ねた。

「いえ、これから私が納める地のことです。私にも話を聞かせて下さい」

「ふつ、そうだったな。よし、では話を始めるが、貴様らが納める地はここだ」

それはゲルマニアの西の果て、トリステインとの国境に位置する場所だ。地図を予め用意していたアルブレヒトが地図の上に駒を置いてそれで領地の大きさを表している。おそらく駒で囲まれているところがレイチェルの領土なのだろう。

しかしどうだろう。よく見てみるとそれはゲルマニアの雄、ツェルプストー家と隣接している。

しかも話を聞くとその領地は元々ツェルプストー家の領地だったらしい。何でもトリステインとの国境警備を一手に担うのがツェルプストー家の責務だったのだが、今のゲルマニアならばトリステインなど取るに足らない。

ならば国境警備を二手に分けても問題ないのではないかとの前々からの意見を現実にしたものだった。

これにツェルプストー家はどう反応しているかと言うと、レイチェルに分け与えた土地は海沿いであり、ツェルプストーの宿敵であるヴァリエール家とも遠い。

それに開拓も出来ていなかったため、処理がめんどくさい土地を貰ってくれてありがとうというような反応だった。

ツェルプストー家としてはヴァリエール家との因縁をどうにか出来れば何でも良いようだ。

「海ですか……海産資源がとれるかも……」

クリフは箱庭では採ることが出来ない海の幸に胸を躍らせていた。クリフなら蒸気船ならぬ風石船を作ることにも可能だろう。ならばこの世界の漁業は飛躍的に発展するに違いない。

第一この世界はおかしいとクリフは考えていた。前に見たこの世界の地図、そして今日の前にある地図。これにはヨーロッパと酷似した大陸が描かれている。

つまりここは地球と酷似した世界であり、星なのだろう。そしてこの世界は科学ではなく魔法が文化として発達した。

そしてそれは6000年もの歳月を過ごしてきたにもかかわらず世界の地図は全く広がることをしないのである。

クリフの予想が正しければ近くにはアフリカ大陸があり、西に進めばアメリカ大陸が見えてくるはずなのだ。

なのにそれをしない。それは大航海時代が訪れていないから。それは船がないからではないかと考えていた。

確かに空を飛ぶ船はある。しかしそれは特殊な力を持った原動力、つまり風石を必要とするために数がハルケギニアでもかなり少ないった。

その数少ない船の9割は軍艦、後は連絡船という庶民が船を手に出来るようなことは万に一つもなかったのだ。

だからこそこれからの海の覇権をゲルマニアが受け持つためにもこの領地は都合が良い。

「その土地には小さな街などは点在しているが大きな都市などは全くもって皆無だ。貴様がどこに居城を築こうが構わんが、まあせいぜい頑張るがいい」

その言葉を最後に三人は城を後にすると、城を出たところでクリフは大きく伸びをし、レイチェルとミランは腰が抜けたように崩れ落ちた。

「あれ？レイチェルはともかくミランも？こういったのに参加したことない？」

「それなりにはありますけど……陛下のお目にかかるなんて私みたいな弱小貴族じゃありえませんよ……はあ、怖かった……」

ため息と一緒に魂まで抜け落ちそうなミランをレイチェルが立たせると互いに支え合いながら隠れ家へと歩いて行った。

エリス邸応接室にて、ここにクリフ、エリス、マチルダ、レイチェルが集まりアルブレヒトから受け取った地図を囲んでいた。

「あのクソじじいめ……随分と厄介もん押しつけてくれたじゃないか」

マチルダが怒っている理由。それはレイチェル、いやエリントン領の詳細を見たからだった。

そこはトリステインと国境を接しているという難点はあるが、海にも近く、資源は多そうな地だ。それに加えて地図でも分かるこの大きさ。

これはとても子爵程度が持てる領地の広さではない。端から見ればこれ以上ない優良物件。だが蓋を開けたその地はとんでもない物だった。

「幻獣に亜人、魔物に闇の森……まさにこの世の秘境って感じだな」

クリフが精霊に聞いた情報や、その近くに住んでいた獣人達への聞き込みで発覚したのが、この地にはかなり凶暴な魔物達が生息しており、誰も手が付けられないとのことだ。

ツェルプストー辺境伯がこの地を開拓しなかったのも分かる。どれだけの損失があるか分かったものではない。

「どうでしょう……」

「どうでしょうって、あなたがどうにかするのよレイチエル。そんな弱気でどうするのよ？」

皆どうしたものと頭を抱えている中、クリフも何かを考えているようだったが、マチルダには考えているというより企んでいるように見える。

それは長年の勘でしかないが、自分の悪い予感の当たる確率からみてもこれはおそらく確定だろう。

「クリフ……気付いてないかもしれないけど、かなり悪い顔してたよ。一体何を企んでるんだい？」

「企むなんて人聞きの悪い……さて、計画もまとまったし、そろそろ皆に話すかな」

そして話し出すクリフ、その作戦を聞いて皆の顔は徐々に引き気

味になっていった。

「確かにそれなら無駄はない……というより一石二鳥、いえ、一石三鳥ね……でも」

「あくどいですよね……………」

「失礼な。政治家には清濁併せのむのも能力の一つなのさ」

「まあそれが一番手っ取り早いかもね。それじゃあこれは…………まあそうだろうね」

マチルダは皆から受ける視線を見て諦めたように頂垂れる。
こうしてエリントン領改造計画は始まったのだ。

計画開始から一ヶ月。とは言ってもマチルダやクリフはエリントン領までトンネルを延ばしたりレイチエル達が住む屋敷を建てただけなので、本格的な計画は今日より実行だ。

そしてその計画を担う二人、クリフとマチルダはヴィンドボナのレイベルエリアへとやって来ていた。

「相変わらず下品な街だね。さつさと行くよクロード」

「随分と乗り気じゃないかフーケ。そんなに喧嘩が楽しみかい？」

「最近はずいぶんと全然体を動かさなかったからね。傭兵相手とは言え暴れられるってんなら心が躍るよ」

クリフことクロード、マチルダことフーケはレイベルの傭兵達が集まる酒場へと足を踏み入れた。

そこは大変広く、レイベル内でも1、2を争うほどの建物だ。その中にはいつも酒と男の匂いで充満しており、皆顔を赤くして声を荒げている。

ここには様々な傭兵への依頼が舞い込んでくるため、傭兵のたまり場となり、そしてこの町で一番汚れた場所でもある。

普通の依頼なんかもあるが、それ以外にも殺し、盗みなどの依頼書がそこかしこに壁に貼られている。全く持ってそれが犯罪と認めていないように。

そんな酒場の扉をマチルダは蹴り飛ばしながら中へと入ると、中にいた男達は冷めた目でマチルダのことを睨みつけていた。

「これがこの国で一番優秀な傭兵達ねえ……私にはゴミ溜めで酒を飲んでるクズにしか見えないよ」

「てめえ！一体何のつもりだ！」

「ここに依頼を頼もうと思ったんだが、こんなクズ共に依頼するぐらいなら自分でやったほうがマシさ。クロード、帰るよ」

踵を返して酒場を後にしようとしたマチルダの前に立ちはだかる

数人の男、それらは皆下品な目つきでマチルダを見下ろしている。

「よお女。威勢がいいのは結構だが、自分のしたことを分かっているのかい？こんなことしてただで帰れるとは思ってないよなあ？」

まあここのお兄さん達は優しいから、てめえが体で謝罪の意を示せば許してくれるだろうぜ。もちろん、裸で一人一人にご奉仕してことだな」

それを聞いたクリフは内心笑いが止まらなかった。

『ご奉仕いたします、ご主人様』なんて言ってるマチルダを想像した瞬間に笑いが出そうになり、なんとか堪えてはいるが肩が微かに震えていた。

「本当に下品な奴らだね。まあいいさ、そうしてほしけりゃ私を力ずくで屈服させることだね」

「てめえ！女のくせになめやがって！お望み通り力ずくで分からせてやらあ！！」

その瞬間に男達が武器を握り一斉にマチルダへと迫る。一方クリフは巻き込まれないように誰にも気付かれずに壁際に退避していたが。

「おらあ！！」

「大ぶりすぎ、相手をよく見な！」

「もらったあ！！」

「隙を突くなら声を出すんじゃないよ！！」

迫る男30人ほどをマチルダは錬金で作り出した双剣で次々と叩き伏せていく。

剣、槍、斧、さらにはハンマーのような変則武器までもが一斉にマチルダへと向けられるが、これならクリフの攻撃の方が断然上、と言うより比べることすらおこがましい。

一瞬で地面が鉄の剣山となり、それを躲した先には眼にも止まらない速さで迫る弾丸。それら二つを避けてもクリフの操るゴーレム軍団がマチルダを地面でも宙でも追ってきては高速の斬撃を向けてくるのだ。

それに比べればこんな連携のとれていない、それに力もそれほどではない連中にマチルダが一步でも劣るはずが無かった。

「五分つてところかな。予想より早かった」

ボロボロになった酒場に立つ人間は二人だけ、もちろんそれはクリフとマチルダなのだが、クリフは向かって来る者をあしらう程度でほぼ全ての傭兵を叩き伏せたのは酒場の中心で男達を見下ろしているマチルダだ。

マチルダは酒場の中心で自分を憎らしそうに見上げる男達を見て蔑むような口調で話しを始める。

「あんたらしい汚い手の人間に負けるほど私は落ちぶれちゃいない」

「ど、どついう意味だ!」

「確かにあんたらは強かった。けどそれだけさ。力が強いだけ。そんなんじゃ真に強い者には到底及ばないよ」

意味深な言葉を口にするマチルダに男達は皆、敵意はあっても刃を向けようとはしなかった。

「その手は何をするためにある？その力は何のためにつけた？奪うため？殺すため？守るため？違う！勝ち取るためだ！！」

それを聞いた男達に走る動揺。それは波紋となって広がり酒場は騒然とする。

「確かに奪ったり殺したりが好きな連中もいるだろうさ。でもここにもいるんじゃないのかい？野心があつて傭兵になつた奴が。力を求めてこの道に入つた連中が。そんな連中を私は欲しい。私が求めるに値する人間ならこれだけの報酬を与える」

そう言つて取り出した袋。小さい袋ではあるがそれを酒場の店主に投げつけると、店主はそれを掴むことが出来ずに床に落としてしまった。

その衝撃で袋からあふれ出た物。それは百エキューはあろうかという大金だった。それを見て傭兵達の眼が変わる。

「あんなのははした金さ。あれ以上の金が、力が、名誉が欲しいならエリントン領にあるギルドにきな。私はそこで待っている。

こんな汚いゴミ溜めの中で燻っているような連中の中にも、私を殺そうっていう気概のある奴を待ってるよ」

ニヤリという笑みを残し酒場を立ち去るマチルダとクリフ。残された男達は呆然としながらその颯爽とした背中を目で追っていた。

「なんか、結構ノリノリだったな」

「う、うっさいね！馬鹿共にはあれくらいで丁度良いんだよ！」

先ほどのことを指摘されて顔を赤らめるマチルダ。それを見て微笑を浮かべるクリフは第一の計画が成功することを祈りながらエリントン領へと向かった。

レイベルのような場所には良くも悪くも情報が集まる。そしてレイベルの情報はすぐに伝わるのもまた然りだ。そしてそれは一人の女性にレイベルの傭兵達が完全に叩き伏せられたという情報も例外ではない。

『新貴族、エリントン家の領地にあるギルドという場所で謎の女性が強者を求めている』この情報はすぐさま国中に伝わり、腕に覚えのある者達をエリントン領へと引き立てた。

それは酒場にいた傭兵も例外ではない。あの時の屈辱を胸にエリントン領に向かう者達も少なくはない。

そして我先にとエリントン領に向かった傭兵達はその領地に驚いていた。

まず街道を進んで行った先に見えたエリントン領行きの道。そこは道幅20マイルもの広さが整備されており、そこを進んでいけばやがて海沿いの平原に出る。そこには大きな建物が二つ建っており、一つは普通の貴族の屋敷。もう一つは巨大な三角形の建物だった。その形の珍しさ、そしてその巨大さを見てやってきた傭兵達は思

わず感嘆の声を漏らす。近づいて見てみるとやはり大きい。

だがそれ以上に美しい。遠目では輝いていたその三角の壁面は実際はガラス張りであり、中の様子がはつきりと分かる。

「すげえ……エリントン子爵ってかなり最近に出来た貴族のはずだろ？なのになんでこんなものを」

「何でも色々な発明品で巨万の富を築いたんだとか。とりあえず金には困ってないみてえだな」

やって来た傭兵達は口々にそんなことを話しながら正面にある大きな扉へと向かった。

中は白の大理石と鉄骨を大理石で囲った柱。規則正しく並ぶ柱は床の白と相まってまるで中は純白の別世界だ。

大の男達はキョロキョロと辺りを見渡しながら進んで行くと、そこには例の女、フーケが待ち受けていた。

「よく来たね。この中に少しは骨のある奴らがいるといいんだがね」

「てめえ！何様のつもりだ！」

その瞬間男の足元から鉄の棘が伸び、男の体に巻き付く。少しでも動けば男が血だらけになるのは免れないだろう。

「口を慎みな。確かにあんたらしいな傭兵はそれぐらい喧嘩勝りじゃなきゃ勤まらないのは分かる。けど私に喧嘩を売りたいならまずはこちらで力を示してからさ」

「どついう……意味だ？」

そこで後ろに控えていたレイチエル。いや、エリントン子爵が現れると50人ほどの傭兵達の前で演説を始めた。

「ようこそ、我がエリントン領へ。今日はこのような辺境の地へ赴いてくれたこと感謝する。」

ここはギルドと言って様々な依頼が集まり、そしてそれを君達のような傭兵に報酬を対価にして解決して貰う場所だ」

それを聞いた途端に傭兵達にある疑問が生まれる。それはレイベルの酒場でも同じなのではないかと。

「レイベルと同じと考えている者もいるだろうが、確かにここは基本的に同じような意味合いの場所だろう。」

だがしかしどうだ？あのレイベルに依頼を頼みに行く者は多いのか？汚い仕事ばかりではなかったか？

ここでの依頼の主な内容は魔物の討伐だ。窃盗、殺人などの依頼は一切受けない」

レイチエルの言葉で傭兵達に動揺が広がる。それを鎮めるようにレイチエルは再び説明を始めた。

「我がエリントン領は主に開拓されていない魔境だ。それを開拓……とまでは言わない。せめて危険な亜人や魔物を倒す依頼を当分はこなしてもらう。」

その内国内外に噂が広まれば依頼がここに集まってくるだろう。そして依頼をこなした者にはこのような割合で報酬を与える」

レイチエルの後ろに控えていたクリフは大きな垂れ幕のような紙を持つとそれをレビテーションで浮かび上げらせ、その紙を傭兵達に見せつける。

その内容は有害な亜人、オーク鬼、トロール鬼、オグル鬼の首を持ち帰った時の報酬。それは破格と呼ばざるを得ないほどの高額なものであった。

「どうだ？ やってみたくはないか？」

そのレイチエルの言葉に傭兵達の顔がニヤリと歪む。基本的に傭兵というのは金で動く生き物なので、ここまでの額を提示されれば動かない者はいないだろう。

「そしてここで仕事を受ける者達にはこのカードを受け取って貰う」

それは鉄製のカードであり、そこには名前、番号などが彫り込まれていた。つまりここ、ギルドでは傭兵達を管理してより効率的な労働をさせようとしているのである。

それ以外にもここ特有のシステムと言えば、依頼をこなした数で恩賞がもらえるということや、依頼に難易度をつけて傭兵が実力不足で死ぬことを防いだりと、様々な決まりがある。

そして最も大きいのが決闘というシステムだ。

「おいあんた。さっき私に喧嘩売った奴。どこだい？」

「へっ、ようやく戦う気になったか」

「ここでは決闘というシステムがある。こなした依頼の数やその難易度でつけられた傭兵のランク。それを賭けて戦うんだ」

傭兵達はこなした依頼の難易度から傭兵としてのランクをギルドから決められ、それに応じて報酬やら特権やらを貰うことが出来る。そしてそのランクをかけて決闘を行い、ランクの低い者がランク

の高い者に勝てばそのランクをチェンジ出来るというシステムということらしい。

「だから私もその決闘に受けて立ってやろうじゃないか。ただしルールはギルドのルールに従って貰う」

「チツ、で？そのルールは？」

「相手を殺さない。以上だ」

それだけ言うとマチルダは喧嘩を吹っ掛けた男を連れてギルドから場所を移した。そしてそれを野次馬しようとする傭兵達にギルド受付の女から声がかかる。

「それじゃあ賭けを行う方はこちらまでいらしてください！」

「賭け？なんだそれ？」

「ここでは決闘時にどちらが勝つかを予想して賭けを行う。どうだ。君達も少し賭けてはみないか？私はフーケに賭けるがな」

レイチエルがフーケに千エキュー賭けたことで上に二人の掛け金の倍率が浮かび上がる。それを見て傭兵達も我先にと受付へと駆け込んだ。

ちなみにこれはクリフが作った風石発電を用いた計算機によって計算している。これにより領地経営の決算処理などが飛躍的に楽になるのはもう少し先の話だが。

マチルダと男が行き着いた先。そこはクリフが全て手がけたコロシウムだった。本人曰く、『写真でしか見たことなかったし、前から行ってみたかったんだ』とのこと。

つまりはただの趣味だ。だがその壮大すぎる趣味に全員が驚きのあまり呆然としているが。

「流血、骨折はありだ。だが四肢の切断や眼球などへの攻撃をした場合はお前にもそれがそのまま帰ってくると思え」

コロシアムの中心で吐き捨てるように言ったマチルダことフーケは、目の前の剣を握る男など眼中にないようだ。

彼女の頭にあるのは『どうやってこここの者達に圧倒的力を見せつけようか』ということだった。

「よそ見ばっかしてんじゃねえ!!」

本来なら決闘開始の合図があるのだが、それを無視して走り出した男はマチルダに剣を振りかぶるが、その剣は振り下ろしたと同時に根本から粉々に粉碎した。

「そうだ。いいこと思いついた」

マチルダの前に立ち、男の一撃を防いだゴーレム。それを見た人は恐怖、畏敬、様々な思いを抱くだろう。だが総じて言えること、それはその姿を何かと聞かれた時だ。

人々にあれが何に見えるかと問えばこう答えるだろう。『悪魔』と。

「あ……あ、ああ………」

禍々しき漆黒の体。鋭く光る銀の爪、怪しい深紅の輝きを放つルビーの眼。それは恐怖の対象でもあり、それでいて雄々しく美しい。ただ、マチルダの前に立つ男にとっては死の恐怖そのものだったらしい。男は腰が抜けて立てなくなってしまうている。

「なんだい？もうお仕舞いかい。せつかく死の恐怖を骨の髄まで刻み込む方法を思いついたのに」

「な……なめてんじゃねえぞー！」

迫る男は二本目の剣を握り、その刃はゴーレムの腹に突き立てられる。だがそれは突き刺さることはなく、脆くも鋼鉄の体に阻まれ、そして碎け散った。

ゴーレムはその深紅の眼を男に向けて、呆然とする男の頭を掴むと、そのまま投げ飛ばした。

その勢いは止まることなく、30メートルはある距離を吹き飛んだ後に壁に激突して男はその痛みに声も上げることができない。

「さて、これからだ。これからが本当のお楽しみだよ」

「ひい！……す、すみま、せんでした！だ、だからもう……！！」

殺気……いや、狂気を向けるマチルダの目は悪魔型ゴーレムの眼によく似ている。そんな眼を向けられた人間でまだ戦意を保てる者など歴戦の勇士ぐらいのものだ。

既に戦意の欠片もない男を見てため息を漏らすマチルダは舞台を囲むように出来た観客席へと眼を向ける。

そこにいる傭兵達も皆同じような状況だ。マチルダの作り出したゴーレムを見て恐れおののいている。

「私に勝ちたいならギルドで依頼をこなして強くなることだね。それじゃ、私はもう行くよ」

コロシウムから立ち去るマチルダを呆然と見送る観客席。彼らはその圧倒的な力を前に何も考えることが出来なかった。

そして皆、軽くなった財布を握りしめて賭けた金を惜しんでいる。

「今日は説明だけだ。ここに残る者は明日ギルドへと赴き、連絡をしてくれ」

レイチエルもそう言い残すとクリフを連れてコロシウムを後にする。

「随分と威厳が出てきたな。これもマチルダのお陰かな」

「厳しく指導してもらいましたからね。……それはもう本当に……」

実はあの悪魔型ゴーレム、レイチエルは見たことがあったのだ。

自分より爵位の高い相手への言葉使いなどは習っていたが、それを本番でも仕えるようにと、あのゴーレムを相手に練習をさせられていたのだ。

少しでも動揺したり言葉を嚙んだりした瞬間に悪魔の眼が鋭くなったり、喉の部分で金属を擦り合わせることで出る低いうめき声に似た声がレイチエルの耳に入る。

そのおかげでアルブレヒトの前でも嚙んだりすることはなかったのだが、その時のことを思い出すと未だにトラウマのようだ。

その夜、傭兵達は火を囲みながら何かを考えていた。ここに残るのか、それともレイベルに戻るのか。

皆無言で火を見つめて己の進む先を思案している。

「なあ、お前はとうするんだよ……」

「俺は……」

何とも齒切れの悪い答え、彼もまた迷っているのだろう。

まったく新しいシステム。今までやってきた盗みや殺人の仕事がないということ。だがここでの亜人討伐の報酬は破格だ。

それを天秤にかけて推し量ろうとしている。

「……………俺は残るぜ」

そんな声がある場所から聞こえてきた。その声の主は昼にマチルダにやられた男だった。

彼は立ち上がり皆の顔を見渡しながら口を開く。

「あの女にあそこまで言われて引き下がるようなら傭兵なんて名乗れねえんだよ。それに、それを抜いたとしてもここはやり甲斐がありそうだからな」

その言葉で決心がついたのか、他の者達も次々と「俺も残る」と声を上げ始める。

それを影で聞いていたクリフは微笑を浮かべながらエリントン邸へと静かに消えていった。

十話（後書き）

ご都合主義な展開だなあ……あと例のゲームのシステムをモロパク
り。
だって好きなんですもの。

休符 テファの日常

どうもティファニアことテファです。

最近マチルダ姉さんとクリフさんは外に出っぱなしなのであまり構ってもらえません。

二人が忙しいのは分かりますけど、少しは私や子供達にも構ってあげて欲しいな。

「テファ？ 集中が乱れてる。もう少し気を引き締めなさい」

「は、はいっ！」

私は今エリスさんの元で先住魔法を習っています。エリスさんもかなり忙しいらしいのですが、一日の間で必ず時間を作ってこうして私に魔法を教えてくださいます。

その甲斐もあってか最近ではクリフさんよりも先住魔法は上手だと言われるようになりました。と言ってもクリフさんは人の身でありながらエルフの魔法を使っている時点でおかしいんですけどね。

「それじゃあもうすぐお昼だし、今日はこのくらいにしましょうか」

「はい。ありがとうございました」

私が頭を下げるとエリスさんは屋敷の方へと戻っていきます。多分昼食を取った後は沢山の仕事が残っているんでしょうね。それなのに私のために時間を割いてくれるというのがとても嬉しくもあり申し訳ないです。

だからこそ私は頑張らないと。

「おいテファ！」

「シーナ？どうしたんですか？」

上から声が聞こえたと思えばそこには翼人の女の子のシーナが飛んでいました。シーナは華麗に地面に降り立つと翼をたたんで私に挨拶をしてくれます。

この子はユニイとも仲が良く、よく私の家に来て子供達と遊んでくれるので私としても助かっていますが、二人としては私の料理を食べるためだとか。

「レオルドさんは一緒じゃないんですか？いつも一緒にいるのに」

「ああ、レオルドは牧場の方の仕事があるからとかで今日はいないんだ。それでなんだけど、今からテファの家にお邪魔してもいい？」

レオルドさんというのはミノタウロスの青年……とえばいいのでしょうか？

歳は私より二つ上というだけなのですが、あの体の大きさを見るとエルフの私としては十分大人に見えてしまいます。

ミノタウロスは元来人間の子供の肉が好物と言われる凶暴な亜人などと呼ばれていますがここににいる方達は全然そんなことはありません。

逆に子供達を背中に乗せて遊んでくれたりしてくれます。彼らは子供の肉……と言うより柔らかい肉が好物のようです。一番簡単に手に入る肉というのが人間の子供のために人を襲う者がいるのは確かだとこの前ミノタウロスの長のお爺さんが話してくれました。

それでミノタウロスを凶暴と認識した人間達に迫害されてここまでやって来たというのです。本当に皆色々な事情を持ってここに来るんですね。

「それでね。レオルドったらその時うつかりしたとか言ってるじゃない。きり落ちていったのよ！もーホントに馬鹿よねえ！」

こんなに翼人がミノタウロスのことを楽しそうに話すなんて普通なら考えられないらしいです。

ミノタウロスの一部には翼人の子供を食べる者もいるらしいので、翼人とミノタウロスは長年に渡って対立してきたらしいのですが、ここでは二つの種族はとも仲良く暮らしています。

外の世界でもこんな光景が当たり前になればいいんですけどね……。

色々雑談を交わしている内に家についた私達の耳に家の中から何か騒がしい音が聞こえてきます。この箱庭で盗みを働く人などはいるはずがないので心配はしていませんが、それよりも誰なんでしょう？

「ちょ、ちょっと待って！ひゃう！？こら！いきなりしつぽ掴むなあー！！！」

中では何と言うか……ユニイが数人の子供達に囲まれて赤面していました。

と言うかユニイ。一体何してるんですか？

「あつ！テファ助けて！この子達私の言うこと全然聞かなくて……」

「……？えっと、ユニイは嫌がってるのもうダメですよ？」

私の背中に隠れるユニイは涙目で私のことを見上げてきます。何
がなんだか分かりませんが、とりあえず背中のユニイに近づこうと
する子供達を注意して止めると子供達は納得がいてないようです。
「どうしてこんな事態になったの？」

「ユニイ姉ちゃんに耳としっぽを触らせてって言っても触らせてく
れないんだ。だからみんなで触ろうと頑張ってたんだ」

「無駄なところで頑張るな！」

未だに私の背中に隠れるユニイは犬のように歯を見せて威嚇して
いますけど、涙目のせいでまったく怖くないので子供達は全然平気
そうです。

それにしても耳としっぽですか……私も少し触ってみたい気がし
ます。嬉しそうにしているときにフリフリと揺れるしっぽや何か考
えている時にピコピコと動く犬耳はとても可愛かったのだ。

「ユニイは苦手なんですか？しっぽや耳を触られるのって」

「うっ……いや、苦手というか、ね？獣人……というより私の種族
の間では女性のしっぽや耳を触っていいのはお付き合いしてる男性
に限るみたいな風習があるから。」

例えばそれが人間相手だから風習は関係ないと言ってもその……どう
しても恥ずかしいんだ」

そうだったんですか……獣人にそんな風習があるなんて知りませ
んでした。

ということはこの件は子供達が全面的に悪いということになりま

すね。いくら知らなかったとはいえこう言ったことはちゃんと謝るべきです。

私は皆に謝るように言いつけ、ユニイの種族のことを説明しても二度と触らないことを約束させました。

習慣の違いというのは何気ないところで大きな溝を生むことがありますから、こう言った事態を無くすためにも色々な配慮が必要かもしれませんね。

今度エリスさんに話してみましようか。

「ふう……助かったよテファ。あれ、シーナもいたの？」

「お昼をごちそうになりだね。それよりもユニイ、しっぱ触ってもいい？」

「ダメだつて言ったじゃん！」

賑やかな歓談を楽しみながらキッチンへと立つ私、二人は近くのダイニングテーブルで食事が出てくるのを待っています。間違っても手伝ってはくれないんですね……。

「そういえばクリフさんとマチルダさんは？最近見ないけど」

落ち着いたシーナが不意にそんな質問をしてきます。皆クリフさんのことが気になっているんですね。

クリフさんは今ホテルとかいうものを建てているらしく、それは食事が出たり寝泊まりするところらしいんですけど、宿屋とは違うのでしょうか？

そしてマチルダ姉さんは今ギルドというところで色々な仕事をこなしているらしいです。具体的にどんなことをしているかは分かりませんでしたが。

「私地上に出た時に見てきたよ。クリフ君は100体ぐらいのゴーレムを使って凄いでっかい建物を作ってたし、マチルダさんは傭兵達のトップに立って仕事してるみたい」

「ユニイは地上に出たの？どうしてまた……」

「レイチエル君の領地に闇の森って言う幻獣や獣人達が沢山住んでる森があるんだよ。そこにクリフ君と言って色々取り決めをしてきたんだ。」

『ここから先は森の住人の領地として人間は入りません』みたいなことをね。もしかしたらあそこの獣人達もここに来るかもって言うてたよ」

それからクリフさんやマチルダ姉さんの現状を色々と聞かせてもらいました。確かにユニイなら耳は帽子で隠せますし、しっぽも服の中ならばませんし。

クリフさんは一人で巨大なゴーレムを大量に操ってホテルを建てているらしく、相変わらず無茶苦茶なことをしてるそうです。マチルダ姉さんは血の気が多い傭兵達を力を取り纏めて、エリントン領の発展のために傭兵達を働かせているとのことでした。

「レイチエルさんとミランさんはどうでした？」

「ん……相変わらず甘々な雰囲気だったよ。でも仕事はちゃんとやってるみたい。仕事してる時は二人揃って涙目だったけどね」

レイチエルさんは平民、ミランさんは元貴族と言っても領地を持つほどの貴族ではないので領地経営というのは二人とも初めてなんですよね。

それにクリフさんが予てから考えていた都市計画という物に基づいて街を作るように言われているのでその辺も大変な要因かもしれません。

「もう少しで街も完成するって言ってたし、今度は三人で行ってみようよ！」

「えっと、地上にですか？」

「テファとユニイは大丈夫かもしれないけど、私は無理よ。この翼をどうやって隠せて言うのよ」

「大丈夫！きつとクリフさんならどうにかしてくれるって！」

ユニイの言葉には明確な可能性も証拠も何もないのですが、どうしてか出来るかとも思っています。

クリフさんだから、クリフさんならきつと……そう思ってしまうんですよね、あの人を見ていると。

だからクリフさん。楽しそうに街で遊ぶ計画を立てる二人のために服を作ってあげてくれませんか？

クリフさんとマチルダ姉さんが作った街を見て回ることに。楽しみにしていますね。

休符 テファの日常（後書き）

特に意味なんてなかった。

十一話

ギルド設立がエリントン領に与えた影響、それは莫大な利益を呼んだ。

まず傭兵が任務をこなすのに必要な武器やその他サバイバル用品、それらを売りに商人が頻繁に領内に出入りするようになる。

しかし未だにここは魔境と呼ばれる森が近いため、商人は傭兵に護衛を依頼するのだが、その護衛はギルドに加入している者でなければならぬとの規則があり、それにより傭兵達は多くの依頼、つまり収入が回ってきた。

他にも腕に覚えのある者達が次々と森へと入っていき、多くの鬼の首を持ってギルドへと帰って行った。そしてそれらは金貨の山へと換金され、皆の注目を集めている。

それを聞いた各地の傭兵がこの地に集まり、そして家を建てる。その家を建てるために大工が領内に住み、生活を営むためにオーク鬼達を追い払った平原を畑に変え、すぐにエリントン邸の周りには街が構築されていった。

これはギルドのお陰でもあるが、それと同時進行でクリフが国中にこう言ったチラシをまき散らしていたのもある。

『今エリントン領に移住するなら土地代は無料！さらには家の建築費用の半分をエリントン子爵が負担します！』という喧伝は国中から人を呼び寄せた。

そして計画の第二弾。それはレイベルエリアの清掃だった。

傭兵がいなくなったことで本当にただのゴロツキの街へと成り下がったレイベルに価値などない。それを見越してアルブレヒトは早々に騎士団によるレイベルの一斉清掃を命じた。

これにより捕まったゴロツキ、浪人達は行く当てもなく国を彷徨うかと思われたが、ここでまたもエリントン領が立ち上がる。

エリントン子爵が公共事業と称して大規模な街道の整備などを行い、どんな人間でも仕事さえすれば高給で雇ってくれるというチャシが国中に回る。

それにより各地の浪人達が集まり、レイチエルはそれらに次々と与えていったのだ。

それに加えてエリントン領は無税、言うところの楽市楽座政策であることも有名。これは商人達にとって嬉しいことこの上ない。

そのためこの辺境の地に首都並に物資が揃うのもそう長くはかからなかった。

一体これらの金はどこから出ているのか。それはもちろんエリントン領が輸出するレアメタルと風石だ。

これらは全てクリフがやりくりしている。マチルダはというとギルドのトップを任されているのでクリフの錬金作業には付き合っていないらしいのだ。

そのため市場にでるレアメタルの量は微々たるものだが、噂のエリントン領でしかとれない金属というのはキャッチフレーズにはぴったりだったのか、すでにジュラルミンの名は国内に轟いている。

その他にも生活に密着した発明や地下下水道の技術など、クリフの世界での常識的なものを次々と資金源と変えていった。とは言っても武器などの製造技術を教える気はない。

クリフはこの世界の歴史をひっくり返すことには興味はないようだ。

そんな今乗りに乗っているエリントン領は国内でも話題のスポットとなり今観光客まで訪れている。

目当ては緻密に作り上げられた衛生的な都市計画で作りに出された街と、今話題の光の塔。ちなみに光の塔というのはギルドの三角形の建物らしい。

全面ガラス張りであるために太陽の光を反射して輝くことから来ているらしいが、中はむさ苦しい男達の仕事場ということでクリフは苦笑いを浮かべていた。

そして観光に来た者達が止まるのは最高級ホテル、『ホテル・モスクワ』だ。名前の由来は勿論クリフの懐かしい街の名前である。

だがその大きさは50マイルはあるギルドでも及ばない。SRC構造で作られた70マイルはあろうかという建物は、この国ではヴインドボナの城以外にあり得ないだろう。

そしてその最上階スイートルームからは街と光の塔を見下ろし、その反対側を見れば燦めく大海原を独り占めすることが出来る。

さらには海で捕れた新鮮な魚介類、移住してきた農民から購入した野菜を用いてクリフがシェフに教えた地球の料理の数々。そして極めつけは地下から引張ってきた温泉だ。

最高級のサービス、疲れを癒す温泉、その後は異世界の料理の数々。それらが貴族を虜にするのは月を数える間もなかった。

「モスクワの方は順調みたいだ。思った以上にラミアは有能だね」

「なんだか皆恩義に報いようと必死みたいだけど……そこまでのことをした覚えはないんだけど……まあ、助かってはいるんだけどさ」

ラミアと言うのはミランと一緒に売られてた奴隷の一人で、19歳の少女ではあるが、商人の娘というだけあって経済関連の知識は強い。

そこで試しにとホテル・モスクワの総支配人を任せてみたのだが、想像以上の利益を出してくれた。

ミランやラミア、最初に箱庭にやってきた多くの女性達は今このエリントン領の重要機関の重役として働いて貰っている。

彼女達から望み、そして頑張ってくれているのだからクリフとしては助かることこの上ないだが、無理強いしているような気分のクリフはどこかやるせない気持ちがあった。

「それにしてもこの無税政策っていうのはすごいですね……どんどん商人が集まってくる」

「エリントン家の財政は全てジュラルミンと風石で成り立ってますからね。でもそのお金も領民のために使うなんて……さすがはクリフさんです」

「褒めるんじゃないでこれからそれは二人でやらなきゃならないんだからね。ミランはレイチエルを支えてあげてくれ」

「はい。クリフさん。えっと、次は漁業のためのアーリア港の大々的工事の件なんです……」

海の幸を採るために漁師達を多く領内に呼んだのはいいが、その漁の方法はクリフにとって非効率極まりないものだった。

なのでクリフは軍港、及び造船ドックも兼用出来るほどの巨大港の建造計画を立てている。これは基本的な構想は出来ているため後はその通りに作るだけ。

このアーリア港を考える際に気をつけたのはホテル・モスクワから直線上にあるビーチだ。近くにビーチがあるため、アーリア港は少し離れた場所に作る必要があったが、その噂を聞きつけた者達ですでにアーリア港の利益にあやかろうと港外の土地に家を建てる申

請所が急増している。

これは街の外観を考えて建てる家を制限するために設けたのだが、それ以上に住民登録なども出来るために色々と助かっていた。

その分レイチェルとミランの仕事は増える一方だが。

「その件は都市計画の書類34ページに書いてあるだろ？そこに書いてある基礎作りを公共事業としてギルドに発注してくれ。

多分作るのに一週間はかかるだろうから、三日後ぐらいに詳しい書類が出来るはずだから、それまではそこに書いてあることを実行してくれ」

「分かりました……はあ、お金……全然貯まりませんね。交易の利益はすべて公共事業に消えていきます」

「巨大な都市を造るんだ。本当なら莫大な借金をして造るのを借金ゼロでやりくりしてるだけでも凄いんだぞ？」

「その代わり利益もありませんけどね」

「利益は数年後、街が完全に形成されてからさ。人口が増えれば税を少しだけかけるだけでかなりの額が得られるだろうし。今は我慢の時期さ」

元商人としてこれだけのことをして利益が出ないというのが不安なのかレイチェルはどこか焦った様子を見せている。

それに対してミランはこう言った政策などが利益を生むまでにかかる時間というのを分かっているため、レイチェルを優しく諭している。

本当にこの二人は互いが互いを支え合っている。その姿を見てクリフは微笑を浮かべた後に執務室から出て行こうとする。

「ありがとうございましたクリフさん。それで、今日はどちらまで？」

「ちょっとヴィンドボナまで行ってくる。……いや、これはミランには話しておいた方がいいかな」

「私に……ですか？」

いつもの笑顔ではなくバツの悪そうな表情を浮かべるクリフを見てミランは気持ちを改めて「お聞きします」とだけ言った。

その眼を見たクリフは覚悟を決めてこれからヴィンドボナを目指す理由を話した。

「そう……ですか」

「ミラン達には極力会わせないようにする。それは安心してくれ……って言っても無理だよな。でも俺はこれが一番だと思ってるんだ」

「分かってます。それが一番効率のいい方法ということは。……大丈夫ですよ。私はもう平気です。それに、今はレイチエルもいてくれますし」

見つめ合う二人、ほんのり赤く染まる頬をしながら甘い吐息が二人にかかる。

またか……そう思いながらクリフは二人に気付かれないように執務室を後にした。

執務室を後にしたクリフが向かったのは先ほど言った通りレイベルだ。本当ならかなりの時間を要する道のりなのだが、地下鉄道を使えば半日もかからずに着いてしまう。

そして昼過ぎごろにレイベルに到着したクリフはその街の様子にかなり驚いていた。

「なんていうか……廃墟って感じだなあ」

傭兵が居なくなり、ゴロツキで溢れていたレイベルは騎士団に清掃され、今はほんの少し残った浪人達が街の中をウロウロと歩き回るだけの廃墟になってしまっている。

閑散とした街の中を歩いていても睨まれることもスリに会うこともない。これはこれで寂しいものだと考えながらクリフが行き着いた先はかつてレイチエルと一緒に訪れ、ミラン達を買い取った奴隷商人の館だった。

そこも人影はなく、一台の馬車が止まっているだけとなり、それはおそらく商人の物であって、客のものではない。

クリフは戸惑うことなくそこに入るとやはりあの時の商人が一人椅子に座っており、その顔はどこかやつれていた。

「ん？……誰だ。今日は開店休業さ。分かったら帰ってくれ」

「仕事を依頼しに来たんだが、なんだ？随分と寂れてるじゃないか」

「あなたは……あの時の」

クリフの顔を見た瞬間に商人が驚いたような顔をする。さすがに一回の買い物で店の全ての奴隷を買い取った男を忘れるはずもないのだろう。

「景気は……聞くまでもないようだな」

「はい……新興貴族のエリントン子爵にここの傭兵達を根こそぎ持つて行かてましたからね。そのせいで国がレイベルの清掃をしたために客足はぱったりと無くなりましたよ」

「うむ……それは済まなかった。その件には私も少なからず関与しているからな」

それを聞いた商人が首を傾げる。そしてクリフは事の経緯を話し始めた。

自分が秘薬の研究者であり、さらなる研究を行うためにと領地を与えられたこと。

しかし領地を与えられたのはいいが、秘薬の研究があるため、表面上は執事であるレイチエルという男に爵位が渡っていること。

そして皇帝陛下からはレイベルの改善を求められていたため、ギルドを創り、傭兵をレイベルから遠ざけて騎士団に清掃をさせたこと。

これらの話を聞いて商人は肩を落としながら椅子に深く腰を据え

た。

怒ることは出来ないだろう。なにせ悪事を働いていたのは自分達なのであり、それを弾圧した貴族は皇帝の直々の命だったのだから。

「済まなかったな。お前には良い実験材料を売って貰ったというのに」

「いえ……貴族様は何も悪くはありませんよ。私共が引き際を見誤ったというだけです」

「それで、お前はどうするのだ？」

「……闇に一度足を踏み入れた者は死ぬまで闇に生きるものです。奴隷商の次は危険な秘薬でも取引しましょうかね」

「そこでお前に提案があるのだが……私直属の奴隷商人とならないか？」

「……………直属？」

「お前の奴隷を集める手腕と情報網が欲しいのだ。お前の仕事は私の秘薬研究に必要な実験材料を確保すること。奴隷一人頭50エキユー。でどうだ？」

この初老の商人は例え外道であったとしてもゲルマニアで最も凶悪な街で奴隷商売を一手に担っていた闇の大商人。その顔の広さも裏社会への太いパイプも持っているであろう人材。

それをクリフは箱庭に人間を住ませるために利用しようというのだ。

「性別は問わん。実験に男女は関係ないからな。そして連れてくるのは基本的には孤児だけだ。大人が居なくなれば気付く者がいるだろうし、親のいる子供だと後々厄介なことになるやもしれん。お前の情報網でどうにかならんか？」

それを聞いた商人は眼を輝かせて椅子から立ち上がると、クリフの前で跪き、手を強く握りしめてクリフに感謝を述べていた。

それから詳しい話し合いの元でクリフと商人の間に色々な取り決めがされていく。

まず基本的に孤児や親の居ない子供などが取引の対象。

報酬は一人につき50エキュー。

取引場所はエリントン領、領主邸で行い、表面上の領主であるレイチエルが相手となる。

商人はこの契約のことを口外せず、また契約中は他の貴族への奴隷商売も行わない。

その他諸々の項目が埋まった紙に商人とクリフのサインが入り、二人の契約が交わされた。

これによりこの男は絶対に他の貴族に奴隷を売ることは無くなり、クリフの元には箱庭の住人となる子供達が簡単に集まるようになる。クリフは握手する商人のホクホクとした顔を見て微笑みを浮かべながらその手を握り替えした。

十一話（後書き）

パソコンで小説書くのってタイピング練習になることに気がついた。

十二話（前書き）

ミノタウロスとケンタウロスを逆で認知してました……………

間違いを指摘なさってくれた方、ありがとうございました

十二話

エリントン領が街として形成し始めてから半年は経っただろうか。最初はただの海辺の平野に領主邸とギルドがあるだけの広場、住人すら居ないので村とも言えなかったその場所は、やがて傭兵が住み着き、移民が住み着き、様々な人がこの地へとやって来た。

そして半年経った今では巨大な街が形成され、大通は歩く人々で活気に満ちている。アーリア港もまだ出来ていないまだ未完成の街ではあるが、今日はある意味一つの完成をみた。

「では本日よりホテル・モスクワは正式オープンとなります。では皆さん。気を引き締めてくださいね」

「かしこまりました。ラミア様」

そう言って一斉に頭を下げるメイド服姿の女性と執事服姿の男性のホテル職員達。ホテルのフロントを埋め尽くす従業員達は10分後にせまったオープンに向けて慌ただしく自分の持ち場へと向かって行った。

このホテル・モスクワ。実は長いこと貴族達が客として訪れているにもかかわらず未だに建設途中だったのだ。

最初にこの土地にエリントン邸を作ったのはマチルダ。その頃クリフは一人でギルドの方を作っていた。まあ、マチルダにトラス構造などというものが分かるわけがないので仕方ないのだが。

そしてギルドがようやく完成した後に傭兵達がこの地に集まり、亜人が平野から遠のいた辺りからクリフはホテル建設を始めていた。ホテルはSRCのラーメン構造。図面に引かれた線は緻密に計算されたH形鋼。コンクリートを作るのにも苦労はしたが、そこは鍊金という文明の利器を軽く超越した力で何とか作り出すことが出来た。

そして基礎、鉄骨、やがて外観を作ることには出来たが、百はある客室に家具や小物を配置するには未だ途方もない時間がかかる。

だからこそクリフはスイートルームとその他少しの部屋だけ、そこに続く廊下、食堂や風呂、エントランスと言った客が足を踏み入れる場所だけを完成させ、そこだけは営業可能な状態にした。

そして国中の貴族にこうふれ回ったのだ。

『我が領地で建てるホテル・モスクワの試験営業に協力してもらえ
る貴族の方をお待ちしております』

通常の半額で試験営業と言う名で貴族を招待し、改善点を見つけたり貴族同士にこのことを広めてもらうのがクリフの目的だった。誰が最初に来るかとは平民からの募集で集まった従業員達だったが、ホテル最初のお客となったのはなんとアルブレヒトだ。従業員達はそれを知った途端にパニック状態に陥ったが、ラミアの厳しい指導のお陰か何の粗相もなくアルブレヒトをもてなすことが出来た。

そしてアルブレヒトが帰り際に言った一言。

『久しぶりに心から休むことが出来た。正式なオープンを迎えた際には我もまた来るとしよう』

その言葉に従業員達は眼を輝かせ、貴族達は我が耳を疑った。あの深慮深いアルブレヒトが心から休めたと言ったのだ。

それは誰でも驚くだろう。そしてその噂は広まり、多くの貴族が

このホテル・モスクワへと足を運んだのだ。

そしてこれは研修期間ということもあってメイドが粗相を犯すのもしょうがない。それに自ら名乗り出て協力しているということもあって怒鳴り散らすことも貴族として恥ずかしい。

その上問題を起こした者は貴族平民に問わず立ち入り禁止処分というものが待っている。

一度このホテルのすばらしさを知ってしまった者にそれは何としても回避したい事態だろう。

だから貴族達はメイド達の起こす小事程度では何も言うことはなかった。そしてそんな貴族相手に経験を積んだメイドや執事達は実力を付けていき、後から入ってきた後輩達に仕事の仕方を教える事も出来るようになる。

こうした期間の間にクリフは一人黙々と客室を完成させていき、ついに今日全てを完成させるに至ったのだ。

「ようやく正式オープンまでこぎ着けましたね」

「そうだね。長かった研修期間も無事に終わったし、これからはもうラミア一人でも大丈夫だな」

「クリフ様……私はクリフ様に拾って貰った恩、そしてこのような大役を任せて頂いた恩。絶対に忘れません。

これからもクリフ様のために力を尽くさせてもらいます」

「期待してるよ。でも頑張りすぎないでくれよ。君ほど優秀な人材は滅多にいないんだ。君の他にこのモスクワを預けることなんて出来ないからね。

……さて、そろそろオープンだ。頑張り過ぎないように、頑張ってくれ」

「はい……かしこまりました」

クリフがフロントから姿を消すまで深々と頭を下げ続けるラムミアは、クリフの労いの言葉を聞いて体を震わせて嬉しさをかみしめていた。

元商人の娘、そして奴隷として男達の捌け口となるはずだった自分達を拾ってくれた恩人は、このホテル・モスクワというゲルマニア最大級の商売を自分に任せてくれた。

そして自分を優秀と讃えてくれた。元奴隷の自分を頑張り過ぎるなど気遣ってくれた。それがどれほどまでに嬉しかったか。

だからこそラムミアはクリフの言葉に逆らうことになろうとも頑張ることを決めた。

ただ少しでもクリフの力になれるのならばと。

オープンを迎えたホテル・モスクワの前に出来る金持ちの商人や貴族達の列を横目にクリフはその足でアーリア港へと向かう。

アーリア港には今レイチエルが来て総指揮を取っている。と言っても手順の書いた紙をクリフが事前に渡してあるので、ただその指示通りに労働者を動かすだけなのだ。

アーリア港近くになるにつれて街の市民の顔ぶれから土木現場の男達の汗の滴る顔ぶれに換わってきた。

そして港の中心部で指示を出すレイチエルに近づいていき、後ろから声をかけるとレイチエルは笑顔でクリフを迎えた。

「ホテル・モスクワのオープン。無事に開始しましたか？」

「ラミアが仕切ってるんだ。最初から心配なんてないさ。それよりも今はこつちさ。どうだ、順調に進んでるか？」

「はい。でも少し西ブロックの工事が遅れ気味ですね。あそこは元々岩礁も多かったですし」

「でも最大予想工期内には収まってるだろ？それなら心配ないよ。それよりもここに来てくれる漁師の数なんだけど」

「それなら心配ありませんよ。今のうちからかなりの漁師の方が集まってますし、その漁師の方も工事に協力してもらってますから」

港が出来てないうちからやって来た漁師を率先してレイチエルは雇い、そして港を作る上で漁師の意見を参考にしてクリフの設計図に自分なりの改良を加えていた。

それを聞いたクリフは今まで言われたことをやるだけで精一杯だったレイチエルがこんなことをするのかと驚いていた。

「それじゃ港の方も心配ないな。今度は市場の設計も行わなきゃならないかな……さて、俺はギルドに顔出しに行くから」

「はい。お気を付けて」

別れた後も堂々と指示を出すレイチエルを見てクリフはその成長ぶりに思わず笑みを漏らす。

そしてクリフは捕れた水産物を売り買いする市場の構想を考えながら街の方へと歩いて行った。

街に着いたクリフは今、アーリア通りという大通を歩いている。道幅が広く、多くの人が行き交っている先に見えるのは巨大な広場だ。

東南のヴィンドボナからエリントン領へと伸びる街道。北の海沿いにあるホテル、及び領主邸へと伸びる街道。街の西に向かうギルドへと伸びる街道。そしてクリフが歩いている東の港へと伸びる街道。そして南西のツエルプストー辺境伯の街へと続く街道。

この五つの大通が巨大な広場で交わっているのだ。まるで『大』の字状に集まった大通の交差点には多くの人が集まっていたが、それすら許容出来る広場はのんびりとした平民の生活を暖かく映している。

最初作った時は誰もが大きすぎるのではないかとクリフの設計を疑ったが、今となってはこれぐらいで丁度いいと思えている。

「北のホテルに西の光の塔……アーリア港にも何か、そうだな……灯台でも作るのかな」

そんなことを考えている内にギルド通りへといつの間にか足を踏み入れていた。

広い道の両側には商人達の店が建ち並び、武器屋やサバイバル用品の店が多く見受けられる。まあそう言った者達が集まる通りなのでそれはしょうがないのだが。

ちなみにお洒落な店やカフェがあるのはホテルへと続くモスクワ

通りだ。そして宿屋が多くある東南の通りと日用品が揃うアーリア通り。

このような区分分けをクリフやレイチェルはした覚えは無かったのだが、いつの間にかこういった暗黙の了解的なものが市民の間で出来てしまっていた。

まあ市民達にとってもそれが便利なのだから別に口出しするつもりはクリフはない。

「おっと、すまん」

「いえいえ、それではお気を付けて」

クリフは前から歩いてきた傭兵の集団にぶつかりそうになってしまっ

た。人が多い上に傭兵達は大きな荷物を持っていることが多いのでたまにこうしてぶつかりそうになってしまっ

た。しかし傭兵達はレイベルのように怒り出すような者などおらず、ぶつきらぼうながらに「すまん」と謝罪の言葉を口にした。

この街の傭兵達はどこか他の傭兵達とは違う。それはどこか。それはおそらく自分の行いに誇りがあるからであろう。

この街は傭兵達に守られ、傭兵達によって発展したといっても過言ではない。市民を凶暴な亜人達から守るのを仕事とし、そしてそれはギルドに功績として讃えられる。

それが何時しか自信となって傭兵達に誇りというものを植え付けた。

「あいつ……メイジか？かなり強そうだなあ」

歩いているクリフとすれ違った男は杖を持っていることから十中

八九メイジ。振り返りながらその背中を眺めてみるが相当強いと思われる。

こう言った者達は自分の力に誇りを持ってこのギルドへとやって来る。そして決闘のシステムを使って上へ上へとの上がってくるのだが、最後に待ち受けるマチルダに全員が叩き伏せられているのが現状だ。

先ほどの男もいずれマチルダに決闘を挑む日が来るのだろうか、その時男はマチルダを見てどう思うだろうか。

多くの傭兵達と戦い、更に力を付けたマチルダが負ける姿などこの街の者なら考えられないだろう。

そんなことを考えながらやっと着いた光の塔はガラス張りの外からでも中の盛況ぶりが見て取れる。

複数ある受付は無休で動いており、先月新たに雇い入れたというのに再び雇い入れないといけないかもしれない。

「おつ、またマチルダが勝ったのか。これで140戦140勝……さすがとしか言いようがないな」

受付の隣に大きく張り出された金属製の掲示板にはこなした依頼の上位50人が掲示されており、そこには受けた依頼の数で決まるランクと決闘の戦績が書かれていた。

そしてギルドのトップとして一番上に掲示されたマチルダの戦績は『フーケ：140戦140勝』。他は多くても十数戦だというのにマチルダはこの圧倒的数に圧倒的勝利数だ。

やはり傭兵達の頂点に立つだけあって血の気の多い者に喧嘩を売られるのも多いのだろう。しかもマチルダはそう言った輩の喧嘩を絶対に買う性分なので、140戦というのは少し納得だ。

そんな掲示板を流し見ながらクリフは関係者以外立ち入り禁止の階段を上へ上へと上っていき、最上階の扉をノックした。

「マチルダ、今大丈夫か？」

「クリフかい？入ってくれ」

ピラミッド状の建物の最上部。三角形の先端部にあるギルドマスターの部屋。

そこにカラス張りのパノラマから街を見下ろすクリフだが、マチルダはそんな絶景に目もくれずに机に溜まった書類の処理を行っていた。

「悪いね。今ちよつと立て込んでるんだ」

「今度開くトーナメントの件か？」

「そうさ。ラミアとは話が付いてるんだけど、当日の警備隊の配置をどうするかが決まってるんでね」

今度開催する予定の傭兵達による最強を決めるトーナメント。このギルドに登録している者なら誰でも出ることができ、そして優勝者には一万エキュー。さらにはホテル・モスクワのスイートルームに一週間泊まることが出来る券までついてる。

だが傭兵達はそれよりもトーナメントで優勝したという名誉の方が嬉しいのかもしれない。自分の力を信じ、それを磨きこころまでできた。そして千人の傭兵達の中で最強となる。これほどまでに誇れるものはないだろう。

「失礼しますマスター。決闘の申し込みが来ています」

「またか……おそらく最近この街に来た連中だろう？」

「はい。あの剣はトリステインの物かと思われます」

古参の者でマチルダに決闘を申し込む者などは絶対にいない。最初は挑む者達もいたが、一度マチルダと剣を交えれば傭兵達はその圧倒的な実力の差に自分の浅はかさを呪うことになる。

しかしいつの時代のどこにでもいるものだ。命知らずという者達は。遠くの地からこのギルドにやって来た者達は傭兵行きつけの酒場で大言壮語なことを言い散らす。

『俺ならすぐにここ最強になれる』、『あのフーケとかいう女は俺が引きずり落としてやる』そんな言葉が絶えることない酒場で新参者に助言する者などいない。

すぐに分かるからだ。ここの傭兵のレベルの高さ、そしてマチルダに決闘を申し込んだ瞬間に分かる天と地ほどの実力の差。

かつては自分も酒を煽りながらそんなことを言ったものだ、ここの傭兵達は思い浮かべながら新参者の言葉を肴に仲間達との酒を楽しむのである。

そして今日も一人、新参者がプライドを根本から粉々に破壊されることとなるのであろう。

「それじゃクリフ。ちょっと行ってくる」

「警備隊の件、片付けておくからゆっくり戦つてくるといいさ。それじゃ怪我しないようにな」

「ふん、誰に向かって言ってるんだい」

不敵に笑ったマチルダが部屋を後にしたのを見送ってクリフは机の上に置かれた書類に眼を通す。

「コロシアムの決算報告書？……へえ、結構儲かってるな」

決闘システムの中にある観客による賭けのシステム。それは市民の娯楽の一つでもあり、観光の目玉スポットでもある。

観客席はいつも満員で張り裂けんばかりの声援に包まれている。その中で行われる決闘も熟練した傭兵同士の戦いというだけあって帝国騎士ですら息を呑むという。

だが何故そんなに毎日決闘が行われているのかと、決闘で勝ったものにはその時の自分に賭けた場合の賭け金の倍率が、次に受ける依頼に付加されるというルールがあるのだ。

つまり自分が勝った場合賭け金が2倍になるとする。そしてその決闘に勝てば決闘後に勝利した証明書が渡され、それを持って『オーク鬼の討伐：報酬50エキュー』を受ければ依頼を完了した場合2倍の100エキューを手にすることが出来るのだ。

これにより決闘を申し込む傭兵達が増え、最近では決闘に使うコロシアムのスケジュール割り当てが大変になってきている。

だがそれ以上に優秀な人材が集まってきているのもたしかだ。いずれはマチルダがおらずともこのギルドは回ることが出来るだろう。

黙々と警備隊の書類を処理していると清々した顔をしたマチルダが部屋に戻ってくる。

「お疲れ、随分と楽しそうだけど？」

「ちょっといらいらしてたんね。思い切り遊んできたよ」

きつと遊ばれた者達は死ぬかと思っただろう。心の中で冥福を祈りながらクリフは横に立つマチルダに書類を渡す。

「……もう出来たのかい？」

「元々俺は軍人だからね。こう言ったのには得意なんだよ」

マチルダ本人は嫌そうだが彼女は内政などの能力が高い。それに比べてクリフは商いや軍事の方が得意なため、こういった警備の配置などではマチルダよりも頭が働く。

マチルダは驚きながらも「まあクリフだしね……」と納得して書類を机に置いた。

「それで、私になんか用でもあるのかい？」

「昨日陛下から領主邸に手紙が届いたんだ。内容はクリフとマチルダは帝都に来るように、だってさ。要件までは書いてなかったけどね」

「あのジジー一体何の用だったのさ……やっとギルドも安定してきたつてのに、ここで面倒事押しつけられるようなら私は切れるからね」

「レイチェルじゃなくて俺達を呼び出すってことは大方面倒事だろうさ。大丈夫、一人で解決出来ることだったら俺が受け持つよ」

頭を掻くマチルダをなだめるようにクリフはそう言い聞かせると、明日には帝都に赴くことを決めた。

マチルダとクリフは箱庭のテファ邸へと帰ると子供達と一緒に夕食を取る。最近だとエリントン邸でメイドに囲まれて静かな食事が主だったため、久しぶりの楽しい食卓はクリフとマチルダを笑顔にさせた。

「明日ヴィンドボナに行くんですか？何かあったんでしょうか……」

「さあね……大きな動きと言えばアルビオンのレコン・キスタが本格的に革命運動を始めたことぐらいさ。まあゲルマニアには関係ないんだけどね」

祖国の危機を吐き捨てるように口にするマチルダ。親を殺され、テファを追いやったアルビオンに最早末練などないのだろっ。

クリフはテファの様子を伺い見るが、どうやらテファもそこまで意識はしてないようだ。それもそうだろう。

10歳までは人の来ない森の中。そしてその後はクリフ達と共に暮らし、その後はこの箱庭だ。テファにとっての世界とは森の中の小屋とこの箱庭だけでしかない。

「まあそんな危険な任務を与えることはないよ。俺やマチルダが居

なくなればどんな損失が出るかぐらい分かっているはずだからね、あの皇帝は」

クリフの言うとおり、アルブレヒトは箱庭の有益性を分かっているのに潰しにかかるなどということは全くなかった。

今まで何度か新興のくせに調子に乗っているなどの理由で他の貴族がスパイを送り込んできたりなどはあったが、それらは全て精霊達に発見され、クリフに伝達された後に精霊によって処理された。

それにアルブレヒトがエリントン子爵に肩入れしていることも知れ渡っていたので、今ではスパイを送り込んでくる者などはいない。たまにガリア方面からのスパイなどがあるが、それらも同様に処理されている。

「とにかく明日行ってみないと分からない。さて、久しぶりに帰ってきたことだし、遊ぶか！」

「わーい！ー！」

夕食を食べ終えたクリフが立ち上がり子供達に向かって遊ぶ宣言をすると子供達はクリフの真似をして拳を上突き出す。

食後だと言うのに慌ただしく食堂から消えていったクリフと子供達を見て、マチルダは苦笑を浮かべながら食器にレビテーションをかけてテファの待つ流し台へとそれを持っていく。

「久しぶりに帰ってきたんですから、マチルダ姉さんは休んでいてもいいですよ？」

「いや、久しぶりだからこそ手伝うよ。いつもはテファを一人にして苦労かけてるからね」

「ふふっ、でも最近だと年長組のシラバスとかは手伝ってくれるんですよ。もう12歳ですしね」

クリフとマチルダが家を空けることが多く、テファの苦勞が子供達に分かるようになってきた頃、年長組の間で秘密会議が行われ、マチルダ姉さんやクリフ兄さんの代わりにテファを支えてあげようという決まりが出来たのだ。

これにより10歳以上の子供達は率先してテファを助けるようになり、実質テファの毎日の仕事は食事の準備程度だった。

「そうか……あの子達ももうそんな歳なんだね。……って、なんて老け込んだこと言ってるんだい！」

聖母のような暖かい笑みを浮かべながら子供達の成長を喜ぶマチルダの口からそんな言葉がふと呟かれる。

しかし自分が何を言ったかに直後に気付いたマチルダは顔を真っ赤にして自分に突っ込みをいれる。そんな様子をテファは横で笑いながら久しぶりの姉との談笑を心から楽しんでいた。

「……………どうも」

朝、久しぶりにテファ邸の自室で寝たクリフは何故か早く起きてしまい、顔でも洗いに行こうと外に出ると、そこには見知らぬ住人がいた。

「……………」

無言でテファ邸の家の前に立つのは幻獣ユニコーン。おかしい…なぜ幻獣がここにいるのか。

クリフは無言でユニコーンと見つめ合いながらそれを必死に考える。いつの間にか背中から嫌な汗がにじみ出ている。

「あつ、クリフさん。あれ？もう来てたんですか？」

その言葉を聞いたユニコーンはテファの言葉に応えるように首を縦に振る。

「テファ……このユニコーンは一体……」

「最近ノームさんが闇の森にここに続く穴を掘ったらしいんです。それで色々な幻獣や獣人の方達がここによく出入りしているらしいですよ」

「大丈夫なのか？そんな簡単に出入りを許しても」

「獣人や亜人の方は人間に穴の場所を教えるなんてことあるはずないでしょうし、亜人は総じて精霊を敬っています。」

ノームさんみたいな上級精霊がいるなら凶暴な亜人も手を出したりはしませんよ」

それを聞いて安心していると、ユニコーンはテファ邸の前からどこかへ消えていってしまった。蹄の音を鳴らしながらほの暗い朝の光を浴びて街の外に消えてゆく幻獣。

その姿はそれだけで絵になるが、それよりもクリフにとってはあ

のユニコーンは何をしにきたのかということが重要だ。

「いつの間にか顔見知りになって毎日挨拶に来てくれるんですよ」

花が咲くような笑顔でそう答えるテファにクリフは「ああ……そう」
としか答えることが出来ない。

幻獣を顔見知り……やはりここら辺の感性の違いが人間とエルフの
違いなのかと一人考えながらクリフは家の中に戻りテファの朝食の
準備を手伝うことにした。

朝食を済ませ、丁度良い時間になるまで子供達と遊んでいたクリフと
マチルダは腹ごなしが済んだところでそろそろヴィンドボナに向かう
ことをにする。

子供達の寂しそうな顔に後ろ髪を引かれる思いだったが、これか
らもういくらでも遊ぶ時間は作れると自分に言い聞かせて二人は箱庭
を後にした。

そして帝都に着いた二人は城の前で警備の兵に止められている。
それもそうだろう。ふたりは貴族ですらないのだ。

だがマチルダが取り出したエリントン子爵からの書状を見せると
警備の兵は大人しくその場を引く。

そうして城の中に入った二人はクリフとマチルダではなく、ギルド
マスターのフーケとその付添人のクロードだ。

これはアルブレヒトの書状に書かれていたことで、『ギルドマス

ター、赤鉄のフーケとエリントン子爵の家臣、クロードは帝都まで来られよ』という要望に応えるためにこうなったのだ。

「なんで二つ名まで書いたのかね……その二つ名嫌いなんだよ」

「良いじゃないか。俺は格好いいと思うけど」

マチルダことフーケの二つ名、それは『せきてつ赤鉄』。鋼鉄の刃に滴る相手の血、それは鉄を赤に染め上げる。

一度剩りに多くの決闘申し込みがあつた時にマチルダは30人を一度に相手取り決闘を行うということがあつた。そしてその挑戦者達は明らかに結託してマチルダを殺そうと攻撃を仕掛けたため、観客達も激怒しそうになったが、その時マチルダがブチ切れて少し本気を出してしまったのだ。

相手が殺す気ならこちらも殺す気で。マチルダは地面を鋼鉄の刃に変え、傭兵達の機動力を奪う。そうして相手を切り刻みながらマチルダは踊るように刃の上を渡る。

そして手に持つで切り裂いた相手の体から鮮血が双剣の先端に尾を引いてまるで細い糸を剣に付けているかのようにマチルダを演出した。

フライでなんとか退避していた10人ほどの傭兵達も正気を失い最後はマチルダに特攻という愚策に走る。そして四方八方から襲いかかる傭兵に対してマチルダは一步も動くことなく地面から突出してきた鉄の槍によって全員が串刺しにされた。

そして突き刺された腹から滴る鮮血は地面へとゆっくり垂れ流く。その中心でホコリ一つ付いていない緑の髪をなびかせるマチルダ。

この一件によりマチルダは赤鉄のフーケとして畏敬の念を抱かれるようになった。

この一件のせいで一部の市民はトラウマを抱くことになったが、それ以上に傭兵達はルール違反がどうなるかということを目の前で見ることでそれから不正や騒ぎを起こす者は格段に減った。

結果的に言えば色々な面でいい影響が出たと言えるだろう。だがマチルダはこんな恐怖の対象のような二つ名は御免らしい。

「失礼します。エリントン領のギルドのマスター。フーケでございます。この度はお呼びいただき恐悦至極」

「エリントン子爵の家臣、クロードでございます。お目にかかれて光栄です」

「うむ……では兵達は下がれ。色々と話があるのでな」

「し、しかし……ゲルマニアの人間と言えど陛下を一人にさせるなど……」

「いいと言っている。この者達は我に刃を向けることなどない……そうであるっ?」

不敵な笑みを浮かべるアルブレヒトをチラリと見た後にマチルダが「無論でございます」とだけ返事をする。

アルブレヒトの言葉もあってか、兵士達は戸惑いながらも玉座の間を後にした。

「……で?あたしらに何のようだい?」

「言葉使いがなってないぞ。全く貴様らと言う奴は……レイベルの利益を根こそぎ持って行った上に帝都の市民まで吸収しおって……。お陰で色々な場所から不満の声が出ている。どうしてくれるんだ」

言葉では責めているもののアルブレヒト自身はそんなことを微塵も思っていないのか、その言葉には感情が籠もっていない。

「陛下が私達を呼んだ理由は何でしょうか？まさか小言を言うために呼び出したわけではないでしょう？」

「最近アルビオンでレコン・キスタという反政府組織が活動しているのは知っているな？奴らの目的は国を越えた貴族の共和制……そしてそれに賛同して王室に反旗を翻したアルビオン貴族も多くいる」

「国を超えた……つまりこの国も例外ではないということでしょうか？」

「理解が早くて助かる。そう……この国でもレコン・キスタの一員となつて我に牙を剥こうとしている輩がいるに違いない。貴様らにはその者達をあぶり出して欲しい」

「なんで私達が……あんたは皇帝なんだから近衛騎士団や諜報員もいるんだろ？そいつらを使えばいいじゃないか、めんどくさい」

面倒そうにアルブレヒトの話を聞いていたマチルダだったが、最後に本音が口からこぼれている。

それを聞いたアルブレヒトは怒る素振りを見せない。どうやらマチルダの不敬はあまり気にしていないようだ。

忠誠を誓っていないのだからそれは当たり前といえそうなのだが、それを認めるアルブレヒトも剛毅な皇帝だ。

「ふん、我が国最高の諜報員をあの箱庭に潜入させるように命じたら使い物にならない状態で帰ってきた。これはどうしてくれるんだ

「？」

「ああ………そういえば」

マチルダは首を傾げているが、クリフには思い当たる節があったようだ。

何時だったか忘れたが、エリントン邸から箱庭に続くトンネルに侵入したスパイを精霊が捕らえ、クリフがそれを処分することになったのだが、まずこのトンネルを見られた時点で不味いのでテファの忘却の魔法を使い、記憶を消す。

そして目隠しした状態でギルドまで連れて行き、ギルド内にある牢屋の中でひたすら拷問を行いどこの所属かを吐かせたのだが、アルブレヒト直属の諜報員ということでクリフはそのスパイを解放したのだ。

本当なら国家反逆罪なのかもしれないが、スパイを送り込んできたのはアルブレヒトであり、悪いのはあちらなのでクリフはすっかり忘れてしまっていたのである。

「あの者は飛び抜けて優秀だったのにもかかわらずどうしてあんな状態になったのだろうか」

「確かに優秀ではありましたね。秘密の入り口を見つけられたのはあの諜報員だけですから」

「だが奴はもう使い物にならない。本当なら奴にこの任務を任せるのが……？」

貴様が使えなくなったのだから、貴様が責任取って任務をしろ。そう言いたいのだろう。

だがもうマチルダは興味をなくした顔をして窓の外をボーッと眺めていた。クリフは色々と考えた末に任務を受けることを決める。自分に非があるのも確かではあるし、そのレコン・キスタが反旗を翻した時にエリントン領も無事にとはいかないのは明白である。それなら先に相手を叩くのがいい。それに陛下公認で動いた方が色々とやりやすいだろう。ならばとクリフはアルブレヒトの任務を受けたのだ。

「良かったのかい？あんな依頼受けて」

「陛下は俺に依頼を出した。だったらレアメタルの交易が滞ってもそれは陛下の責任だ。何も言われることもないし、ホテル・モスクワも完成、ギルドも順風満帆。後はアーリア港だけど、あれも心配はないさ。だったらこれからのエリントン領の敵になるかもしれない輩を叩く方がいい。そうだろう？」

「まあね……政務はレイチエルとミランで十分だし、ラミアだってかなり仕える。ギルドは今まで通り私が指揮する。ふっ、もうあんたは必要ないかもね」

「まあ元からこの世界の住人じゃないしな。必要ない存在っていうのは間違っていないさ」

マチルダが笑いを含みながら言った嫌みに対してクリフも笑いながら冗談で肯定してみると、マチルダの顔はバツの悪そうに下を向いていた。

明らかにシュンとして俯いているマチルダ。いつも強気で言いたいことははっきり言う彼女からは想像出来ないその姿にクリフはどうしたのかと慌てて尋ねると。

「悪かったよ……ほんの冗談だったんだ。だからそんなことはもう言わないでくれ……」

「こつちも冗談だよ。大丈夫、マチルダやテファの前から何も言わずに消えるなんてことは絶対にしない」

弱々しい声色で謝罪を述べるマチルダに優しい笑みを浮かべ、クリフはマチルダの手を取って箱庭へと帰ることにした。

十二話（後書き）

今更ながら思い返すとホテル・モスクワってあれですよね……

無意識だったんですけど……

とりあえずバラライカさん最高です

十三話（前書き）

今回短い……

十三話

アルブレヒトの命令を受けて箱庭へと帰ったクリフとマチルダ。この件はクリフ一人で対処するということが二人の間で決まっていたので、クリフはテファ邸に帰ってから色々と考え事をしていた。

「レコン・キスタをあぶり出せ……って言ってもなあ」

そう簡単に気配を察知されるようならアルビオンと戦争出来るほどの戦力が集まるわけがない。例えばアンドバリの指輪の力があつたとしてもそんな情報の力を軽んじる組織なら、指輪の魔力で無理矢理兵を集める前に王国騎士団が畳み掛けてお仕舞いだ。

だがそうはならなかった。そしてあの深慮深いアルブレヒトもまだ国内のレコン・キスタの情報を掴んではないのだ。

そんな組織の情報を一個人であるクリフなどが掴むことが出来るのだろうか？

「レコン・キスタの情報は前々からあつた……でもそれを潰せなかった。アルビオンが甘く見過ぎてたのか……それともレコン・キスタの情報隠蔽が上手かったのか……」

おそらく両者だろうとクリフは思いながらベッドに倒れ込む。机に座っているだけでは何も浮かんてこない気がしたので、視点を帰るといった意味でもベッドに横になると光石の光が降り注ぐ窓へと眼を向ける。

「アルビオン……空に浮いてるんだよな……補給はどうやったんだろっ」

勿論レコン・キスタなんて組織が公の商売で物を買えるなんてことはないだろう。ならば物資を闇商人などから仕入れていることになる。

だが国と事構えている今、国内の市場や闇の商売人は厳しく王国軍に監視されているはずだ。例えば貯蓄があつたとしてもそれは小国のアルビオンで闇に生きる商人から買った物。

そう量は多くないだろう。ならばすぐにでも兵站がなくなつたレコン・キスタが倒されてもいいだろうに、今も王国と戦いを続けているという。

「となると地上の何者かから物資……支援を受けているのか？」

浮遊大陸のアルビオンに行くならば絶対に避けては通れないのは船に乗ることだ。そしてその船は王国によって厳しい監視体制が敷かれている。

この中で素性も何もかも怪しい闇商人が商売に行くなど絶対に無理であろう。だがそれが行われている。

「貴族が証書を発行している？………これはいけるかも」

闇商人の後ろに貴族が立っており、貴族から王国への支援物資ということであれば飛行船の港も通ることが出来るだろう。

その後どのような方法でレコン・キスタに接触しているのかは知らないが、レコン・キスタに属しているゲルマニア貴族が商人を通して援助を行っているというのは十分考えられる話だ。

そしてそれを思いついたクリフはすぐにベッドから起き上がると至急レイベルへと向かった。

寂れたレイベルの中に立つ一つ少し大きな建物。そこに躊躇なく入って行ったクリフは中にいる男達にこの主人を呼ぶように願う。そして現れたのは例の奴隷商人。先日集めた孤児達をエリントン子爵邸に届けに来た時に名前を聞いたのだが、この商人、リレイヤと言うらしい。

リレイヤはクリフの姿を見ると笑顔で奥の部屋へと案内する。

「こんな場所までご足労していただき恐悦至極。ですがなぜクロード様自ら赴いたのでしょうか？」

商品のお届けなら定期的に滞りなく行っていますし、取引をするのはエリントン子爵だったはずでは？」

「ああ。君の仕事には満足している。それに今日はその件で来たのではない。……サイレント」

これから話をするというところでクリフは部屋全体にサイレントをかけて話を聞かれないようにする。

それを見てリレイヤの顔も接待用の笑顔ではなく、商人が取引を行う眼になっていた。

「最近のアルビオンの情勢を知っているか？」

「レコン・キスタ……ですか？それはまあ、人並みには」

「そのレコン・キスタが我が国に在るという情報を掴んだのだ。そしてその者は我が領地を狙っているらしい」

「今やエリントン領は帝都に次ぐゲルマニア第二の都市ですからね。しかも出来て間もない街、簡単に落とせる上に反乱軍がそれを落としたとなれば大いに勢いづく。といったところでしようか」

「そうだ。我としては秘薬の研究が続けられればいいのだが、秘薬の材料を手に入れるためにあそこまで大きくした街を手放すのは些か惜しい。だからお前にレコン・キスタの情報を売って欲しいのだ」

「ゲルマニアのレコン・キスタ……ですか？ そうしたいのは山々なんです、そのような情報を取り扱う商売は行っていないんですよ。だから裏の情報が集まってこないんです」

「そう言うことではない。おそらくゲルマニアからアルビオンに支援物資が送られているはずだ。最近貴族から証書などを貰った商人はいないか？ 表裏に問わずでいい。何か知らないか？」

そう言われたリレイヤは少し考える仕草をした後にバツの悪そうな顔をして顔を上げた。

「多分……探すことは出来ます。ですが少し時間をいただいただけませんか？ 次のお届けの時までには情報をかき集めておきますんで、それまで少しの猶予を」

「かまわんさ。……では頼んだぞ。ちなみにこのことは他言無用だ。これは情報料と口止め料だ」

そう言つて懷から取り出した袋、そこには500エキューほどの

金が詰まっております、それを見たりレイヤは嬉々とした表情を浮かべて袋を受け取った。

閑話（前書き）

どうでもいい話

閑話

リレイヤが裏社会の情報網を使ってレコン・キスタを調べ、クリフも独自に貴族の領内を回り、精霊の力を使って色々な情報を集めているころ。

そんなドロドロとしたことが行われているとは思ってもいないレイチエルとミランは今日も仲良く二人で政務を行うはずだった。

しかし今日はとても大事な来賓の方が来られるので、そのお持て成しをミランがすることになっていた。

街の南西に延びる街道の先、街の入り口を示す門の前でミランが待っていると、そこに一台の馬車が馬に乗った兵士達に囲まれてやって来た。

その馬車はミランの前で止まると扉が開かれ、中から男性と女性、そしてその子供であろう女性が降りてきた。

「このたびはわざわざご足労いただきありがとうございます。精一杯お持て成しさせて貰います。ツエルプストー辺境伯」

「こちらこそよろしく頼むぞエリントン夫人。紹介しよう。こっちが妻で後ろにいるのが娘のキュルケだ」

「キュルケです。今日はよろしくお願いしますね、エリントン夫人」

紹介されたキュルケという少女、しかしその体つきは少女とは言い難い。完全に成熟しきった体つきを見てミランも少し驚いている。

だがそんな失礼なことを顔には出さずにミランはツエルプストー家の皆を街へと案内し始めた。

本当ならこのような訪問による視察は馬車の中から眺める程度なのが一般的なのだが、今回はツエルプストー家からの依頼で歩いてゆつくりと回りたいとの要望だった。

南西の大通りを中心部へ向けて歩いて行く。この通りは民家が多く、特に見る物などないと思われるが、領民をまとめるのを仕事とする者にとってはとても興味深い場所でもある。

「匂いがしない……こんなに人がいるのに………」

ミランの後ろを歩いていたキュルケがふとそんなことを呟いた。確かにこれほどの人がいるならば排泄物の量も相当なものになるはずだ。しかしその匂いが全くしない。

「我がエリントン領では地下に大きなトンネルを掘っているんです。家には必ずトイレが設置されているので、トイレからトンネルに繋がって排泄物は地下に溜まっているんです」

「地下に？確かにそれはすごいが、そのままではいつか溢れてしまうのではないか？」

「地下には水脈がありますので、その水脈によって排泄物は常にどこかへと流されています。調べた結果によりますと、どうやらトリステインの方の海に流れ出ているようですね」

この地下下水道を利用しようと思う者達もいるだろうが、一度入ったら最後、地下300メートルから這い上がる術はない。フライを使えば大丈夫かもしれないが、この地下下水道を完全に把握出来る

者などはこの地上にはいないのだ。

最も、地下である箱庭には存在するが。

「それでこんなに匂いがないのか……それにゴミもないようだ。道がこれほどまでに綺麗な街はそうないな」

「ギルドの仕事の一環なんです。子供でも出来る仕事、ゴミを一定量拾ってきたらお小遣い程度のお金を出しているんです」

「綺麗なものは衛生面だけじゃないわ……家の作りも全部統一されている……一体どうしてかしら？」

キュルケの疑問。それは家が全て同じような作りだということだ。壁は中に鉄骨を用いた頑丈な作りで、見た目は石造り。そして屋根は統一して全ての屋根が赤いレンガを用いている。

これは街の外観を考えて設計されたもので、外観に関してはレイチエルから厳しい制限が行われている。

こう言った字状があることを伝えると、キュルケは「へえ……」と関心したように声を漏らしながら赤く染まった屋根を見上げていた。

「着きました。ここが広場です」

南西の大通りから広場に到着したミランがツエルプストー辺境伯に笑顔でそう伝えるが、彼にはその笑顔は眼に入っではないなかった。

「これは……………」

巨大な広場には様々な人達が集まっている。会話を楽しむ領民、慌ただしく動く商人、観光に来たであろう貴族、これから依頼を受けに行く傭兵。

さらには露店や大道芸人達がこの広場に集まっては多くの人を集めている。おそらくこのハルケギニア大陸で今一番人が集まっている場所はここだろう。

ゲルマニア首都でも特別なことがない限りこんなに人が集まることなどありえない。キュルケはこんなに多くの人を見るのは初めてなのか、少し動揺していたが、大道芸人へと目が釘付けになっていた。

「ここから北に向かえばホテル・モスクワと子爵邸があります。今日は長旅でお疲れでしょうからこのままホテル・モスクワへと向かいましょう。最上階スイートルームをご用意しておりますので」

それを聞いたキュルケの体がピクリと反応する。ホテル・モスクワの最上階スイートルーム。これは貴族の間でも噂されている。『一度行ってみる！』これがスイートルームを利用した者達の口癖だ。それを聞いていたキュルケも少なからずホテルには興味を抱いていて、そして今日、その噂のスイートルームに入ることが出来る。これがワクワクしないわけがない。

「これがホテル・モスクワ…………おっきい…………」

地上70メートルなんて建物をこの時代に簡単に見れるものではない

い。キュルケも帝都に行った際に城を見ることはあったが、これは城ではなくただの宿屋なのだ。

入り口まで伸びる緩い傾斜のついた階段を上がっていくと、そこにはガラス製の巨大な扉が待っており、ホテルに一步足を踏み入れると、そこはキュルケにとって別世界だった。

エントランスは多くの人が行き交い、海に向かう者、街に繰り出す者、コロシウムに行く者。この中には商人や平民を多く混じっているであろうに、内装はアルブレヒトの城に勝るとも劣らない豪華さを放っていた。

「いらつしやいませ。ツエルプストー辺境伯御一行様ですね。最上階スイートルームをご用意しておりますので、ご案内いたします」

受付にいた女性にミランが話しかけると、後ろにいたツエルプストー辺境伯に対して完璧な対応を取ると笑顔を浮かべながら皆を先導して向かう。

そして行き着いた先はとある扉。そこがスイートルームなのかと皆は期待しながら入ってみるが、そこはただの何もない部屋だった。

「これはどういったご冗談ですか………？」

10人も入れば埋まってしまうであろう何もない小部屋。そして外壁は全てガラスで覆われている。ここをスイートルームだと言うのなら景色がいいという利点ぐらいであろう。

ツエルプストー辺境伯もそんなに器が小さいわけではない。しかし期待させておいてこのような冗談をされればどんな人でもイラツとするだろう。

「ではこれから最上階へと向かいます」

「一番上に？でも階段なんてないわよ？」

この部屋には階段なんて物は存在しない。なのにどうやって上までいくのか。いい加減からかうのを止めたらどうだという辺境伯の視線を受けながら、案内役の女性は一つのボタンを押した。

「な、なんだっ！？」

「どうしたというの！？」

「ちよつと！？この部屋浮いてるわよ！？」

浮き上がる小部屋、そして徐々に景色が視線の下に下がっていくのを見ながらツエルプストー家の皆は慌て驚いていた。

この部屋、いや場所はエレベータールーム。風石発電を利用した電動式エレベーターの開発をクリフは一人こつこつと頑張っていたのだ。と言うより70メートルものホテルを建てるのだからエレベーターは必須。

モーターぐらいなら作れたクリフはその知識と何度か見たことのある資料を基に完成へとこぎ着けたのだ。

だが所詮は素人が作った物。速度もクリフがいた時代に比べても遅く、それに積載量も少ない。実を言うとおそらくこれが今のクリフの技術の集大成だろう。元々電気を使った分野は難しい知識が多く必要なので、クリフも簡単なモーター程度で精一杯なのだ。

だがそれでもツエルプストー家の皆には十分だったみたいだ。街を一望出来るガラス張りの壁を見つめる三人の顔は輝いている。

「着きました。ここが最上階のスイートルームです」

「す、すっ………」

「……王室並じゃない」

エレベーターの目の前に現れた廊下、その向かいにある扉を開けた先には王室に勝るとも劣らない豪華な部屋が待っていた。

アルブレヒトなどの王族が来ても大丈夫なようにと作られた部屋だ。王室と比べるのも無理はない。

キュルケは驚きのあまりにおっかなびつくり部屋の中に入っていく。入る際に「し、失礼します……」と言うほどに彼女はこの部屋に緊張している。

今日一日は彼女達だけの部屋なので何も心配する必要はないのだが、その様子を見てミランは微笑ましいなと暖かい眼を向けていた。

「凄い眺め……海を一望できるなんて」

「何と言う調度品の数だ……これがすべてただ飾るためのものとは……」

「私達の家より豪華ですわね……」

「元々は王族の方々をお持て成しする際にと用意した部屋ですから、ですがそれだけでは勿体ないので高額ではありますがお金を払えば宿泊できるようにしたんですよ」

「王族のための部屋か……納得だな」

「それでは今日はこれで失礼します。何かご用件がありましたら部屋を出てエレベーターの隣にメイドがいる部屋がありますので、そちらにお申し付けください」

そんな言葉が耳に入らないほどにはしゃいでいるキュルケは下を見下ろしてたびたび声を漏らしていた。

ミランが帰ってからこのスイートルームの全ての部屋を確認し終わった三人は改めてソファに座ってため息を漏らしていた。

「噂には聞いていたが、まさかこれほどまでとは……」

「領地を分け与えたのは失敗だったかしら？」

「いや、私達では到底こんな真似は無理だろうな。それにこのエリントン領のお陰でツエルプストー領にも利益が回ってきている。それで十分だろう」

「そういうもののなの？まあいいわ……それにしてもこのソファがふかね。どうやって作ってるのかしら」

「キュルケ、それを言ったらこっちのベッドも凄いわよ」

三人は興味津々に部屋の物を物色している内にいつの間にか日は赤く染まり、夕焼けが海を赤く染めて輝いている。その様子をみて再びキュルケ達は言葉を失い、辺境伯はメイドを呼び寄せてワインを飲みながら日が落ちるのをただじっと見つめていた。

そして完全に日が落ち、海に星の光が映るころ。三人の部屋には

食事が運ばれていた。

「これが噂に聞く数々の料理なのね……やっぱり全部見たことないわ」

「いいから食べましょう？ 私は早く食べたくてしかたないわ」

ツエルプストー夫人がどれも見たことのない数々の料理に驚きの声を漏らしていると、横にいたキュルケがご飯をねだる子供のように待ちきれないと言い出す。

それは辺境伯も同じだったのか、夫人の方を見ながらそろそろどうだ？と言ったような視線を向けている。

「そうね、じゃあいただきますようか」

そうして始められた食事、キュルケはすぐさま食事に手をつけているが、大人二人は未だに警戒したような手つきで料理にナイフを入れている。

恐る恐るながら口に運ばれた料理、しかしそれは警戒など杞憂、いや、警戒していたことなど忘れさせられるほどに美味だった。

全員が舌鼓を打ちながら嬉々とした表情で料理を平らげていく。本来の貴族の食事というのは静かに礼儀正しくというのが基本だが、今のツエルプストー家の食事は楽しそうに料理の話をしながら皆が笑顔で食卓を囲んでいる。

それは確かに貴族らしくはないが、とても家族らしい食卓だったという。

「それにしても何から何まですごいわねえ、このホテル・モスクワって」

食事を終えた三人は少したった後にメイドから下の温泉を貸し切りましたとの報告を受けてエレベーターで一階にある温泉へとむかった。

体を洗い、そして様々な湯船を試した後にキュルケは一人露天風呂へとやって来ていた。

この露天風呂、クリフは海を一望しながらゆったりと温泉に浸かれることを狙って作った物で、会心の発明だと思っていたが、こういった物が日本にあるというのは知らなかったようだ。

「外でお風呂ってのはどうかと思ったけど、これなら誰にも見られる心配はないわね」

露天風呂を上から見れる客室はなく、また窓もない。元よりそう設計したのだから見れるはずもない。

そして男湯と女湯の仕切りは日本情緒のような物は一切ない金属製の高い壁だ。そして温泉から少し身を乗り出して見てみると、そこは崖となっていた。

そしてその崖にはクリフの先住魔法がかけられているのでフライで上ってくることも出来ずまた上から降りてくるのも然り。、例え素手で上つてこようとする猛者がいたとしても崖は補強ついでにとクリフがネズミ返しのような物にしまったので手をかける場所すらない。

これで女湯を覗ける物はおそらく遠くから飛竜に乗ってくるぐらいしか可能性はないだろう。

まあそんな先住魔法などの裏事情をキュルケが知るはずもないが、これだけ嚴重ならば大抵の者は安心するだろう。

「それにしても気持ちいい……疲労回復とか色々な効果があるって聞いたけど、これはホントに病気も治りそうねえ……」

完全に緩みきった顔で湯に浸かるキュルケは眼を閉じて海のさざ波の音を聞きながら疲れた体を癒していた。

翌日、ホクホクとした表情でホテルの前にいるツエルプストー家の三人。どうやらホテル・モスクワは好印象を残せたらしい。

それが表情から確認出来るぐらいなのだ。おそらくとても満足してもらえたのだろうとミランは笑みを溢しながら今日の街案内へと足を進めた。

「ホテル・モスクワ……想像以上、評判以上だった。よければまた来てもいいだろうか？」

「お客様としてならいつでもお待ちしておりますよ」

「エリントン夫人、今日はどこから回るのかしら？」

「街の西側にあるギルドとコロシウムに行こうと思います。なんと
言ってもこの街の看板ですからね」

そう言いながらギルド通りを歩いて行く。ここはモスクワ通りの
ような優雅な店やお洒落な場所などとは縁遠く、声を張り上げて客
引きをする酒場、無骨な剣が店頭に並べられた武器屋。

見かける人々も礼儀作法のかけらもないような者が多い、しかし
この通りにいる者達はこの街で一番明るく、輝いている。

街を守るといふ正義のために、最強になるといふ夢のために、一
攫千金を狙うために。そんな者達の光に満ちた眼はツエルプストー
辺境伯をも感化させた。

元々軍閥の家系のツエルプストー家。これほどまでに猛者達が集
まれば武人として血が沸き立つのも無理はない。

「あなた。今日は視察に来たって事を忘れないで」

「う、うむ……分かつている」

「それではギルドに到着しましたので、中の方でお話したいと思っ
ます」

光の塔……その名に恥じぬ輝きを放っているギルド本部はこの街
を守る要でもあり、力を求める者達の憧れの場所。

外は光、中は純白。ツエルプストー辺境伯はキョロキョロと辺り
に眼を向けながら関係者用の階段を上っていった。

たどり着いた先はギルドマスターの部屋。ミランがソックをする
と「入りな」とぶつきらばうな声が中から聞こえてくる。

ミランに連れられて入った三人は広い部屋に置かれた重厚な机に
向かう女性に釘付けになっていた。

「何なんだい、その後ろの連中は」

机に頬杖を突きながらこちらに眼を向ける緑髪の女性。その射貫くような鋭い視線と力強い瞳。

それに臆したわけではない。ただ三人は目の前の女性の無礼などどうでもいくらいにその眼に見入ってしまった。

ギルドという数百人以上の人間のトップに立ち続けたことで、人をまとめるカリスマ性や覇気といったものが身についたのだ。

「こちらはお隣のツエルプストー辺境伯ですよ。そしてツエルプストー辺境伯夫人と娘さんです」

「そうかい……とんだご無礼を。私はフーケ、先ほどは無礼な振る舞いをしてしまい申し訳ありません」

「い、いや、いいんだ。気にしないでくれ。……それにしてもここは凄いな。どうやってたらこのような建物が作れるんだ？」

「仲間の一人に建築を得意とした者がいるのです。その者はこのギルドだけでなくホテル・モスクワやアーリア港の建設にも携わっています」

先ほどとは打って変わって友好的な態度を取るマチルダ。その洗練された仕草はツエルプストー辺境伯も貴族と見まごうほどに手慣れた動きだった。

握手をして少し言葉を交わしていた二人だったが、ここで一人の秘書がギルドマスターの部屋の扉を叩く。

「失礼します……来客中でしたか？」

「ツエルプストー辺境伯、ちょっと……」

「ああ、構わない」

「ありがとうございます。それで、何の用だい？」

秘書は「そろそろお時間です」とだけ口にする。ツエルプストー家の三人は何のことだかさっぱりだが、マチルダはそれを聞いて納得したように首を振る。

そして秘書を下がらせるとマチルダは三人の方へと向き直り笑みを浮かべた。

「これから闘技大会の予選があるのですが、ご覧になりませんか？」

満員御礼のコロシウム。聞き慣れた声援が今日はやけに耳に刺さる。それもそうだろう。

今日は一ヶ月後に迫った闘技大会の予選なのだ。いかせん数百の人間がいるため全員を含めたトーナメントを行える訳もない。

そのため予選トーナメントを行って50人まで参加者を振り落とすのだ。

「凄い活気だな……肌に直接伝わってくるぞ」

「あつ、お父様、始まるわよ」

出てきたのは二人の剣士。二人とも若い傭兵のようで、まだ真新しい鎧を身につけている。予選の初戦なのだ。これぐらいが妥当であろう。

互いに構えた剣。そして熱狂に包まれたコロシウムの中で唯一静寂に包まれた二人の間は、『始め！』の声によって殺気へと変わった。

「うおおおおー！！」

「はああああー！！」

甲高い音を響かせながら交差する二つの刃。魔法に比べれば味気ないだろう。マチルダに比べれば赤子同然だろう。コロシウムに通う観客達にとってもそれは地味な戦いとしが写らない。

しかしツエルプストー辺境伯は違った。

（あの剣筋……ただの傭兵風情の剣じゃない。誰かの元で鍛えているのか？平民の喧嘩ごっこと思っていたが……よもやこれほどまでとは……）

ツエルプストー辺境伯は一人この勝負のレベルの高さに焦っていた。しかし周りはどうだろう。正直言つて観客達に言わせればせいぜい中堅の下あたりといった見解だ。

おそらくあの二人対メイジならメイジはどちらか一人に傷を負わせる事は出来ても倒すことはまず無理だろう。そんなレベルがここでは普通とされているのだ。

ツエルプストー辺境伯の心に募る不安。それは次の試合になっても、そのまた次の試合になっても振り払うことは出来なかった。

「いかがでしょうか？我がコロシウムは」

「ん？ああ、すばらしいな。それに質の高い傭兵達が集まっている」

色々と考え事をしていたツエルプストー辺境伯にマチルダが不意に話しかける。ツエルプストー辺境伯は考え事をしていたのをごまかせた氣でいるが、マチルダはそんなこと当然氣付いていた。

ツエルプストー辺境伯が何を考えているのかは分からなかったが、これ以上ここにいるのも無駄だろうと考えたマチルダは「そろそろ戻りましょうか」と言って席を立った。

「凄かったわね……あれじゃドットやライン程度のメイジならやられちゃうかも……」

そんな感想を漏らすキュルケはあの大歓声と興奮の中にいたせいか、少し疲れてやつれたような表情を浮かべている。

「お疲れのようでしたら少し休みましょうか？そろそろお昼ですし」

「いえ、大丈夫ですよ。私も早くアーリア港を見に行きたいですから」

中央広場からアーリア通りに差し掛かった辺りでミランはある人

物を見つけてその人に対して大きく手を振った。

その先にいたのはレイチエル。どうやらアーリア港の視察はレイチエルが同伴するらしい。

「昨日はご案内することが出来ずに申し訳ございません。エリントン領の領主、レイチエル・ド・ヴァルデス・リニー・エリントンです」

「いや、急な訪問をしたこちらこそ申し訳ない。……それにしても随分と大規模だな。確かに観光の目玉にはなるだろうが、漁港としては大規模すぎるのではないか？」

「ここは漁港としてだけでなく、客船などが来港できるような港にするつもりなのですよ。まあ、それは当分先の話ですけどね」

「そうか………すまんがお前達は先に行っててくれないか？私は少しエリントン子爵と話したいことがあってな」

「分かったわ。キュルケ、行くわよ。ミランさん、案内をお願いできるかしら？」

「分かりました。ではこちらへ」

去って行く三人と残った男二人。残された辺境伯はレイチエルの方を見て真剣にあることを尋ねる。

「この領地は我がツエルプストー領……いや、ゲルマニアに大きな利益を生むだろう。だが、どうやったらこんな大きな街がほんの半年程度で出来るのだ？」

そしてお前は何を考えている？私にはそれが分からない。忠誠を

誓っているのか、それともそれは見せかけの忠義なのか。……お前は何者だ？」

建設途中の漁港に響く男達の声に混ざってツエルプストー辺境伯の鋭い声が消えてゆく。睨みつけるようにレイチエルを見定めようとしているツエルプストー辺境伯の眼に溢れる威厳と覇気。

それはアルブレヒトやマチルダに似たものだった。その視線を受けてレイチエルはぼつりぼつりと言葉を紡ぐ。

「忠誠は……誓ってないかもしれませんが。私はたまたま陛下の目に留まったただの商人なんです。そして商人だった頃の情報網や交友を使ってここまで大きな街を作ることが出来た。

でもそのために陛下に桁違いの借金をしているんですよ？まだまだ返済にはほど遠いですが、ようやく返せる目処が立ってきました。正直に言って私は平和でお金があればどの国でもどんな身分でもいいんです。ただ一生懸命働いていたら、いつの間にかこんな場所にいただけなんです。」

困ったような笑みを浮かべながらそう言ったレイチエル。陛下の目に留まった、商人だった頃の交友などは嘘だが、最後に言った言葉は嘘偽りない正直なレイチエルの気持ちだ。

ただミランと一緒にいることができれば、クリフやマチルダに恩を返せば、ただそれでよかったのだ。

「……………」

その言葉を聞いてツエルプストー辺境伯は顎に手を当てて一人考え込んでいた。

そして結論が出たのか、レイチエルに歩み寄った彼は右手を差し出して笑みを浮かべる。

「失礼なことを聞いてしまったな。済まぬな、疑ったりなどして」

「いえ、素性の知れない者がいきなり隣の領地を持ったんです。警戒なさるのは当然のことかと」

「そう言ってもらえると助かるな……」

握手を交わす二人はお互いに笑みを浮かべながらこれからの友好を確かめ合う。こうして二人は肩を並べて先に待つ女性三人の元まで歩いて行った。

辺りはすっかり夕暮れに包まれ、エリントン領から伸びる街道に一台の馬車の音がリズム良く鳴り響く。
中にあるツエルプストー家の面々は満足した表情で夕焼けを映す畑を眺めていた。

「最初から最後まで凄かったわよねえ、本当に」

「機会があつたらまた行きたいものだな」

満足そうに呟くキュルケと同じような表情を浮かべてそれに返す辺境伯。だがふと思い出したように夫人が眼を少し見開くと、辺境伯に戸惑いながらもあることを聞いた。

「あなた、それでエリントン子爵は一体何者だったのかしら？」

今回の視察の目的、それはレイチエルと言う人間を見極めるということだった。そしてアーリア港で自分達を先に行かせてエリントン子爵と二人だけの状況を作った時にはたして何を話したのか、それを夫人はずっと気にかけていた。

しかし夫人の表情とは反対に辺境伯は笑みを浮かべながら赤く染まった大地を見て「問題ない」と呟いた。

「どうしてそう言えるのです？」

「確かにあの者の素性は知れない。だが、あのものは戦いを好むような輩ではないし、そのために自分達の領民を売るような真似も絶対にしない。そう思ったのだ」

なんと不明確な理由、だが夫である人物のその穏やかな表情を見ていて夫人は辺境伯を信じることしか出来なかった。

閑話（後書き）

最近バイトやらインターンシップやら色々忙しいので更新出来ません。

十四話

捜査開始から早くもクリフに情報が舞い込んできた。それはリレイヤからの裏商人を通じて得られた情報。

何でもアルビオン行きがある港に色々な物資を運んでいる業者があるらしい。それは最近出来たばかりの業者らしいのだが、それにしては随分と規模が大きい。

裏の間でも噂になっていたらしく、その情報はすぐにリレイヤの元に届くとクリフへと報告される。そしてクリフはギルドの中でも隠密行動を得意とした傭兵にその業者の出元を辿るように依頼すると、それはすぐに見えてきた。

おそらくゲルマニアのレコン・キスタのトップ、それはロウルズ侯爵。

確かに彼はのし上がったアルブレヒトを良くは思っていない人物であり、皇帝の座を狙っているとも噂されている人物だ。動機は十分にある。

おそらく主犯はこれで確定。しかしこの結果にクリフは頭を悩ませた。

「領地……………お隣さんって……………これ……………」

ゲルマニアの北西の角に位置するエリントン領、そして内陸へと伸びる街道は隣のロウルズ領を通って首都ヴィンドボナへとたどり着く。

つまりもしロウルズ侯爵が反旗を翻した場合、首都からの応援は

望めない。挟み撃ちも可能であるが、ロウルズ侯爵以外のレコン・キスタ、ロウルズ侯爵の仲間がどこに、どの程度いるのか全く掴めてはいない。

それにロウルズと言えばゲルマニアでも屈指の名門だ。兵の数もトリステイン対策のためにツエルプストー辺境伯と同じ、いやそれ以上と聞いている。これは首都の騎士団でも苦勞するはめになるはず。

首都防衛に手一杯になるであろう騎士団。そんな彼らが辺境のエリントン領のために兵を出してくれるか？

「もし戦いが始まれば孤立無援……かといって放置していても兵力を蓄えられてしまうだけ……まずいな。マチルダはどう思う？」

「いざとなればギルドも手を貸すし、それに箱庭もある。市民はトリステインにでも亡命させればいいじゃないか」

「レイチエルやミランが逃げてくるのは構わないけど、傭兵なんて野蛮な奴らがこの箱庭に押し寄せてくるのは勘弁願いたいわよ。私としては箱庭に変な先入観とかを持つてる大人は入れたくないの」

「僕も箱庭に逃げるのは無理かと……。第一入り口が一人ぐらいしか通れないので大量の人を移動させるのは無理です。もし戦いになれば亡命させるのが一番かと」

エリスの屋敷で話を進めるこの件の代表者のクリフ、箱庭代表のエリス、ギルド代表のマチルダ、エリントン領代表のレイチエル。

この四人が集まって今後の行動についての方針を決めている最中なのだが、どうにも話がまとまらない。

というより時期を何時にするかという話だ。

遅かれ早かれレコン・キスタはこの国でも革命を起こそうとする。だがまだその時期ではない。

だから相手の準備しているうちにこちらも色々と準備をするか、早期に叩くことで準備もこれからの勢力拡大もさせないのか。

マチルダとしてはいつでもいい、ギルドの人間も手伝わせれば負けることはない。

エリスとしては面倒事はこの箱庭に持ち込むな。

レイチエルとしては市民のことも考えて時期を遅らせて欲しいとのことだった。

「一応陛下にも報告は入れといたけど……結局はあの人はどう判断するかだしな。マチルダは傭兵達に命令をだせる準備を。レイチエルは無理かも知れないけど出来るだけの準備をしろといってくれ」

このような会話から三日後。事態は思いも寄らぬ速さで転じることとなった。

三日後の朝、クリフは連絡を頼んでいた精霊が持ち帰った情報を聞いて我を疑った。

『アルブレヒトがロウルズ侯爵に宣戦布告を出した』

この下級精霊、人の言葉は理解できても字までは理解に及ばない。故にロウルズ侯爵から他のレコン・キスタの面々の情報を聞き出すことが出来なかったのだが、今となってはどうでもいい。

どうやら他の貴族の領に送っていた精霊達からも続々と情報が集まってきた。アルブレヒトの宣戦布告の内容はロウルズ侯爵のレコン・キスタとしての謀反という詳しい理由まで書いてあり、全てを知られていると悟った各地のレコン・キスタ達が相次いでアルブレヒトのいるヴィンドボナに向かっているそうだ。

だがそれだけだ。それだけなら良かったのだ。

「ヴィンドボナより東のレコン・キスタは首都を目指していますが、ロウルズ侯爵率いる西の軍勢はこちらを目指していますか……最悪ですね」

精霊から得た情報を元にレコン・キスタと仲間の貴族の位置を地図の上に示してみるが、どうやら軍は東と西で二つに分かれ、違う場所を狙っているらしい。

そして例のロウルズ侯爵は西、つまりエリントン領とツエルプストー領を目指している。

ロウルズは分かっているのだろう。東の軍勢だけではヴィンドボナの騎士達には勝てないことを。

確かに東と挟み撃ちを行えば何とか首都を陥落させることは出来るだろう。しかし自分達の後ろにはゲルマニアの雄、ツエルプストーと最近勢いに乗っているエリントンが控えている。

そしてこの両家の仲は良好だ。おそらくロウルズが両家に背を向けた瞬間に牙を剥くに違いない。

ならば首都は東の軍に任せてこの両家を叩いた方がゲルマニアに

与える影響は大きい。ツエルプストー家がなくなればトリステインとの国境は素通りになるし、エリントン家を潰せばゲルマニアの経済に少なからずの影響を与えることが出来る。

そして討ち取った後はそこを通じてトリステインに逃げた後にアルビオンへと逃げる。東の軍は負けるにしろ首都に影響を与えるはずなのでゲルマニアが今の調子を取り戻すにはかなりの時間がかかる。

その内にアルビオンを攻め落とし、立て直し中のゲルマニア、そして弱小のトリステインへと進行すればよい。

なんとも理に叶った作戦だ。

「ツエルプストー辺境伯から協力要請が来てるよ。まあこつちもさつき協力要請を出したからそれを返事とすればいいさ」

「とりあえず横やりを入れられる恐れはなくなった。……でもなんであの陛下はこんなにも早くに宣戦布告を出したんだろう……」

「戦力をそろえられる前に叩く、それだけではないとクリフさんは思うのですか？」

「おそらく大々的に宣戦布告を発表したのは隠れている名前の割れていないレコン・キスタ達を焚きつけるため、こうまで事細かに宣戦布告の理由を叩きつけられればある程度のがばれているのは分かっているはずだ。

そして一人でもレコン・キスタが捕まればそこから芋づる状に情報が陛下の手に渡る。なら最初から攻めた方が得策だ」

「国内の膿を一気にそぎ落とすために大々的にした……そういつことかい？」

「あの陛下なら暗殺だって可能だったはずなんだけどな。まあいいさ、もう内乱の火蓋は切って落とされたんだ」

エリントン邸宅にて集まったクリフ、マチルダ、レイチエルは顔を見合わせて強ばった表情を浮かべている。

「クリフさん……一ついいですか？」

ずっと苦い表情を浮かべていたレイチエル。だが彼はクリフとマチルダが口を閉じたのを見計らってその顔を上げた。

そこにいつもの彼の表情はない。ましてや先ほどの苦湯を飲まされたような表情でもない。

怒りに燃えたような瞳、そして背中から漏れる怒気。

それを見てマチルダとクリフは驚愕と共に息を呑んだ。

彼はこんなにも怒りを表す人間だっただろうか？何があっても困ったような表情を浮かべるだけの温厚な男ではなかったか？

だが今の彼はどうだ。膝に置かれた拳は怒りに震え、固く閉ざされた口の中はきつと歯が食いしばられているだろう。

「この戦いの指揮……僕に任せてはもらえませんか？」

「……どういう心情の変化だい？虫も殺せないようなあんたが戦争の指揮をしたいと名乗り出るなんて」

「僕は……この街が好きなんです。最初は確かにミランを助ける代償としてのただの労働……そう思っていました。

こんな難しくて、辛くて、上手いかない仕事なんて逃げ出したかった。でもミランのためにそれは出来なかった。

最初はそんな風に思ってたよ」

嘲笑するような笑みを浮かべながら二人に言うレイチエル。しかし二人はその言葉をただ黙って受け止めている。

「でも、仕事の仕方が分かってきて、視野が広がってきたときに分かったんです。この街が。

朝の大通を通る人は皆笑顔で仕事に向かい、夕方になるとクタクタになりながらも仕事仲間と一緒に笑みを浮かべて家に帰って行く。傭兵達もそうです。レイベルにいたようなゴロツキじゃない。皆笑顔を浮かべながらギルドへと向かって行きます。

この街は今育ってきているんです。何もない平野を傭兵達が切り開き、そこに市民が住んで生活の循環が形成される。

そして今それは大きく成長しようとしているんです。まるで生まれた赤子がその小さな足で立つかのように……………。

変な例えなのは分かってます。けどこれは僕とミランが育てた子供、その子供を殺そうとしている者がいる……僕はそれが許せないんです」

覚悟の眼。それを見てクリフはレイチエルを見誤っていたことに気付く。

今までのクリフの評価は嫌々ながらも頑張ってくれる青年。言ったことを忠実に守ってくれる人材。好印象ではあったがクリフにとっては言ったことを守ってくれる部下に過ぎなかった。

だが最近の彼は自分の意志を持って行動し、時たまクリフを驚かせていた。そして今レイチエルは今まで誰にも見せたことのない怒りという感情を表している。

「だけどそれはあんたが人を殺す命令を出すってことだ。守るため、

殺されないため、名目は立派でも結局は殺人になる。

あんたはその命令を出して、戦場へ向かっていく者達が殺し、殺される姿を見る覚悟はあるのかい？」

「戦場の指揮なら俺がやってもいい。元々俺は軍隊にいたんだし、それにエリントン家の家臣って身分になってる。俺が指揮を執るのは何も不自然じゃない。

レイチエル……お前はまだ綺麗なままでもいられるんだぞ？」

レイチエルは優しい。己を犠牲にするほどに。

ミランを助ける時もそうだった。己の身を犠牲にしてまで彼女を助けたいと申し出る。そんな底なしに優しい男。

そんな男が殺しをしたいなどと言うわけがない。例え激怒していたとしても彼は敵にも優しさを見せるまでに甘い男のはずだった。

「そう……ですね、確かにそうかもしれないです。けど僕は自分の手でこの街を守りたいんです」

そこには覚悟の眼。レイチエルがどんな覚悟を決めたかは分からない。だが、二人はその眼を見てレイチエルにこれ以上何を言っても無駄ということに気付く。

「そうかい……なら指揮はあんたに任せるよ。とりあえずあんたは仕事に戻りな。ミランにもこのこと話さなきゃならないだろ？」

「分かりました。それでは僕はこれで……」

軽い礼をしてから部屋を出るレイチエルを見送ると二人は顔を見合わせて感慨深いと言った表情を浮かべていた。

「まさかレイチエルからあんな言葉が聞けるとは思っても見なかった」

「私だってそれは同じだよ。最初は威厳を保つためにレイチエルを形だけでも指揮を任せるって話だったのに……人は成長して行くもんなんだね」

「あの様子なら本当に指揮を任せても大丈夫そうだな。それに指揮はツエルプストー辺境伯との同盟軍だからあちらの指揮もある。俺達で頼み込んでツエルプストー辺境伯にフォローして貰えばなんとかなるさ」

「そうだね。……それじゃあ今度は具体的な話でもするかい？とりあえず警備隊からはどれぐらいの兵が出せる？」

「多くても警備隊に所属する者は約1500人。そして最低限の街の警護も考えて出せるのは1000人が限界って感じさ。ギルドの方はどうなんだ？」

「こっちは登録人数は多いが今回は紛争だからね……いくら集まるかどうか。はつきりとは断言できないよ。多くて500……そんなところさ。ギルドは依頼を仲介する場所だ。紛争への強制招集なんて真似は絶対に出来ないよ」

大体の見積もりは1500人。そしてこの前調べたツエルプストー家の情報によればあちらは2500人ほどの戦力を保有しているらしい。

さすがはトリステインとの国境の要でもあるが、対するロウルズ侯爵の戦力は3000を越えると言われている。首都の防衛と侯爵としての歴代の地位がこれほどまでの信頼と戦力を集めていたのだ

が、それが仇となるとは。

そしてそこにはレコン・キスタ達がさらに集まり、戦力が5000を超えるのも不思議ではなくなってしまう。

「戦力ではあちらが上、こちらに有利なのは地の利だけか……」

「けどこの平野に地の利も何もないだろう。まさか闇の森まで引きずり込むなんて出来るわけもない……」

「分かってるさ、けどせめて狭いところにも誘い込めれば……そうだ」

突然と笑顔を浮かべるクリフ、その様子をみてマチルダはまた何か企みを思いついたのかと苦い表情を浮かべる。

クリフの思いついたことは確かに実用性も高いし、使えるのだが、毎回マチルダは疲れる立ち位置にいたのであまりクリフの考えを聞きたくないと思っているのが本音だ。

だが今はそんなことも言ってられない。マチルダはため息をつきながらクリフにどうしたのかと尋ねた。

「地の利がないなら罠を作ればいいのさ」

「罠？今からかい？」

確かに罠は有効な手だが、あと三日も経てば確実に攻め込んでくるであろう敵を前に罠なんて作っている場合ではない、それに偵察部隊に罠を見られればそれでもうお仕舞いだ。

「見つかるように作るわけないさ。地下から作るんだよ」

そう。クリフは地面に設置する罠を地上からではなく地下から取り付けるというらしい。

それならば敵に動向を探られる危険性もない、しかし大量の魔力を消費するということも同義だ。

勿論クリフ一人で対5000人の罠を三日で設置しきれるというのならマチルダには何の支障もないのだが、そんなことが出来るはずもなくマチルダは手伝うのが目に見えていた。

だが彼女にはギルドの方を取り纏めるという仕事も残っている。答えを洩るのしようがない。

「……………」

「相手はこちらより多い上にこちらは本格的な戦いは初めての経験なんだ。普通にやって勝てる相手じゃない。それはマチルダも分かっているだろう?」

「そりゃ分かっているけども……ギルドの方はどうするんだい?」

「優秀な部下がいるじゃないか。それにどうせ強制はできないんだから張り紙でもしておけば十分だよ」

「……………はあ、分かった。出来る限りのことはする。けどだからと言って面倒事をこれ以上持つてこないでくれよ?」

「分かっているよ。……それじゃあ、早速行きますか」

席を立つ二人。勿論向かう先はこれから戦場になるであろう場所。クリフ達を襲う初めての脅威、その火ぶたが切って落とされる

十四話（後書き）

やっと忙しいのが終わった……..
ぼちぼち再開かな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3663m/>

【テファの使い魔】

2010年10月9日12時09分発行